上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集

一丁田遺跡
ヒエ田遺跡

—土地改良総合整備事業南条地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1989. 3

長野県下伊那郡上郷町役場産業課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

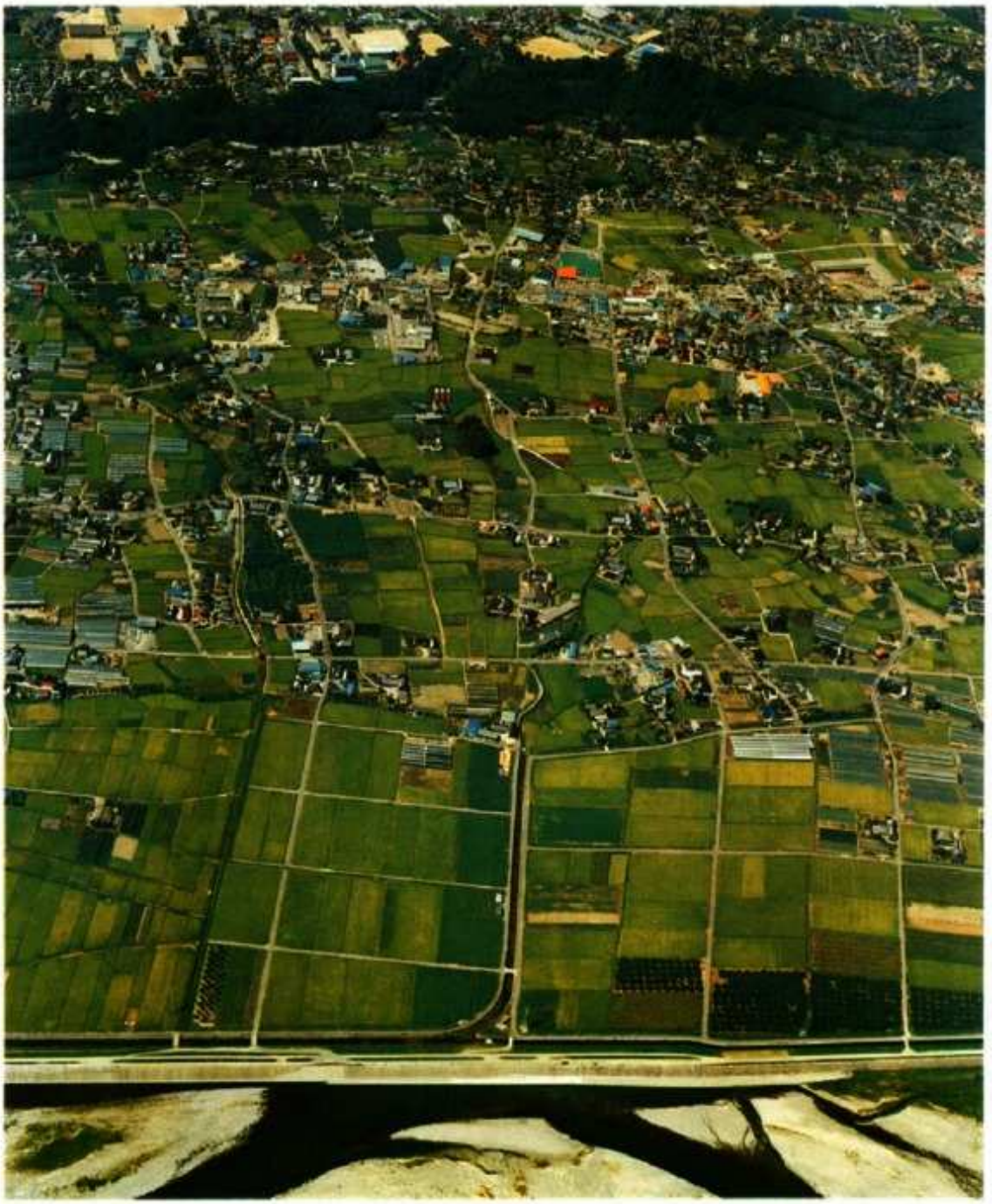
上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集

一丁田遺跡
ヒエ田遺跡

—土地改良総合整備事業南条地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1989. 3

長野県下伊那郡上郷町役場産業課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会



一丁田・ヒエ田遺跡全景

序

昭和60年度から着工した土地改良総合整備事業、南条地区の工事も４年目を迎え遺跡の調査も最終年度となりました。

調査は60年度と61年度に下田圃工区の棚田遺跡を調査していただき、既に発掘調査の報告書も発行されておりますが、62年度に着工した中部工区の一丁田遺跡は、調査は62年度に於いて実施をお願いしましたが、報告書の発行については63年度事業として１年送りましたので、本年度工事を実施しました大南工区の区画整理工事に先だちまして調査をお願いしましたヒエ田遺跡の調査報告書と併せて発行していただくことになりました。

一丁田遺跡については、用水路であったと思われる杭列が出土し、付近一帯は農耕地であったことが窺われましたが、ヒエ田遺跡については大きな沼地であったのであろうが、岸辺が古代住民の生活の場であったと思わせるバットを２ツつないだような杵が出土するなど、生活についての様子に果てしない夢が膨らんでまいります。面的な広がりのある区画整理事業のため、発堀量も大きく大変な作業であるにもかかわらず予定通り各工区の工事を進めることが出来ましたことは、一重に今村調査団長を始め発堀調査に従事されました作業員の皆様方の御尽力の賜と深く感謝をいたしますとともに、両遺跡の報告書がここに発行出来ますことに対しまして厚く御礼を申し上げます。

平成元年３月

上郷町長　山　田　隆　士

例　　言

1．本書は、土地改良総合整備事業南条地区工事中部工区に伴う上郷町飯沼「一丁田遺跡」、大南工区に伴う上郷町飯沼「ヒエ田遺跡」の緊急発掘調査報告書である。

2．上郷町教育委員会が組織する上郷町遺跡発掘調査団が、一丁田遺跡に関しては昭和62年度に発掘調査、昭和63年度に整理作業及び報告書の作成、ヒエ田遺跡に関しては昭和63年度に発掘調査・整理作業及び報告書の作成を行なった。

3．発掘調査・整理作業等は併記の記号によって実施した。

一丁田遺跡－ＩＣＤ　　ヒエ田遺跡－ＨＥＤ

4．本書は昭和63年度中にまとめることが要求されており、できるかぎり資料呈示することを編集方針とした。

5．本書を作成するにあたっての作業分担は以下のとおりである。

①一丁田遺跡

遺構実測－今村善興，米山義盛，林　貢　図面修正－今村善興　遺構製図－今村善興

遺構・遺物写真－今村善興　遺物実測－林　貢，福田千八，遺物製図－今村善興

②ヒエ田遺跡

遺構実測－山下誠一，吉川金利，小林百合子，久保田祐子　図面修正－吉川金利

遺構製図－上沼文代，篠田せい子，高橋美鈴，村沢千代江　遺構写真－山下誠一

遺物拓影－中原友江，古林登志子　遺物実測－山下誠一，吉川金利，市瀬禎子，久保田祐子

遺物製図－山下誠一，吉川金利，市瀬禎子　遺物写真－吉川金利

6．本書は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－１・Ⅳを今村善興、Ⅲ－２を山下誠一が執筆し、編集は調査員の協議により山下誠一が行った。

7．本書に関連した遺物及び記録・図面類は、上郷町教育委員会が管理し、上郷町歴史民俗資料館で保管している。

本 文 目 次

序

例 言

Ⅰ 経 過……1

1．調査に至るまで……1

2．調査の経過……1

1）一丁田遺跡……1

2）ヒエ田遺跡……2

3．調査組織……3

1）上郷町埋蔵文化財調査委員会……3

① 規 約 ② 役職員

2）上郷町遺跡発掘調査団……4

Ⅱ 遺跡の立地と環境……5

1．自然的環境……5

2．歴史的環境……7

Ⅲ 発掘調査の結果……10

1．一丁田遺跡……10

1）遺跡の概要……10

2）遺構と遺物……12

(1) 溝址1……12

① 遺 構 ② 遺 物

(2) 溝状遺構……14

① 遺 構 ② 遺 物

(3) 溝址2……14

① 遺 構 ② 遺 物

(4) 溝址3……17

① 遺 構 ② 遺 物

(5) 水 路……17

① 遺 構 ② 遺 物

2．ヒエ田遺跡……25

1）発掘調査の概要……25

2）層 序……25

① A 区　② B 区　③ C 区
3）遺　構……30
(1) A 区……30
① 11層上面　② 溝址1
(2) B 区……34
① 溝址3　② 溝址4　③ 溝址5
(3) C 区……36
① 溝址2、杭列1・2　② 自然木・木器包含層
4）遺物……43
(1) 土　器……43
(2) 石　器……43
(3) 木　器……43
① 木杭　② 竪杆　③ 田下駄　③ 有孔板　④ 棒状木器
5）小　結……45
Ⅳ 発掘調査のまとめ……46
1．南条中部地区の遺跡範囲……46
2．低湿地遺跡の問題……47
3．古代東山道の推定通過地に関わって……48
後　記

挿　図　目　次

挿図1　一丁田・ヒエ田遺跡位置図……6
挿図2　国道153号線周辺遺跡図……9
挿図3　南条地区中部工区遺跡・遺構位置図……11
挿図4　ICD　溝址1・ピット1～4・溝址2……13
挿図5　ICD　溝址3・水路木杭出土位置……15・16
挿図6　ICD　水路土器・陶器出土位置図……19・20
挿図7　ICD　B地区グリッド土層図……21
挿図8　HED　発掘位置図及び周辺図……22
挿図9　HED　遺構全体図……23・24
挿図10　HED　A区　土層図……26
挿図11　HED　B区　土層図……28
挿図12　HED　C区　土層図……29

挿図13　ＨＥＤ　11層上面……31・32
挿図14　ＨＥＤ　溝址１……33
挿図15　ＨＥＤ　溝址３……34
挿図16　ＨＥＤ　溝址４・５……35
挿図17　ＨＥＤ　溝址２、杭列１・２……37・38
挿図18　ＨＥＤ　Ｃ区西側　自然木など包含層（１）……39
挿図19　ＨＥＤ　Ｃ区西側　自然木など包含層（２）……40
挿図20　ＨＥＤ　Ｃ区西側　自然木など包含層（３）……41
挿図21　ＨＥＤ　Ｃ区南側　自然木など包含層……42

図　版　目　次

第１図　ＩＣＤ　溝址１・溝状遺構出土土器、水路２出土陶器……49
第２図　ＩＣＤ　水路出土土器・陶器……50
第３図　ＩＣＤ　水路出土陶器拓影……51
第４図　ＩＣＤ　溝址・水路出土石器、水路出土木杭……52
第５図　ＨＥＤ　出土土器……53
第６図　ＨＥＤ　出土石器……54
第７図　ＨＥＤ　杭列１出土木器(1)……55
第８図　ＨＥＤ　杭列１出土木器(2)……56
第９図　ＨＥＤ　杭列１出土木器(3)……57
第10図　ＨＥＤ　杭列１出土木器(4)……58
第11図　ＨＥＤ　杭列１出土木器(5)……59
第12図　ＨＥＤ　杭列１出土木器(6)……60
第13図　ＨＥＤ　杭列１出土木器(7)……61
第14図　ＨＥＤ　杭列１出土木器(8)……62
第15図　ＨＥＤ　杭列１出土木器(9)……63
第16図　ＨＥＤ　杭列１出土木器(10)……64
第17図　ＨＥＤ　杭列１・２出土木器……65・66
第18図　ＨＥＤ　杭列１・２出土木器……67
第19図　ＨＥＤ　杭列２出土木器(1)……68
第20図　ＨＥＤ　杭列２出土木器(2)……69
第21図　ＨＥＤ　杭列２出土木器(3)……70
第22図　ＨＥＤ　出土木器(1)……71

第23図　ＨＥＤ　出土木器(2)……72
第24図　ＨＥＤ　出土木器(3)……73

写真図版目次

図版１　調査前の南条中部工区南から　調査前の南条中部工区北から
図版２　ＩＣＤ調査区２・３　ＩＣＤ調査区３
図版３　ＩＣＤ溝址１と土壙
図版４　ＩＣＤ溝址２
図版５　ＩＣＤ水路杭の出土状況（南から）
図版６　ＩＣＤ水路杭の出土状況（北から）
図版７　ＩＣＤ水路杭の出土状況南側上層　ＩＣＤ水路杭の出土状況北側上層
図版８　ＩＣＤ水路杭の出土状況合流点付近下層　ＩＣＤ水路杭の出土状況合流点北下層
図版９　ＩＣＤ出土須恵器・土師器・石器　ＩＣＤ出土陶器
図版10　ＩＣＤ出土杭の一部
図版11　ヒエ田遺跡遠景（北西より望む）　ヒエ田遺跡遠景（西より望む）
図版12　ヒエ田遺跡近景（南西から）　ヒエ田遺跡近景（北から）
図版13　ＨＥＤＡ区11層上面全景　ＨＥＤＡ区11層上面南側全景
図版14　ＨＥＤＡ区11層上面南側全景　ＨＥＤＡ区11層上面北側全景
図版15　ＨＥＤＡ区11層上面畦畔（南から）　ＨＥＤＡ区11層上面畦畔（北から）　ＨＥＤＡ区11層上面
図版16　ＨＥＤＡ区11層上面畦畔部分　ＨＥＤＡ区11層上面畦畔部分　ＨＥＤＡ区11層畦畔足跡？
図版17　ＨＥＤＡ区11層上面竪杵出土状態　ＨＥＤＡ区11層上面棒状木器出土状態
図版18　ＨＥＤ溝址１（北から）　ＨＥＤ溝址１（南から）　ＨＥＤＡ区西側全景
図版19　ＨＥＤ溝址３（北から）　ＨＥＤ溝址３（南から）　ＨＥＤ溝址４（東から）　ＨＥＤ溝址４（西から）
図版20　ＨＥＤ溝址４木器出土状態　ＨＥＤ溝址４木器出土状態
図版21　ＨＥＤ溝址４木器出土状態　ＨＥＤ溝址４木器出土状態
図版22　ＨＥＤ溝址５（北から）　ＨＥＤ溝址５（南から）　ＨＥＤＢ区田下駄出土状態　ＨＥＤＢ区有孔板出土状態
図版23　ＨＥＤＢ区北側全景（東から）　ＨＥＤＢ区北側全景（西から）
図版24　ＨＥＤＢ区中央全景（東から）　ＨＥＤＢ区中央全景（西から）
図版25　ＨＥＤＢ区南側全景（東から）　ＨＥＤＢ区南側全景（西から）
図版26　ＨＥＤ溝址２（北東から）　ＨＥＤ溝址５（南西から）

図版27　ＨＥＤ杭列１（北東から）　ＨＥＤ杭列１（南西から）

図版28　ＨＥＤ杭列２（北西から）　ＨＥＤ杭列２（南東から）

図版29　ＨＥＤ杭列１たち割り　ＨＥＤ杭列１たち割り　ＨＥＤ杭列１たち割り

図版30　ＨＥＤ杭列１たち割り　ＨＥＤ杭列１たち割り　ＨＥＤ杭列１たち割り

図版31　ＨＥＤＣ区西側自然木など出土状態全景　ＨＥＤＣ区西側自然木など出土状態部分

図版32　ＨＥＤＣ区西側自然木など出土状態部分　ＨＥＤＣ区西側自然木など出土状態部分

図版33　ＨＥＤＡＬ69有孔板出土状態　ＨＥＤＡＬ68有孔板出土状態

図版34　ＨＥＤＣ区南側自然木など出土状態全景　ＨＥＤＣ区南側自然木など出土状態部分

図版35　ＨＥＤＣ区全景（北東から）　ＨＥＤＣ区全景（南西から）

図版36　ＨＥＤＡＲ43竪杵　ＨＥＤＡＵ65田下駄

図版37　ＨＥＤＡＵ47有孔板ＨＥＤＡＫ55有孔板

図版38　ＨＥＤＡＬ69有孔板　ＨＥＤＡＬ68有孔板

図版39　ＨＥＤ杭列１木杭　ＨＥＤ杭列１木杭

図版40　ＨＥＤ杭列１木杭　ＨＥＤ杭列１木杭

図版41　ＨＥＤ杭列１木杭　ＨＥＤ杭列１木杭

図版42　ＨＥＤ杭列１木杭　ＨＥＤ杭列１木杭

図版43　ＨＥＤ杭列１木杭　ＨＥＤ杭列１木杭

図版44　ＨＥＤ杭列１木杭　ＨＥＤ杭列１木杭

図版45　ＨＥＤ杭列１木杭　ＨＥＤ杭列２木杭

図版46　ＨＥＤ杭列２木杭　ＨＥＤ杭列２木杭

図版47　ＨＥＤ出土クルミ　ＨＥＤ出土クリ　ＨＥＤ出土種子類

図版48　ＨＥＤ調査スナップ　ＨＥＤ現地見学会スナップ

Ⅰ　調査の経過

1．調査に至るまで

南条地区の土地改良総合整備事業は昭和60年度から下田圃地区で始まり、３年次計画として昭和62年度に中部工区の事業の実施が計画されることになった。当初から下田圃地区には「棚田遺跡」、中部工区には「一丁田遺跡」等、大南工区には「ヒエ田遺跡」等埋蔵文化財包蔵地の存在が予想されるため、昭和59年から長野県教育委員会文化課、当町産業課・教育委員会による保護協議が継続して行なわれてきた。

昭和62年度事業実施に先立って昭和61年９月30日、昭和63年度事業に先立って昭和62年10月２日に、長野県教育委員会文化課の担当主事が来町して、当町産業課担当職員・同教育委員会担当職員・地元研究者の今村善興氏により保護協議が実施された。その結果、一丁田遺跡については、調査が秋以降に予想され整理作業を実施して報告書刊行まで行なうのが困難となったので、昭和62年度で発掘調査を実施し、昭和63年度で整理作業と報告書刊行を行なうこととした。ヒエ田遺跡については、昭和63年度に発掘調査を実施して報告書を刊行することに決定した。

これを受けて上郷町教育委員会では、昭和62年度国庫補助事業としてツルサシ・ミカド・増田・垣外・大明神原・平畑・一丁田・矢崎・兼田遺跡、昭和63年度国庫補助事業としてツルサシ・ミカド・増田・垣外・大明神原・一丁田・ヒエ田遺跡の埋蔵文化財包蔵地発掘調査計画書を文化庁に提出した。

発掘調査の実施に当たっては、前記の遺跡のほかにも他の開発事業に伴う発掘調査が計画され、膨大な量になることが予想された。そこで、円滑な事業進行を計るために「上郷町埋蔵文化財調査委員会」を組織して対応することにした。

実際の調査は、一丁田遺跡は昭和62年の秋になっても整備事業範囲が定まり兼ね、他の遺跡発掘の遅れもあって、昭和63年１月から実施した。ヒエ田遺跡は昭和63年11・12月に実施した。

2．調査の経過

1）一丁田遺跡

整備事業対象面積は2.3haと広大であり、当町の遺跡地図によれば事業地の周辺に予想される藪越・ヒエ田・一丁田・びくに畑・北浦遺跡の中間に位置するところで、当初計画された北側一丁田遺跡範囲の地籍が除外されたので、計画される３本の道路予定地（A・B・C）を主とした調査地

を選定して、範囲確認を含む調査を実施して必要に応じて拡張調査の計画を立てた。

昭和63年１月６日に重機を導入してＡ地区の排土作業をはじめ、１月８日午後矢崎遺跡からテント・発掘機材を搬入して調査を開始した。

１月９日から基点（０）から181M、東へ通じる道路予定地をＢ地区として、10M間隔でグリッドを設定して調査にかかる。遺構の発見はなかったが、50・60・70Mの地点は土層の堆積が深く、砂・泥土、植物遺体の層が複雑に重複する湿地帯の様相がみられた。中世陶器片・平安時代土器片が少量包含されていた。堆積土層を記録するだけで拡張はしなかったが、Ａ地区の道路予定地で、関連地形を確かめることにした。

１月12日からＡ地区の整地・グリッド掘りをする。60～75Mにかけて溝址１、80～100Mにかけて溝状遺構１が検出され、平安時代須恵器・中世陶器片・石器等が発見されている。

１月13日からＣ地区（南北道路予定地）の重機による排土作業を進め、120M辺りから溝址２、225Mのところで溝址３、そこから北側で多くの杭列が発見されて、その検出に重点を置く。１月14日にはテントを北に移動して、町道山下線新設予定地の試掘調査も並行しながら、水路の検出と大量な杭の検索作業を進めた。水路を除いては溝址のほかは遺構もなく、遺物の出土が少なかったので、拡張調査を止めて１月20日に調査を終了している。

整理作業は昭和63年度に断続的に実施し、平成元年の１月から３月にかけて報告書を作成した。

２）ヒエ田遺跡

事業対象面積は広大であるが、大半は凹地の湿地帯にかかるため遺跡の範囲から外れており、湿地帯北側の微高地がヒエ田遺跡の南西側の一部として該当した。そこで、遺跡範囲内を重点にし、期間や費用の余裕があれば、湿地帯のトレンチ調査を実施するように計画した。しかし、予想以上に湿地帯が広がっていて湧水が多く、当初計画の範囲しか調査できなかった。

昭和63年11月21日重機を導入して調査区の拡張を開始し、並行してテント・発掘機材を搬入して調査を開始する。重機で掘り下げるとすぐに水が出始め、今後の調査の困難さが予想された。

11月22日から、重機による調査区の拡張と並行して本格的な調査を比較的水が少ない東側から開始した。自然木を主体とし木器を包含する層を検出し、12月１日までかかりこれを掘り下げた。

12月２日からは西側に調査の主体を移し、水田面と考えられる層をだすこととする。12月12日までかかって調査し、並行して検出した溝址１の調査も済ませる。

12月12日から26日までは中央部を調査し、溝址３～５、田下駄他の木器を検出した。この間、東側で残っていた溝址２、杭列１・２を調査し、12月27・28日に杭列１・２の杭の断面調査と取り上げを実施し、現場における全ての作業を終了する。

この間の12月20日には現地説明会を実施して、平日にもかかわらず約50名の参加があった。

その後、平成元年１月から３月にかけて整理作業を実施し、同年２・３月に原稿を執筆して、本発掘調査報告書刊行となった。

3．調査組織

1）上郷町埋蔵文化財調査委員会

① 規 約

（設置）

第1条　この会は「上郷町埋蔵文化財調査委員会」（以下委員会という）と称し、事務局を上郷町教育委員会事務局に置く。

（目的）

第2条　この委員会は、上郷町内の関係各機関・団体及び考古学関係者の相互協力により、上郷町埋蔵文化財保護事業の円滑な実施をはかることを目的とする。

（事業）

第3条　この委員会は、前条の目的達成のため、次の各号に掲げる事業を行なう。

(1) 遺跡調査の総合企画、連絡・調整に関すること。

(2) 土地所有者等の発掘承諾に関すること。

(3) 発掘調査員及び作業員の確保に関すること。

(4) そのほか目的達成に必要なこと。

（役職員）

第4条　この委員会に次の役職員を置く。

(1) 顧問1名、会長1名、副会長2名、委員若干名、事務局員若干名

(2) 顧問は町長とし、そのほかの役員は委員会において互選する。

(3) 委員は次の通りとする。

教育委員5名、文化財保護委員5名、考古学関係者3名、産業常任委員長、建設常任委員長、土地改良事業等地元代表者

(4) 事務局員は関係各課局の職員を充てる。

（役員の職務）

第5条　会長は委員会を代表し、会務を総括する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは、その職務を代行する。

（会議）

第6条　この委員会の会議は会長の招集により開催する。

（その他）

第7条　この規約に定めるもののほか、会の運営に必要な事項は委員会において決定する。

付 則

1．この規約は、昭和62年4月10日より施行する。

② 役職員

顧　　問　山田　隆士（町長）

会　　長　北原　忠夫（教育委員会委員長　～62，9）　小室　伊作（同左　62，10～）

副 会 長　北原　治人（産業常任委員長　～62，4）　岩崎　智道（同左　62，5～）

小木曽英寿（文化財保護委員長）

委　　員　小室　伊作（教育委員　～62，9）　牧野　光弥（文化財保護委員）

北原　　勝（教育委員）　麦島　正吉（　同　　上　）

矢崎　和子（　同　上　）　菊本　正義（　同　　上　）

北原政治郎（同上　62，10～）　稲垣　　隆（　同　　上　）

吉川　昭文（教育委員会教育長）　堀口　信幸（別府小手抜地区）

平栗　　弘（建設常任委員長　～62，4）　畠中　尚二（別府下河原地区）

篠木　俊寛（　同　　上　62，5～）　北原　治作（大明神地区）

今村　善興（日本考古学協会員）　中島　博男（下黒田中部地区）

佐藤　甦信（　同　　上　）　唐沢　富雄（南条地区）

岡田　正彦（　同　　上　）　松沢　郷司（　同　上　）

佐々木啓治（上黒田東部地区）

事務局員　吉川　昭文（教育委員会教育長）　北原　克司（産業課課長）

菅沼　富雄（同上　事務局長）　岡田　清平（同上　課長補佐）

吉川　勝一（同上　局長補佐）　中園　　紘（同上　耕地係長）

山下　誠一（同上　社会教育係）　鈴木　幹夫（同上　主任　～63，3）

今村　美和（　同　　上　）　小室　勇治（同上　主事　63，4～）

2）上郷町遺跡発掘調査団

調査団長　今村　善興（日本考古学協会員）

調査主任　山下　誠一（教育委員会社会教育係）

調　査　員　岡田　正彦（日本考古学協会員），吉川　金利（63．4～）

調査補助員　林　敏，　米山義盛，伊藤　泉（以上～63．3）、林　貢，　市瀬禎子（63．4～）

作業協力員　東定男，今村倶栄，尾曽広男，上柳久夫，小島英一，小林薫，篠田せい子，
島崎泰三，清水やち，下沢貞満，菅沼庄三，瀬古郁保，高橋美鈴，原祐三，福田千八，
福田すえ子，宮脇直人，吉川佐一（以上一丁田遺跡）　池戸大八，伊坪芳一，岡島芳恵，岡島亘，
上沼文代，川尻英人，北林覚男，久保田祐子，小西広司，小林百合子，下沢貞満，篠田せい子，
菅沼庄三，高橋美鈴，高橋かね代，中原友江，野牧安美，原　とし，堀口美鈴，古林登志子，
古林清志，宮沢サチ，宮脇直人，麦島孝男，村沢千代江，吉川佐一，吉川通男（以上ヒエ田遺跡）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1．自然的環境

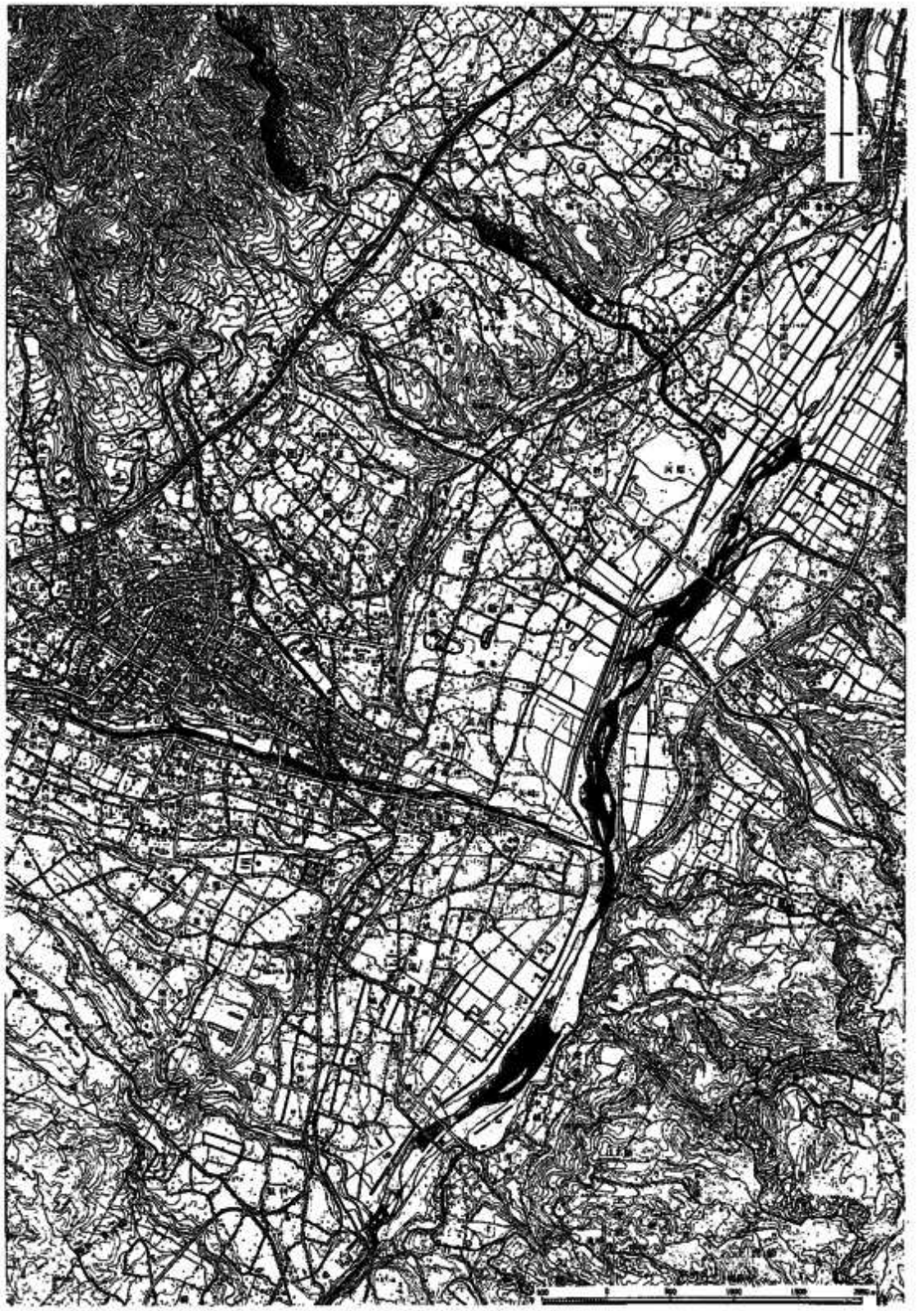
ヒエ田・一丁田遺跡の所在する長野県下伊那郡上郷町は、長野県の南端を南と北に走行する南・中央両アルプス山脈の谷間に広がる飯田盆地のほぼ中央に位置する。野底山・鷹巣山が北西にあり、そこを源とする野底川・土曽川が南流し飯田松川・天龍川に注いでいる。この両河川に挟まれて、東西に細長く続く面積26㎢に及ぶ緩傾斜地形の地域である。

北は土曽川によって飯田市座光寺・野底川上流地域では高森町・飯田市松川入に境している。西・南は鷹巣山・風越山から野底川下流・松川によって旧飯田市・旧鼎・旧松尾地籍に接している。この地域は南流する天龍川と、その諸支流によって形成されたいくつもの河岸段丘や広大な扇状地の広がるところであって、特に上郷町の段丘・扇状地は広いので、原始・古代からの優れた生活舞台が展開している。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那盆地全域に形成されている伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を基準にして高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷町にある段丘面は、中央に広がる下黒田・飯沼境の大段丘を境にして上段と呼ばれる洪積土壌の堆積する中位段丘、低位段丘と呼ばれる沖積土壌の堆積する低位段丘Ⅱが何段かに構成されている。

低位段丘Ⅱに当たる段丘面は飯沼面・別府面・南条面と呼ばれ、飯田市松尾地籍とともに下伊那地方の段丘模式地ともなっている。上段伊久間面（黒田面）の大きな段丘崖は約50Mの比高があり、標高420～430Mほどの別府面、さらに下方に400～410Mほどの南条面が帯状に続いている。南条面は天龍川現川床面との比高差５M程の低位地から、国道153号線に近いところ（標高415M）まで湾入するところがあって、土壌堆積の複雑さを物語っている。このことは大段丘崖下・他の段丘崖下の豊富な湧水・地下水と相まって「宇沼の里」と伝承される沼沢的な低湿地の存在も予想され、現在でも典型的な水田地帯となっている。この段丘面の中央部を国道153号線が、最下位段丘面を農免道路が南北に走行している。

一丁田・ヒエ田遺跡は南条地区の上方、国道153号線を挟んで相対し、調査地域の標高は一丁田で411M、ヒエ田で418.5Mである。段丘構成でいうと南条面と別府面の接点にあたり、双方の土壌堆積からみると砂や粘土の堆積層が目立ち南条面類似の様相が強い。ヒエ田地籍にはアシの生える沼地が残り、一丁田に近いところには砂田・船越田と呼ばれる低湿地があり、調査結果からみても砂・泥土の堆積が多く、溝址・水路址・水田址に関わる木材・杭列等の検出があったことから、この地域の立地・土壌堆積を知る重要な手掛かりになると思われる。



挿図1　一丁田・ヒエ田遺跡位置図（1：50,000）（1．一丁田遺跡　2．ヒエ田遺跡）

2．歴史的環境

上郷町の遺跡は、昭和57年度の詳細分布調査によると、埋蔵文化財包蔵地67・古墳32・中世城跡３の合計104遺跡が確認され登録されている。昭和59年頃から各地の発掘調査が進み、新発見の遺跡もあったり、古社寺跡等も含めれば更にこの数は上回る。

上郷町の遺跡を中心にした歴史的変遷を概観してみると、12000年以前の旧石器時代の遺構・遺物は現在のところ見付かっていない。上郷町最古のものは、上段の姫宮遺跡出土の表裏縄文式土器片・柏原Ａ遺跡の石器剥片・栗屋元遺跡の有舌ポイントにより、縄文時代草創期の黎明を知ることができる。次の縄文時代早期になると比較的山寄りの八王子遺跡など５遺跡から、押型文土器や繊維を含む条痕文及び撚糸文土器が出土している。平成元年１月の町道改良工事に伴う西浦遺跡の発掘調査でこの時期の竪穴式住居址が検出され注目されている。約6000年前の縄文時代前期の遺跡は姫宮・日影林・大明神原など８遺跡があり、今までは上段の中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯に限られていたが、昭和61年矢崎地籍の町道改修に伴う前期後半の住居址が検出され、下位段丘面での生活地も検証されている。次の縄文時代中期になると爆発的に遺跡数も増加して、低位段丘南条面下段を除き、町内全域に遺構・遺物の発見が目立っている。中期の遺跡49カ所中、日影林・八幡原・栗屋元・大明神原・増田遺跡等は集落址・遺物多量発見地域として注目されている。この後に続く約3000～4000年前の縄文時代後期には遺跡数は減少し、上段を中心に８遺跡に留まっている。昭和61年発掘調査の日影林遺跡のように住居址・土壙群が検出されるように、今後の発掘調査に期待される時期でもある。最終末の縄文時代晩期の遺跡は３カ所知られていたが、昭和62年の矢崎下河原地区整備事業に伴う発掘調査で、東海系の条痕文土器・東北系の浮線網状文土器片が多量に発見されて注目されている。

次の弥生時代は水稲栽培が生活基盤となる新しい文化で、下伊那地方へは三河・尾張・美濃方面から伝播されたものと推定される。弥生時代前期の遺物は極少ないが、中期になると遺跡数は増大する。下段の低湿地周辺に集落の形成が推定されていたが、確証を得るまでには至っていなかった。昭和60・61年、南条下田圃地区基盤整備事業に伴う発掘調査で県下最初の弥生時代中期・後期の水田址が検証され脚光を浴びている。飯沼丹保では住宅造成に伴う発掘調査で住居址が２軒検出され、上郷町でもこの時期の遺構発見が続いている。この時期の遺跡の大半は下段の飯沼・南条・別府地籍に集中することから、低位段丘Ⅱ地帯にみられる低湿地帯を利用する水稲耕作の展開が類推されている。約1800年前の弥生時代後期になると、その遺跡は山麓地帯から天龍川氾濫原際に至る広範囲に44カ所以上あり、高燥段丘上でも畑作・稲作が行なわれたものと思われる。その代表的なものは住居址34軒を検出した高松原遺跡であり、方形周溝墓11基と住居址23軒を検出した垣外遺跡・大量の土器群を充満した住居址を含め、集落の一部を検出した矢崎地区兼田遺跡・住居址５軒と祭祀的な土器群をもつ土壙列の検出を見た飯沼丹保遺跡等である。

古墳時代の遺跡は集落跡と墓域とに区別される。上郷町の古墳は煙滅古墳を含めて32基、その大部分は別府地籍の松川に面する台地端に立地し、一部が飯沼段丘崖下にある。いずれも後期古墳で、天神塚・番神塚両前方後円墳以外は円墳である。この頃の集落は古墳の近在にみられ、現在のところ上段では明確なものがなく、下段の経済的基盤の豊かな地域で発見されている。遺跡数が多い割に集落跡の発見例が少なく、古墳時代前期・後期の土師器を多量出土した南条の薮越遺跡・飯沼北の的場遺跡、別府の兼田遺跡に留まっている。遺物多量出土地籍は飯沼・南条・別府各地域に多いので今後は発見例が続くものと思われる。

奈良・平安時代の遺物は町内全域で収拾できる。奈良時代・平安時代の選別は容易ではないが、平安時代の遺構・遺物は野底山山中から下段の天龍川氾濫原際の最下位段丘まで存在が予想される。生産域の水田地まで含めれば濃淡の差はあるが町内全域に広がっている。下段地帯の松川左岸、栗沢川・土曽川右岸に所在する中島・化石、高屋、丹保・堂垣外遺跡等では多量の須恵器片が発見される。昭和62年に発掘調査した矢崎遺跡（下川原地区）は100軒以上と推測される平安時代の大集落跡で、大規模な鍛冶遺構が検出され、フイゴ羽口や鉄滓等の多量出土により上郷町の重要遺跡のひとつとなっている。近年実施された隣接地飯田市座光寺の詳細分布調査により、土曽川左岸地域では川に接する低地から、最低位段丘先端まで全域にわたって奈良・平安時代の遺物が採集されているが、この例は上郷町でも同様である。

この低位段丘Ⅱ地帯は、伊那郡家所在が有力視される飯田市座光寺の恒川遺跡群と同一段丘上にあって、遺物出土状況は大差なく濃密なところである。しかも古代条里制遺構の存在が地割や地名からも推測され、豊かな湧水・地下水に恵まれ生産域と居住域とが交互に立地する地帯で、古代史探究上きわめて貴重な地域のひとつである。標高410～415M辺りは小段丘先端部が南北に連なるところで、奈良時代に都と国府を結ぶ官道東山道の通過候補地のひとつとして注目されている。

この地方は『倭名鈔』・『伊呂波字類抄』等のに所載される、古代伊那郡五郷のひとつである麻績郷に所属し、平安時代末期には近衛家領の郡戸庄の中にある。善光寺縁起（金沢文庫本）伝承の宇沼村を彷彿させる低湿地の多いところで、どのひとつをとっても考古学調査上解明に価する地域である。低湿地ひとつをとってもその所在地籍・範囲・それぞれの実態・生活上の活用・居住地との繋り等々未解明のものばかりである。飯沼面・別府面の広く広がる飯沼・別府の台地の間に深く湾入する南条の低湿地の実態を知るためにも、今回のヒエ田・一丁田遺跡発掘調査のもつ意義は大きいと思われる。

挿図２　国道153号線周辺遺跡図（●発掘調査地）

Ⅲ　発掘調査の結果

1．一丁田遺跡

1）遺跡の概要

一丁田遺跡は飯沼中井を挟んで飯沼地籍と南条地籍にまたがる範囲が登録されている。当初の事業計画では南条地籍の遺物多量出土地が含まれていたが、地権者の都合によりその地域は除外された。しかし、中部地区事業地域は登録された埋蔵文化財包蔵地に含まれていないが、第１図の遺跡図のように一丁田遺跡のほかに、びくに畑・北浦・藪越・ヒエ田に取り囲まれた位置にあるので、包蔵地の広がりが予想されること、北側の中井改修工事中に杭列の発見があったこと、昭和59年町道改修工事に伴う北浦遺跡の発掘調査で、中世期の池状遺構と低地に堆積する流木群があったこと、南側の弥生時代・古墳時代の濃厚包蔵地の藪越遺跡に隣接することから、遺跡の広がり・低湿地の実態を確かめることを目的にした。

事業地の都合により全域を調査対象にしなかったが、幸い方向を異にする道路予定地を調査区として選定でき試掘調査を試みた。その結果は居住・集落にかかわる遺構の発見はなく、数mに及ぶ砂層の堆積地、中世・平安時代の遺物を包含する溝址、遺物包含は少なかったが１m以上の厚さに砂・泥土・植物遺体の堆積する低湿地、流水管理を目的にした多数の杭列と中世陶器を伴出する水路の発見があって、低湿地特有の遺構存在を確認することができた。

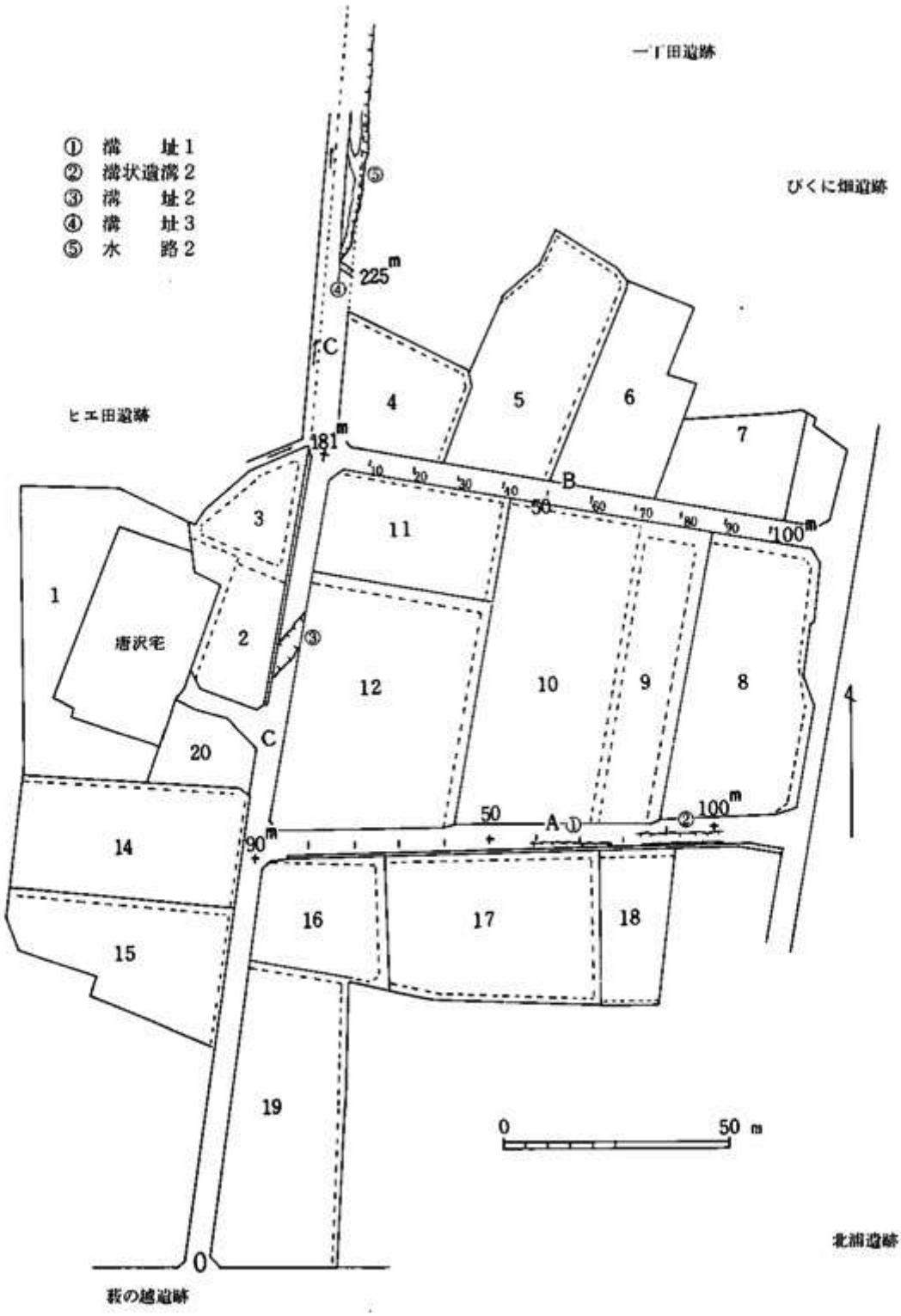
周辺に立地が予想される弥生時代・古墳時代・平安時代・中世の集落地との関連考察はできないが、自然地形の低湿地管理・場合によっては水田耕作地として利用したであろうことを類推することができた。

「検出された主な遺構」

平安時代溝址　1、中世・中世以降溝址　1、中世水路　1、時期不詳溝址　1、時期不詳溝状遺構　1。

「発見された主な遺物」

弥生時代石包丁形石器　2、同　鍬形石器　5、その他の石器　5、平安時代須恵器坏　1、同　土師器・須恵器片　30、山茶碗系陶器片　30、常滑陶器片　40、青磁陶器片　3、その他中・近世陶器片　50、木杭　300本以上、板状木材　10。



挿図3　南条地区中部工区遺跡・遺構位置図

挿図３の調査地Ａ・Ｂ・Ｃの土質・地形・遺構・遺物の状況をみると次のとおりである。南側基点０から90mで東へ向かう道路予定地（Ａ地区）では、総体的に砂質土の堆積が多く、西ほど深く東へ行くに従って浅めで、90mの地点の東50m辺りから青灰色粘質砂土がみられる。60m辺りから南側の土手下の現水路に添って溝址１、80m辺りから溝状遺構が検出されている。この辺りでは上層の砂質土中から中・近世陶器片、溝中・青灰色砂質土の面から平安時代土師器・須恵器片が出土している。

基点０から180mのところより東へ向かう道路予定地（Ｂ地区）では、10m間隔でグリット堀りをしたが、遺構の発見はなかった。西から東へ傾斜する地形に水田が造成されているので土層の深さは一定でないが、土層堆積の状況は西より東が深く、南から北へ傾斜傾向がみられる。挿図７の土層図によればＢ40辺りから砂層の堆積が厚く複雑になり、50～80にかけて砂質土・泥土・植物遺体が複雑に堆積する低湿地土層があって、その様相はＢ60が最も顕著であった。木材の流入もあり、植物遺体の堆積層は何層にも重なり、内黒土師器片・常滑焼陶器片の包含がみられた。80は比高の高い土手下で、90・100のグリットは砂層は薄く下は砂礫層であった。このことから類推されることは、やく30mほどの幅をもつ低湿地帯の存在である。この方向を確かめてないがＡ地区の０m辺りの砂層堆積３m以上の深いところと繋るのかもしれない。

Ｃ地区とは基点０から北へ向かう道路予定地であるが、０から100m、180m～北側半分は既設道路のために一部の調査に留まっている。緩やかではあるが南か北へ傾斜する地形である。土質は100～190mの間は砂質土が多く下層は青灰色粘質砂層で、190mから北は黒色泥土・青灰色粘質砂層であったり礫群の多い土質等複雑に入り組んでいる。120m辺りで幅広い溝址・225mから北側に溝址３・杭列の多い水路が検出された。この水路は北に流れる方向のものと、北から流れるものが合流して、西（山際）へ流れ込むもので、中世陶器片の出土が多かった。

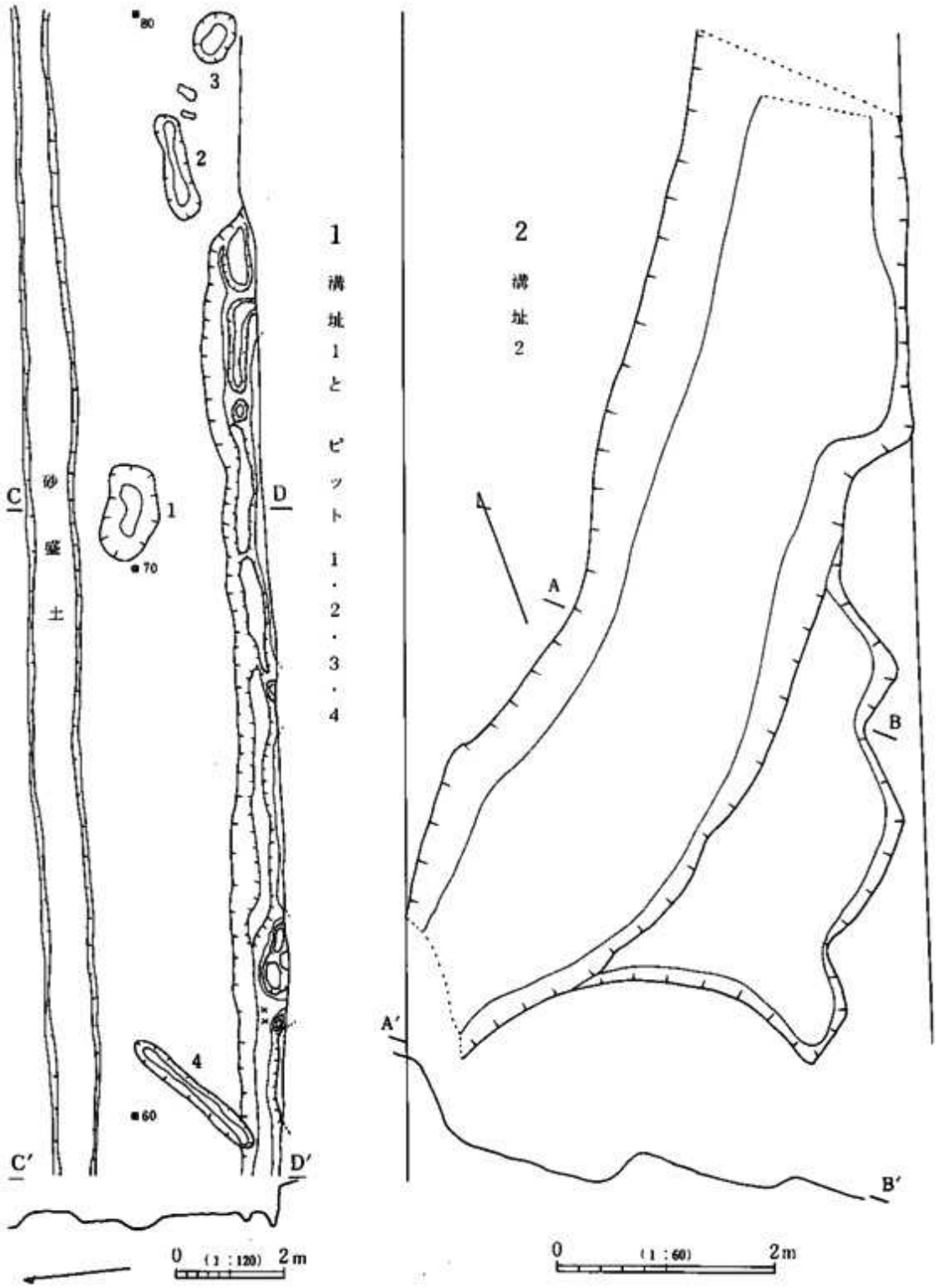
事業地域全域を調査したわけではないので結論付けることはでき兼ねるが、現在の地形でも或る程度みることができるように、周囲が高く中央低地のような低湿地の様相を類推することができる。溝址３と水路が交叉する辺りには現在でもヒエ田地籍の大清水（湧水）から流れ出る水路があって、方向を一つにしていること、この辺りの地字は「砂田」と呼ばれ以前は淵と言われる低湿地があったと伝えられ、昔の一部が検証されたように思われる。

２）遺構と遺物

（１）　溝址１

①　遺構（挿図４）

Ａ地区中央やや東側58m～76mの範囲で長さ18mに亙って検出されたもので、西側と南側に排水路があるために広く掘れなかったので幅が不詳であるが、２mくらいは有ると推定される。溝内は黒色泥質土・灰白色砂質土・鉄分を含む褐色砂質土が重複し、複雑に掘り込まれた溝底には



挿図4　ICD　溝址1・ピット1～4・溝址2

粗砂が堆積し流水を推測することができる。

溝の北側一帯は凹凸が目立ち土壙状に窪められたピット１～４がある。水の流れによって出来たものかもしれない。

Ａ地区の最も西側では３ｍ下層から平安時代の須恵器片が出土し、溝址１の南側の一段高い地域では平安時代土師器・須恵器片が表採されることから、南側に遺跡の中心があるかもしれない。

② 遺物（第１・２図）

５は須恵器坏形土器の半完成品で、溝底に近いところから出土している。濃青灰色で水引き調整、底は回転へらきり付け高台のものである。６から９・14・16は須恵器片、15は土師器鉢形土器片、12・13は青磁輪花碗片である。青磁片は溝の上層で出土し、他の土師器・須恵器片は溝の中下層から出土していることから、平安時代の溝址かと思われる。溝の周辺北側一帯から土師器・須恵器片・石器（第４図１～４）も出土している。

（２）溝状遺構

① 遺 構

Ａ地区溝址１の東側に西から東へ続く長さ20m以上・幅4.5mの溝状遺構があった。黄白色の砂質土が堆積し、ところどころに人頭大の石の固まりを持っていた。流路と言うよりは広めのくぼみと言った状態で、それを横切るように幾条もの溝があって複雑な様相であった。新旧の流路が交錯しているようにも思える。

② 遺 物

古いものは第４図５～８の石器で石包丁形・鍬形石器があり、弥生時代のものかと思われる。土器・陶器片も出土し土師器片・灰釉陶器片のほか中近世の陶器片もある。

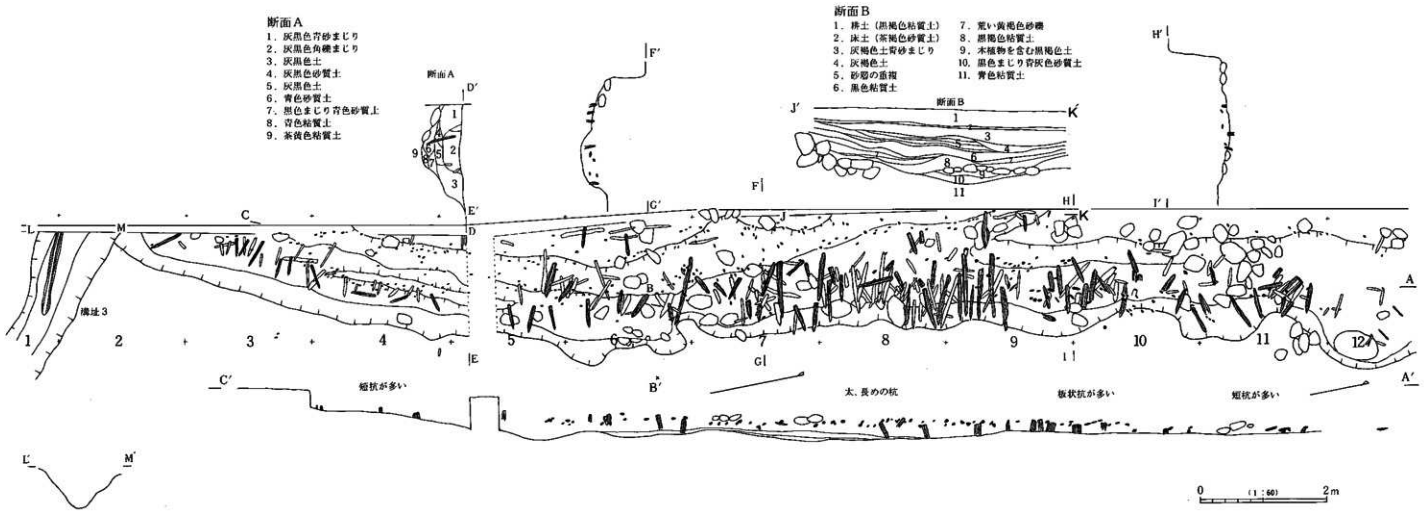
（３）溝址２

① 遺 構（挿図４）

Ｃ地区基点０から120mほど北の辺りから東北方向に向く幅2.5m・長さは道路用地内で９ｍほど確認している。ところによっては上部に湾入部が有って水の流れによるものかとも思われるが、溝底は青灰色粘質砂土で有りながら流水による堀り込みが見られないことから、溝址としたものである。堆積土は黄白色砂質土が大部分で、この周辺にみられる上層のものと思われる。

② 遺 物

図示するほどの遺物の発見はなく、土師器・須恵器片のほかに近世陶器も含まれている。下層までの堀り込みはしなかったので、時期の決め手はない。



挿図5　ICD　溝址3・水路木杭出土位置

（4）溝址３

① 遺構（挿図５）

Ｃ地区北側基点０から225m辺りにあり、西から東南に向かう溝である。幅は西側で2.5m・東側で1.5m、深さはほぼ1.2mのＶ字状の溝である。長さ・東側の方向は不詳であるが、掘り方の明確な溝で、堆積土層は後述の水路のものに類似している。水路と溝３の時期差の確証は得られないが、堆積土層・出土遺物から同時期または大きな時期差はないものと思われる。溝中層に立木の流入がみられる。

② 遺物

出土遺物は少なく第７図30の山茶碗系坏形土器片が下層から出土している。

（5）水　路

① 遺構（挿図５・６）

今回の調査区中で最も明確な遺構である。Ｃ地区北側溝址３に隣接して既設道路添いにほぼ南北方向に続く溝で、既設道路下に半分以上掛かるために全容を確かめることはできなかったが、少なくとも３m～５mほどの幅をもち、調査した範囲で21mの長さに及ぶ。形状を細かく見ると南から北へ流れる溝・北から南へ流れる溝があって、中間８・９の辺りで合流して西北へ流れ出るようである。南側の溝は狭めで傾斜はやや強く、北の溝は広めで傾斜は極緩やかである。

流路内に穿たれたり横倒しの杭の数は多く、南側では溝内と西側溝壁添いに打たれる杭列が目立ち、北側では溝中央と溝壁両側に見られる。合流地点には大型の抜け出た杭のたまりが見られる。直立または斜立ちの杭の数は290本で、南から合流点までは204本・合流点から北では86本が数えられる。杭の大きさ・太さ・形態は様々であるが、２～６辺りでは細・短め杭、７～９辺りは太・長め杭、９～10辺りは板状の杭、11辺りは太・短め杭が目立つ。構築上の効用・時期差があるようにも思えるが確証は何もない。横倒しの杭も多く合流点辺りには重複堆積が見られ、その全部を検出することができなかった。

溝底・堆積土層の様子も場所により相違が大きい。南側は溝幅約３m・深さ1.2mで、溝址３に類似の形態である。上部は重機によりけずられているので、残されたところで砂質土・粘質砂質土・泥土が９層以上に複雑に堆積している。溝底はＶ字状を呈し場所によっては杭列により中洲状の部分がある。７辺りでは溝幅も広がり溝底はＵ字状で、西側の壁添いにテラス状の面があって壁上と溝淵に杭列が並ぶ。土層は定かではないが砂質土・粘質土・植物遺体を含む黒色泥土が堆積し、下部の青色粘質土・茶褐色粘質土にまで杭が穿たれている。８の合流点周辺は中層は複雑な砂質土の重複層があり、下層は黒褐色砂質土・黒褐色粘質土・植物遺体包含の泥土等が多く流れ溜った板・杭・木材が厚く堆積している。この辺りの溝底は表土下2.3mくらいと推定される。北側は耕作地の関係で調査されていないが、北ほど広く南へ来るに従って溝幅は狭まり、北側は

砂礫が多く10・11辺りの礫群を境にして、砂質土・粘質土の堆積がみられる。北ほど杭は少なく南に来るに従ってその数を増し、９・10付近の杭は大きめ・板状のものが目立つ。

合流地点から西側は分かり兼ねるが、溝幅を３m以上に広め南側と同様壁上・溝淵に杭列が続いている。このことから西北に向かう水路があることは類推できる。ところどころに厚い礫群があるがその正体は不詳である。

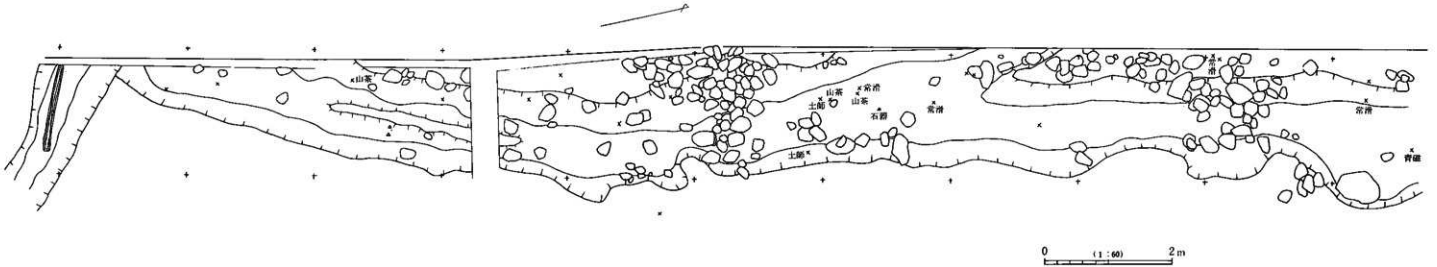
② 遺物（第１～４図、写図）

平安時代の土師器片・灰釉陶器片も少量含まれているが、山茶碗系陶器・常滑焼系陶器・瀬戸灰釉系陶器片・かわらけ状土師器坏等の出土が多く、近世陶器の出土はなかった。挿図６にその出土位置を×印で示してある。出土地点は全域に及ぶ合流地点周辺が最も多かった。第１図22は灰釉陶器坏片・24は灰釉瓶子の底部、23・25は瀬戸系陶器片、26～30・第２図３～６は山茶碗系の片口鉢・大平鉢・坏等、８は土師坏、９は瀬戸灰釉把手付き鉢、10は常滑焼甕形土器の口縁片である。このほかに第３図に示したように大型の山茶碗片・常滑焼甕形陶器片・摺鉢片・土師系の鉢形土器片等が相当量が出土している。全体的な器形をしるものは少ないので年代規定は困難であるが、総じて見れば15～16世紀頃のものかと思われる。

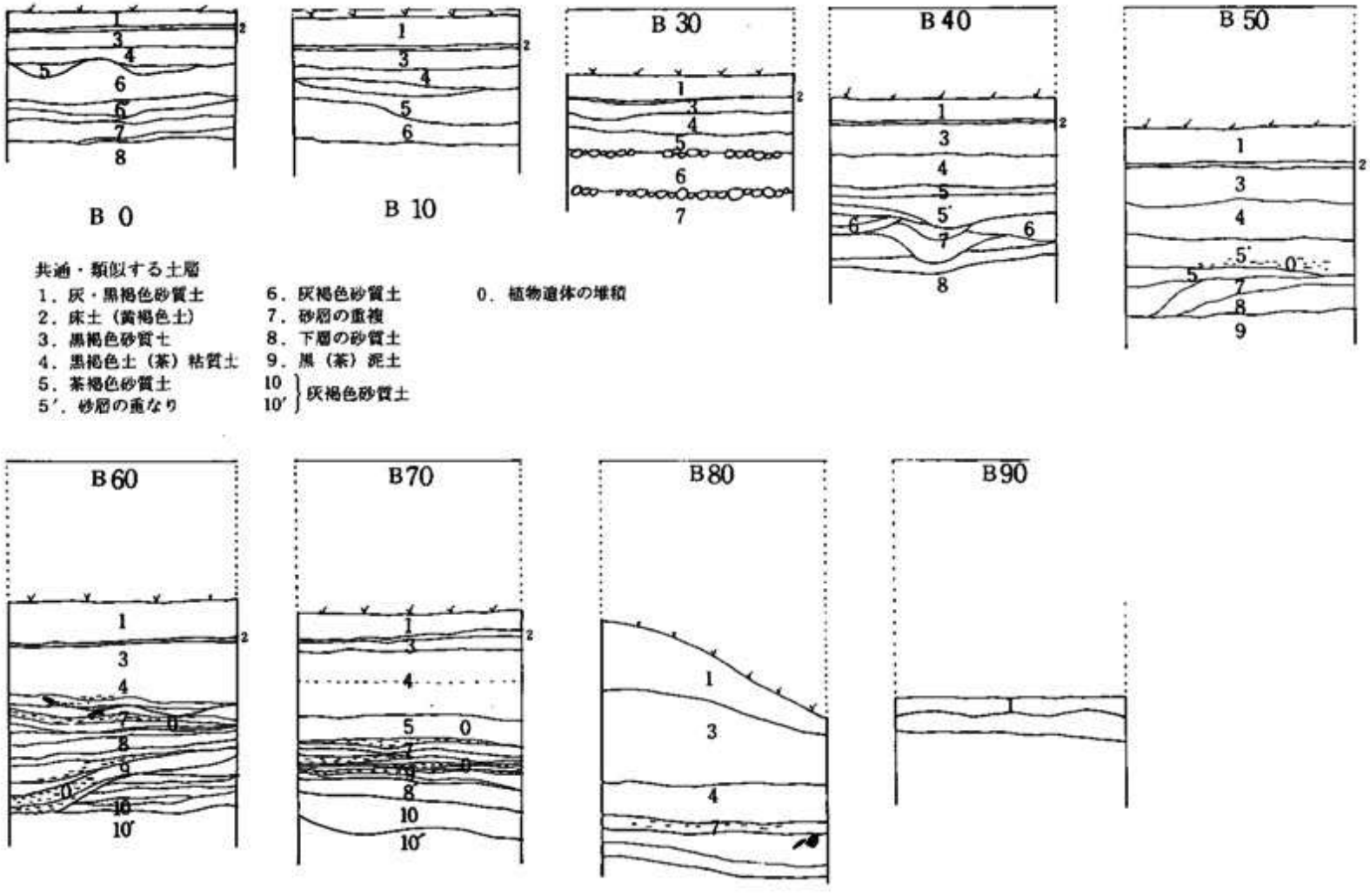
数多くの木杭が出土しているが土質の性か腐食が著しいこと、調査期間に余裕がないこともあって数本しか取り上げれず、後は写真記録に頼っている。取り上げた杭は８周辺のもので、太く長い杭、９・10周辺の板状杭である。

第４図10～13がそれで10は長さ８５cmの長大杭で、頂部の腐食が進んでいるために元の長さはそれ以上である。杭先は四面から刃物で丁寧に削り落としている。11は長さ56.5cmの平角状杭で杭先は二面から斜めに削り落としている。12は板状の杭で杭先の加工はない。13は長さ43cmの四角状のもので、杭先は四面から斜めに削り落としている。ともに腐食が進んでいるために材質の判定は困難ではあるが、木質から針葉樹でスギかサワラかと思われる。取りあげてない杭のなかにも広葉樹と思われるものは見付かっていない。

遺構の状態から中世以降と思われるが、昭和61年に検出した棚田遺跡の中世杭列の杭先加工に類似はしているが、材質・太さ・並び方には大きな違いがある。

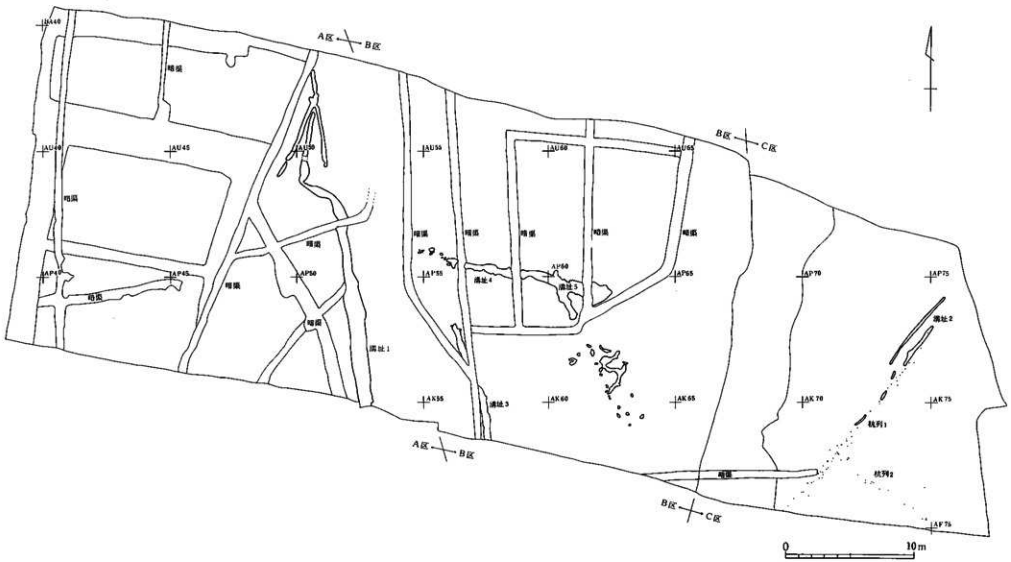


挿図6　ＩＣＤ　水路土器・陶器出土位置図



挿図7　ICD　B地区グリット土層図

挿図8　HED　発掘位置図及び周辺図



挿図9　HED　遺構全体図

2．ヒエ田遺跡

1）発掘調査の概要

当初から一定の層位まで重機を導入して調査区を拡張し、そこから層位ごとに掘り下げていくように計画した。しかし、すぐに湧水がみられ、排水対策をしなければ調査に支障をきたす状況となった。事業地は今後も耕地として利用していく箇所であり、縦横に入れられている暗渠排水路をできるだけ残してほしいとの地権者からの要望もあり、排水用に深い溝を入れることができなかった。そこで、調査区の大部分は工事の影響が及ぶと考えられる層位までを調査の対象とし、比較的涌水の少ない東側を深く下ろして層位を確かめることにした。十分に排水することができなかったので、調査は思うように進展せず、何層にもわたる調査はできなかった。よって、調査した層位が一定でないので、便宜的にA区・B区・C区にわけることにした。A区はAK54とAX52を結ぶラインの西側にあたり、C区はAG65とAT67を結ぶラインの東側にあたり、その中間がB区となる。

調査区は地番2206の水田の北側にあるトラバーの基準点をBA50の起点として、南北方向に数字、東西方向をローマ字で2mごとのグリットをトランシットを用いて設定し、調査・測量にあたった。

今次調査における調査面積・検出遺構は以下の通りである。

A区……溝址1本・水田の畦畔及び水田面

B区……溝址3本

C区……溝址1本・杭列2本・自然木など包含層

総調査面積……2050㎡

2）層　序

十分に統一できてないので地区ごとに説明する。複雑な堆積状況を示して、かつ地区が現在の水田の地番にほぼそっていて、水田造成時に削平されている層位もあり、一様でない。色は山下の主観によったので、客観化されてない。

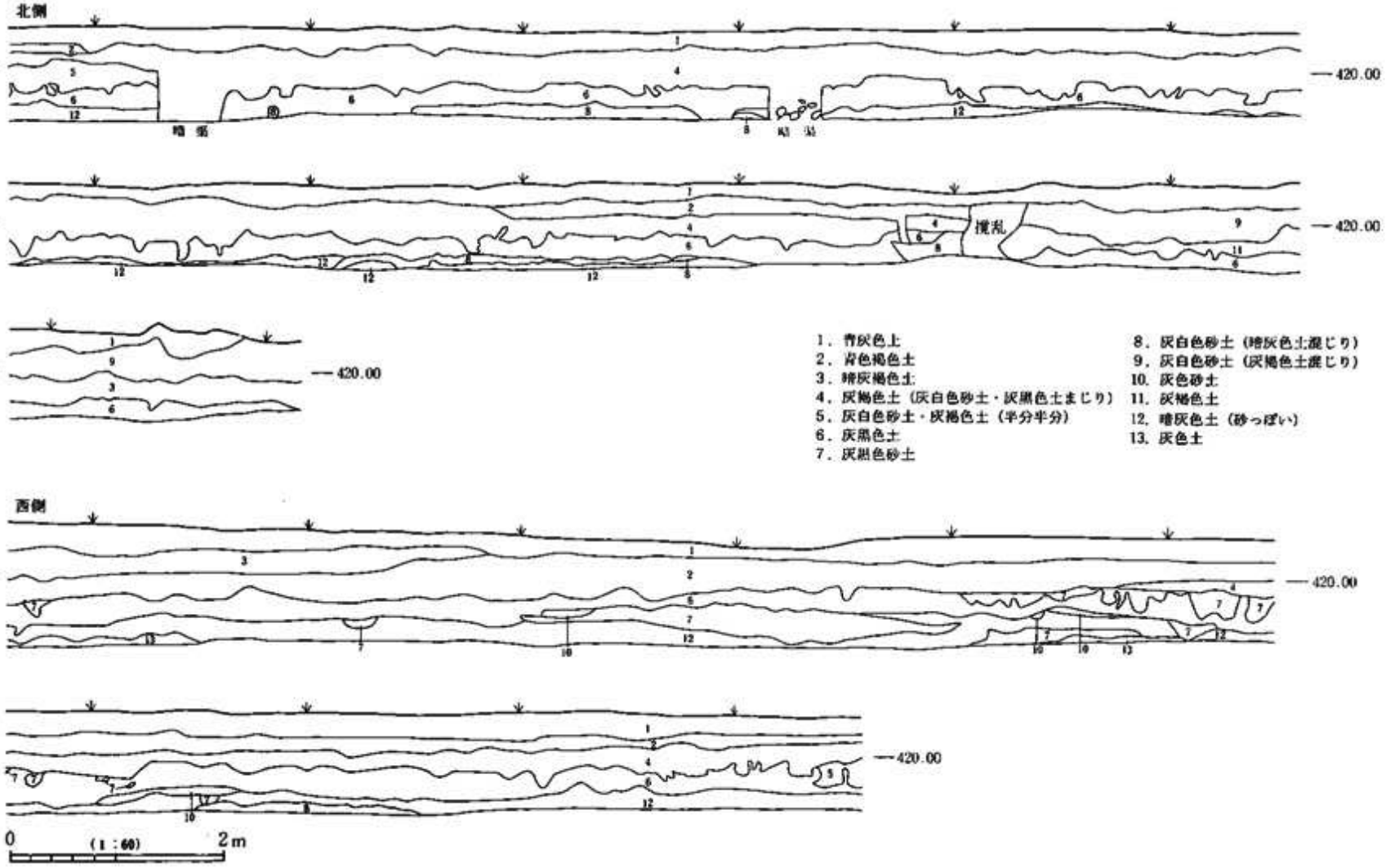
① A区（挿図10）

1層：青灰色土、現在の水田耕土である。

2層：青灰褐色土、旧水田面と考えられる。

3層：暗灰褐色土、旧水田面と考えられる。

4層：灰褐色土（灰白色砂土・灰黒色土混じり）



挿図10 HED A区 土層図

5層：灰白色砂土と灰褐色土が半分半分混じる。

6層：灰黒色土、平安時代の土器を包含する。

7層：灰白色砂土

8層：灰白色砂土（暗灰色土混じり）

9層：灰白色砂土（灰褐色土混じり）

10層：灰色砂土、5・7～10層は天竜川支流の小沢川の洪水による押し出しによって形成されたと考えられる。

11層：灰褐色土

12層：暗灰色土

13層：灰色土

調査は12層の暗灰色土までとした。北西側には灰白色砂土が広がっていて容易に検出できたが、45ラインの東側でAUラインの南側になると灰白色砂土がほとんどみられず、検出が困難であった。よって、調査も6層の灰黒色土でとどまった。

② B区（挿図11）

1層：青灰色土、現在の水田耕土である。

2層：灰褐色土、旧水田面と考えられる。中世陶磁器を若干包含する。

3層：灰黒色砂質土

4層：灰黒色土（灰白色砂土混じり）

5層：灰黒色土

調査は5層の灰黒色土までとした。調査区の南側は2層の灰褐色土から調査したが、北側では当初からこの面まで下ろしたため、十分な調査はできなかった。断面を観察すると、5層は畦畔状の盛り上がりを示す箇所があり、水田面の可能性が高い。A区では6層にあたる。

③ C区（挿図12）

1層：青灰色土、現在の水田耕土である。

2層：暗灰色土、旧水田面と考えられる。

3層：灰色砂土（灰黒色土混じり）

4層：灰黒色土（灰色砂土混じり）

5層：灰色砂土

6層：暗灰色砂質土

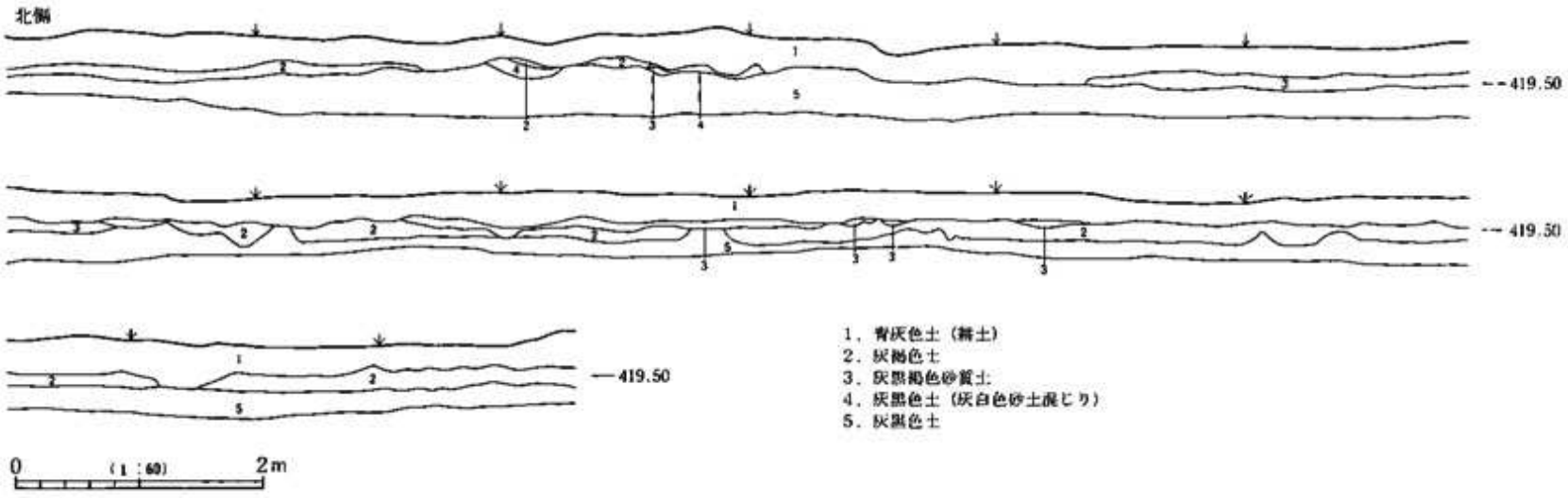
7層：灰黒色土（暗灰色砂質土混じり）、古墳時代後期の土器を包含する。

8層：暗灰色粘質土

9層：灰色粘質土、南西側で木・植物遺体・種子を包含する。

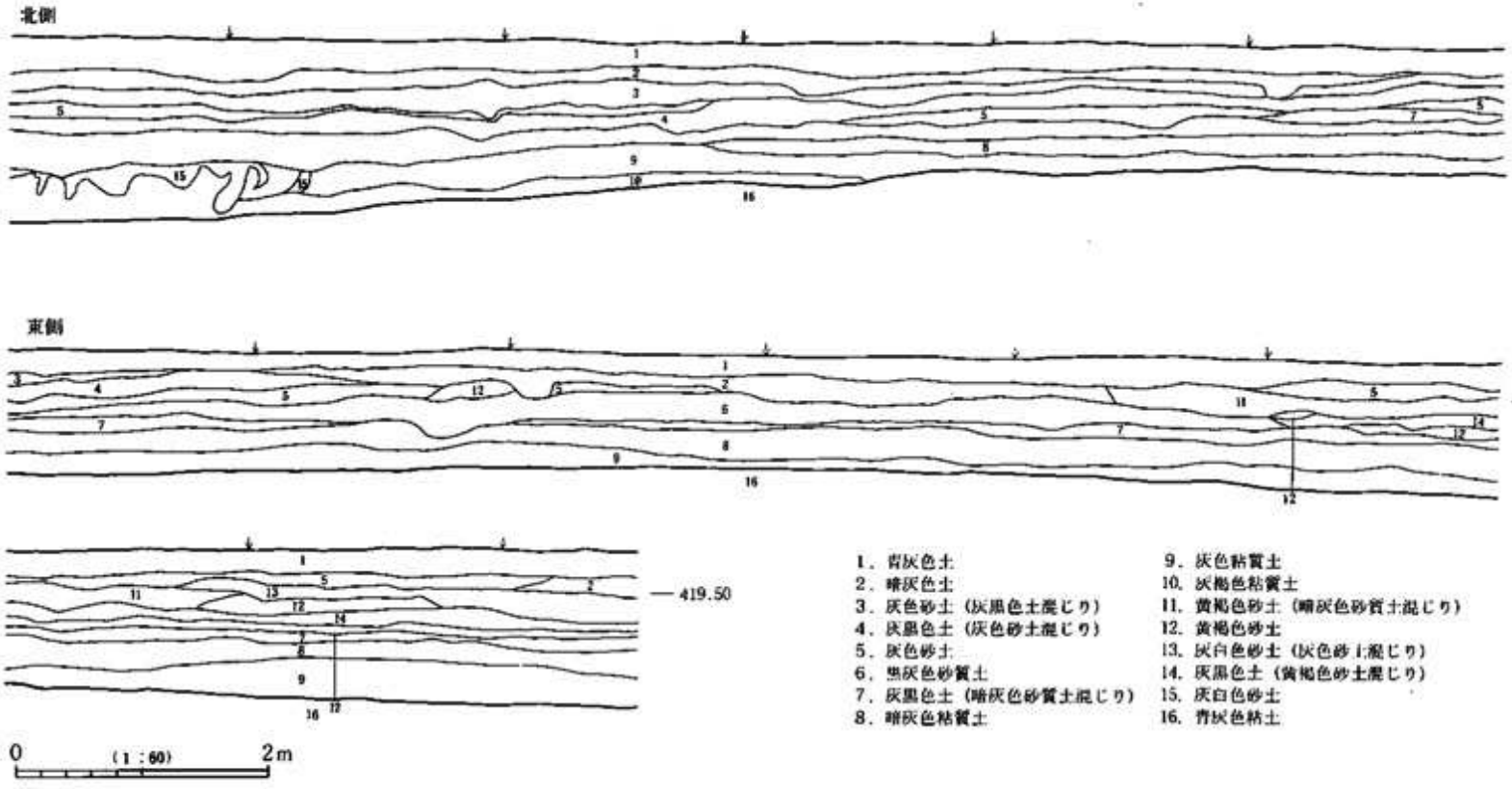
10層：灰褐色粘質土、木・植物遺体・種子を多量に包含する。

11層：黄褐色砂土（暗灰色砂質土混じり）



挿図11　HED　B区　土層図

挿図12 HED C区 土層図



1. 青灰色土
2. 暗灰色土
3. 灰色砂土（灰黒色土混じり）
4. 灰黒色土（灰色砂土混じり）
5. 灰色砂土
6. 黒灰色砂質土
7. 灰黒色土（暗灰色砂質土混じり）
8. 暗灰色粘質土
9. 灰色粘質土
10. 灰褐色粘質土
11. 黄褐色砂土（暗灰色砂質土混じり）
12. 黄褐色砂土
13. 灰白色砂土（灰色砂土混じり）
14. 灰黒色土（黄褐色砂土混じり）
15. 灰白色砂土
16. 青灰色粘土

12層：黄褐色砂土

13層：灰白色砂土（暗灰色砂質土混じり）

14層：灰黒色土（暗灰色砂質土混じり）、11～14層は砂が主体となり、川の流路と考えられる。

15層：灰白色砂土、小沢川の洪水による押し出しによって形成されたと考えられる。

16層：青白色粘土、基盤の上の層となる。

調査は16層上面までとした。８層までを重機で排土したため、古墳時代後期土器を包含する７層の調査ができなかった。基盤は16層の下にある青灰白色砂礫層である。

3）遺　構

（1）A　区

① 11層上面（挿図13）

図示した箇所は、A区の西側にあたり、ほぼ全面に灰白色砂土がみられ、それを取り除いて検出したものである。比較的容易に検出できたが、東側では砂が少なくなり、やや分かり難くなった。暗渠が縦横に走り、調査の土を運搬する通路や排水溝のため、全面的には調査できなかった。

はっきり断定はできないが、水田面と考えられるので、状態を説明する。

畦畔　畦畔状の高まりは、AM43からAY41にかけて認められた。調査延長は約22m・幅128～80cmを測り、方向はN３°Wを示す。高まりはわずかであるが、11～４cmを測り、ほとんど高低差が見られない箇所もある。これを直交する方向の畦畔状の高まりは確認できなかったが、AT40で西側に高まりがわずかに曲がっているようにもみられたので、区画の畦畔になる可能性がある。さらに、この畦畔から東に4.9m離れた位置に、同じ方向を示すほんのわずかな高まりが認められた。図示できるほどではないが、この箇所が畦畔である可能性もあり、前述の畦畔に対応するものかもしれない。

この面には灰白色砂土が入る小ピットがあり、小さなものでも掘り上げて図化し、上場のみを示した。前述した畦畔の部分に集中しており、ほかはあまり多くない。中には、足跡状のものもみられ、畦畔を通路として利用したため足などの痕跡がつき、そこに洪水による砂で埋まったものと考えられる。良好な検出状態のものは少なく、比較的深いものが多いので、軟らかい土であったことが推測できる。

遺物は、畦畔東側のAR43から竪杵、AR44から棒状木器が出土し、クルミ・モモの種などの種子類も得られた。

時期を決める遺物に欠けるが、灰白色砂土中に平安時代の内面黒色土器坏片・須恵器甕片、また６層の灰黒色土から平安時代の灰釉陶器皿などが出土しており、これらの層の下にある本面は平安時代以前のものと考えられる。

以上のように、極めて不十分な状態にしか調査ができず、推論による結論になってしまった。

挿図13　HED　11層上面

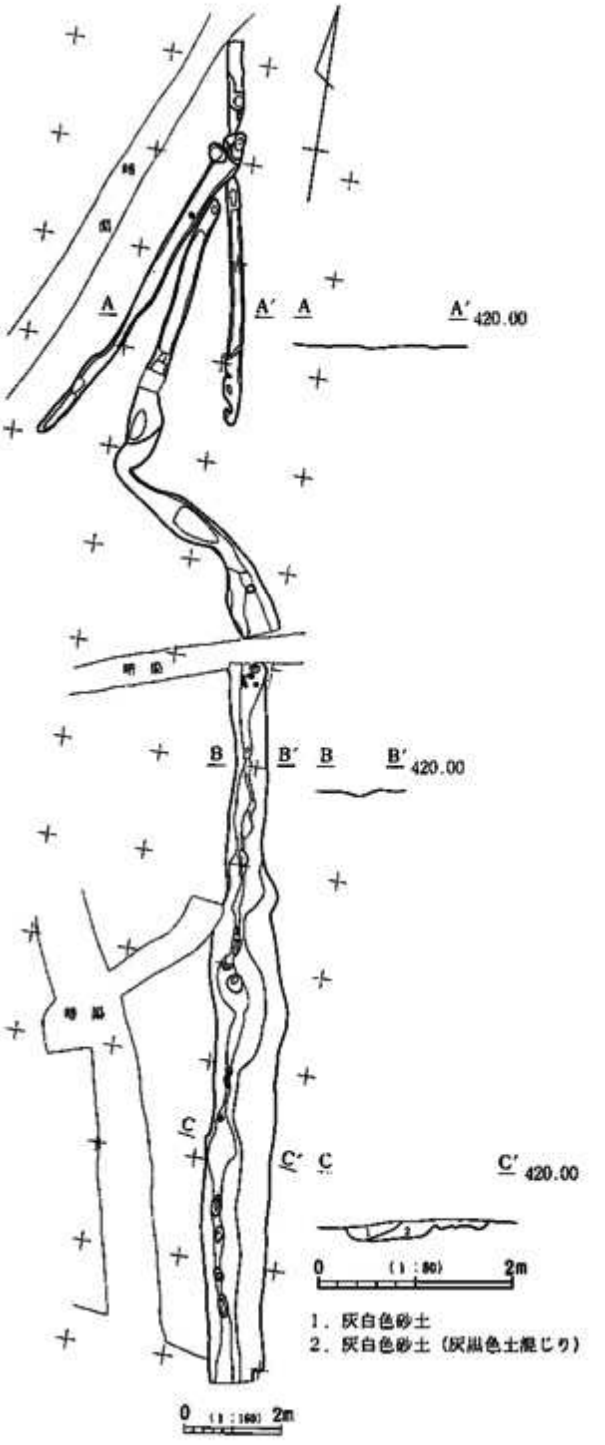
② 溝址１（挿図14）

Ａ区東側を縦断する形で検出した。この箇所は大部分が６層の灰黒色土上面で調査が終了しており、この面で検出した。暗渠に切られる。調査延長は33.6ｍで、両側に延長する。南側16ｍはほぼ直線的に続き、ＡＳ51付近で北西側にゆるく曲がって２ｍ続き、ＡＳ50で北東側に曲がって延長している。この箇所からは両側に溝があり、合計３本の溝になる。西側は延長約６ｍ・方向Ｎ26°Ｅ、中央は延長約５ｍ・方向Ｎ21°Ｅ、東側は延長約５ｍ・方向Ｎ９°Ｗを示す。ＡＷ50で1本になってＮ９°Ｗの方向に約２ｍ続き、その先は暗渠に切られて確認できなくなる。全体とすれば、幅145～30cm・深さ28～１cmを測り、方向はＮ９°Ｗを示す。断面形は基本的に逆台形を呈し、南側の溝の東側の壁は途中で段をもっている。覆土は砂を主体としている。北側の３本溝がみられる部分は灰黒色土を20cm程下ろしており、溝の底を把握したと考えられる。

遺物は奈良・平安時代の須恵器坏・蓋・甕片が１点ずつ出土した。

遺構の状況から、水田の用水路と考えられ、平安時代の層で検出され、出土遺物からも平安時代に位置づけられる。

前述した畦畔の方向ともほぼ同一の方向であり、時期は異なるが、古代の水田の方向を示唆するものといえる。



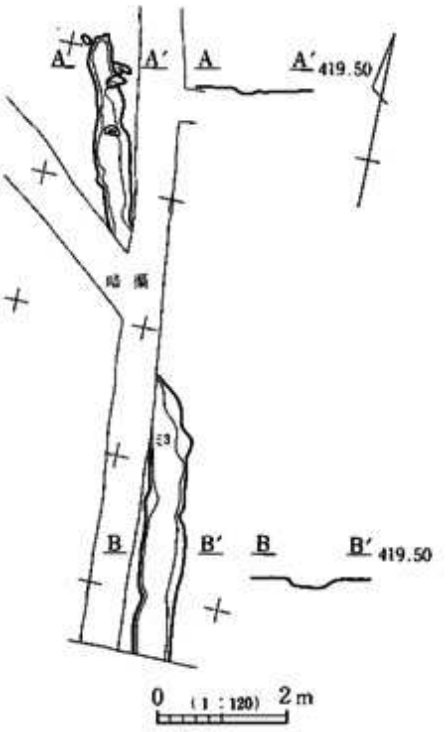
挿図14　ＨＥＤ　溝址１

（2）B　区

①　溝址３（挿図15）

B区西側、５層の灰黒色土下部で検出した。暗渠に切られる。調査延長は8.6mで、南側は未調査で延長し、北側は確認できなくなる。ほぼ直線的に続いていて、方向はN18°Wを示す。幅64～36cm・深さ19～２cmを測り、断面形は逆台形を示す。覆土は灰白色砂土が主体となる。北側が把握できなかったが、この箇所はやや灰黒色土を深く掘り下げており、削平してしまったものと考えられ、さらに北側に続いていた可能性が強い。

遺構の状況から、水田の用水路と考えられる。遺物は出土しないが、近接した位置にある溝址１より深い位置にあり、平安時代より古い時代に位置づけられる可能性が強い。



挿図15　HED　溝址３

②　溝址４（挿図16）

B区地中央、５層の灰黒色土中で検出した。暗渠に切られる。調査延長は15.9mで、西側は未調査で延長し、東側は確認できなくなる。ほぼ直線的に続いていて、方向はN76°Wを示す。幅187～35cm・深さ20～４cmを測り、断面形は不定形である。覆土は灰白色砂土が主体となる。本址の中央西側の溝底に、棒状の木器が溝と方向を揃えて入れられていた。東側が把握できなかったが、土層の見極めが難しくなったためで、続いていた可能性が強い。

遺構の状況から、水田の用水路と考えられる。

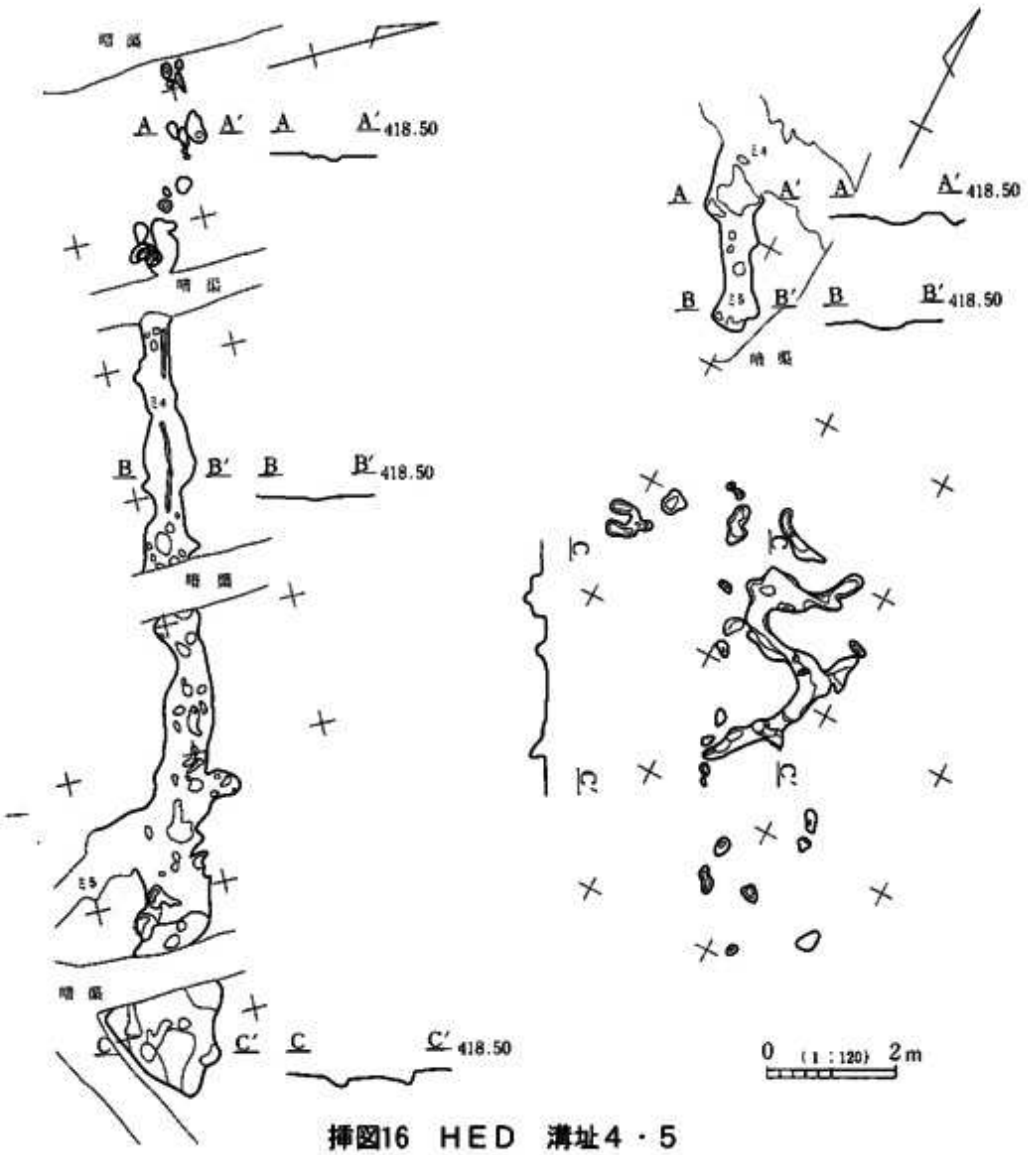
遺物は古墳時代後期の内面黒色土器坏片がある。西側は溝址１の検出面より下にあることが確認でき、出土遺物と総合すると、古墳時代後期に位置づけられる。

③　溝址５（挿図16）

B区中央、５層の灰黒色土中で検出した。暗渠に切られる。調査延長は12.4mで南・北側ともに確認できなくなる。溝の底の部分が断続的に検出されたと考えられ、方向はN29°Wを示す。幅86～16cm・深さ29～７cmを測り、断面形は不定形である。覆土は灰白色砂土が主体となる。

遺構の状況から、水田の用水路と考えられる。

遺物は古墳時代後期の須恵器片、平安時代の須恵器坏片２点が出土した。出土遺物と検出層位からみて、平安時代に位置づけられる。



挿図16　HED　溝址４・５

Ｂ区では３本の溝址を検出しただけであるが、層序の項で前述したように、５層に畦畔状の盛り上がりを示す箇所が認められ、調査が行き届かなかった点が悔やまれる。南東側では３層から調査したが、畦畔を確認することができなかった。５層からは田下駄が出土しており、明らかに水田面と考えられる。

時期は３層から４点の中世陶磁器片が出土しており、中世以前と考えられるが、時期を示す遺物の出土がないので明確でない。

（3）C　区

①　溝址２、杭列１・２（挿図17）

C区北東側から南側にかけて検出した。溝址とそれに関連する杭列があるので、一緒に記述を進める。

溝址２　９層の灰色粘質土下層で検出した。調査延長は12.4mで、北東側で２本の溝が１mの間隔で平行して認められ、南東側では３箇所の断続部をもって東側の溝の続きが延長している。総体とすれば、方向はN38°Eを示す。幅38～10cm・深さ28～１cmを測り、断面形は浅い逆台形をなす。覆土は暗灰色砂土である。両側に延長することは確認できなかったが、本址は溝の底の部分を把握したのみと考えられるので、続いていたと想定できる。

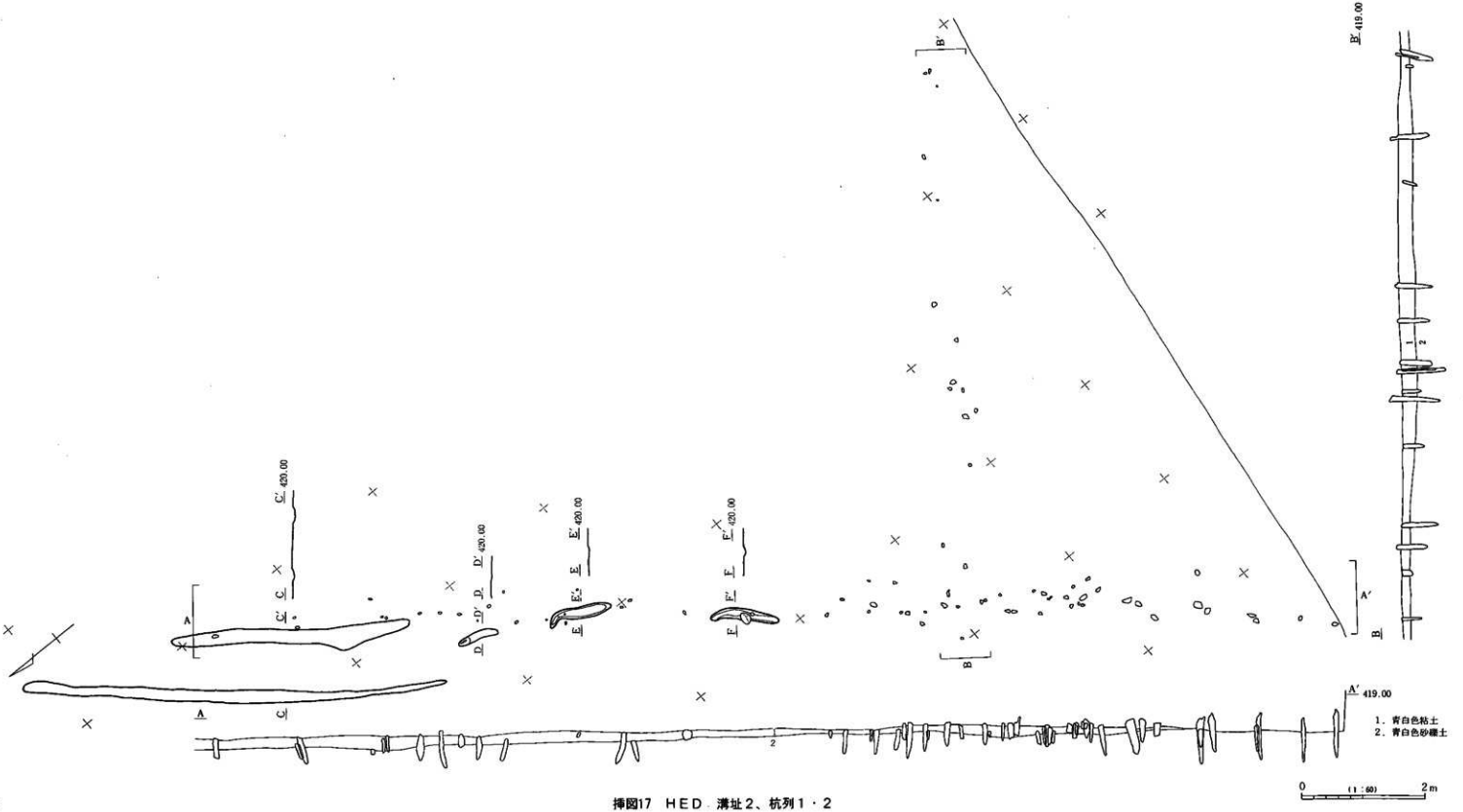
杭列１　９層下部から10層の青白色粘土上面で検出した。溝址２とほぼ同位置のAM74からAF69にかけて、60本の木杭が列をなして打ち込まれており、本址とした。調査延長は約18mで、方向はN38°Eを示す。杭は総体とすれば２列をなしており、幅・間隔などには規則性はみられないが、南東側に集中する傾向は認められる。杭は断面調査によって基盤の青灰白色砂礫土に深く打ち込まれているものがほとんどを占め、深い位置から打ち込まれたものと判断できる。腐蝕が進んだものが北東側に多いので、把握できなかった杭の存在は予想できる。

杭列２　杭列１と同様に９層下部から10層の青白色粘土上面で検出した。AI71から南東側に杭列１に直交する方向で17本の列をなして打ち込まれており、本址とした。調査延長は9.4mで、方向はN53°Wを示す。南東側が未調査になって確認できないが、延長する可能性が高い。本址も２列をなしており、杭列１に比べると間隔がまばらとなる。

溝址と杭列は、それぞれが単独で存在するものでなく、密接な関連をもっていたと考えられる。溝址２は一部でしか確認できなかったが、両側に延長する可能性が高く、水田の用水路と想定できる。方向・位置ともにほぼ同じである杭列１は、用水路の補強用に打ち込まれた杭であると考える。これらと直角の方向の杭列２も同様な役割を果たしていた可能性が高い。

遺物は杭列の木杭があるのみで時期の決め手に欠けるが、弥生時代中期に位置づく可能性が高い。その理由は、遺物の項で詳述するが杭の調整方法が石器を使用したと考えられること、検出層位が基盤に近くで杭の打ち込まれた層位もかなり下である可能性が高いこと、杭列１南西側のAAE・F70でまとまって弥生時代中期の土器が出土したことなどからによる。

弥生時代中期とすれば、水田面の明確な確認はできなかったが、これが存在する可能性が高く、棚田遺跡（上郷町教育委員会1987）につぐ発見となり、調査例の少ない弥生時代の水田研究に資料を提供することになったが、明確な遺構を検出することができなかった。再三述べているが、十分な調査ができなかったことが悔やまれてならない。



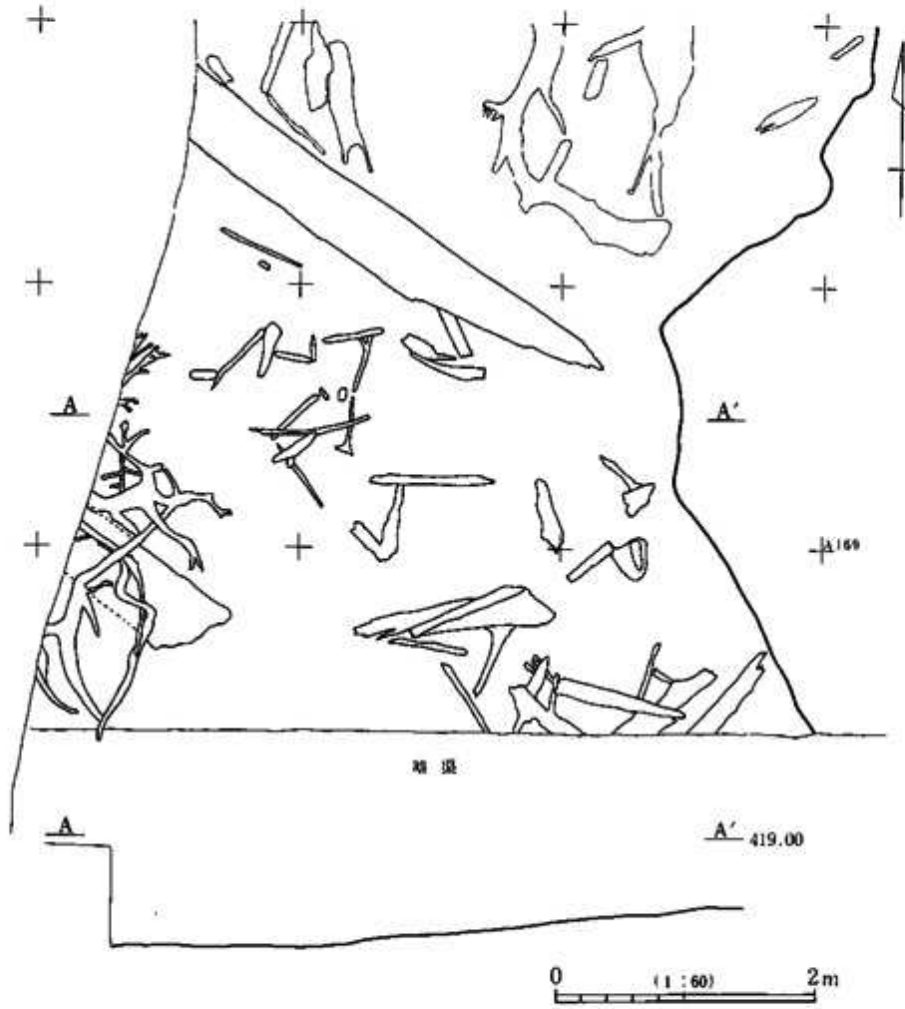
挿図17　HED　溝址2、杭列1・2

② 自然木・木器包含層（挿図18・19・20・21）

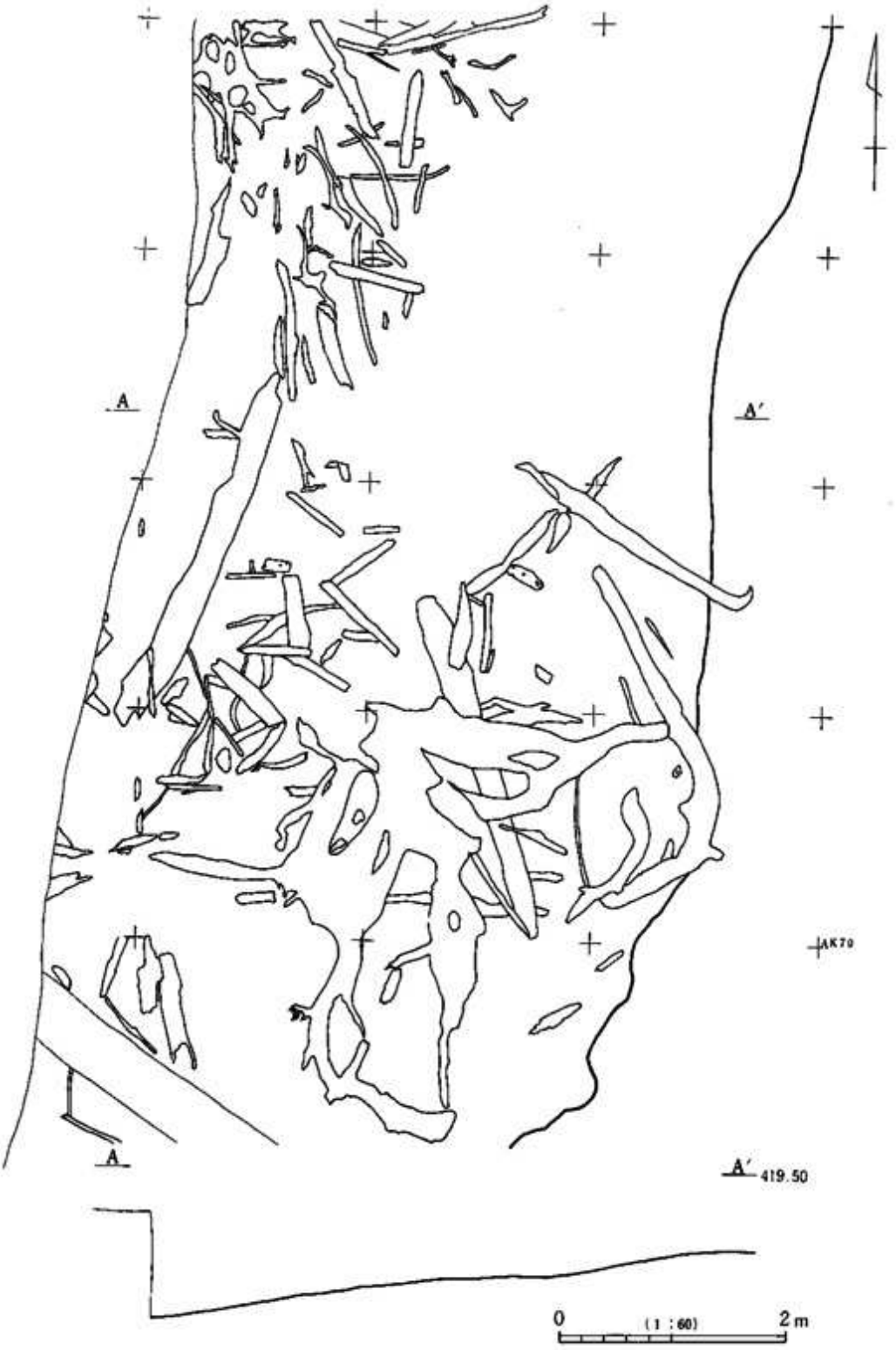
そのほかに、西側と南側に自然の木を主体として、木器・植物遺体・種子類を包含する層が確認された。西側が挿図18～20、南側が挿図21である。

西側包含層　ＡＨ68からＡＲ71かけての西側が若干の落ち込みをなして湿地となる部分に自然木などを包含していた。層位は９層の灰色粘質土と10層の灰褐色粘質土である。主体は自然木であり、ＡＰ70付近には木の根、ＡＫ68付近には倒木がみられる。材木状の大木もあり、かなり大量に包含していた。なかに、穴のあけられた板が、ＡＬ68・69から出土している。

南側包含層　調査区全体が南側の湿地に向かって若干傾斜しており、水分が多くなるので残ったものと考えられる。ほとんどが自然木であるが、ＡＧ69付近では加工した痕跡の認められる棒状木器が出土した。



挿図18　ＨＥＤ　Ｃ区西側　自然木など包含層（１）



挿図19　HED　C区西側　自然木など包含層（2）

挿図20　ＨＥＤ　Ｃ区西側　自然木など包含層（３）

挿図21　ＨＥＤ　Ｃ区南側　自然木など包含層

4）遺　物

生産域という遺跡の性格を反映して、遺物の出土量は少ない。特に、土器・石器は極めて少ないが、湿地帯という条件から、木器類が比較的多く得られており、これらはこれまで出土することが少なかっただけに貴重な資料といえる。

（1）土器（第5図）

縄文土器から近代陶器まであるが、図示・拓影できるものの総数が25点である。

縄文土器　C区南側の9層から出土した。中期後半の深鉢片（1）で、全体に摩滅しており、流れ込み遺物である。

弥生土器　C区南側の9層AE・F70から比較的まとまった遺物が出土した。中期後半の北原式土器の甕（2～15）で、浅い櫛描文が施される。16も同じ付近から出土した同時期のものである。17・19はA区6層、18はC区1層から出土した後期土器である。

須恵器　甕の破片が3点（20～22）あり、いずれも1層の耕土から出土した。

灰釉陶器　A区6層から出土した。K－14に比定できる皿（23）である。

近世陶器　24・25でいずれも1層の耕土から出土した。

（2）石器（第6図）

石器の出土は極めて少なく総数が8点で、全てC区で3・4・5・7が9層、1・2・6・8が10層から出土している。

弥生時代と考えられる打製石斧（1～5）・横刃形石器（6・7）と縄文時代のチャート製打製石鏃（8）である。

（3）木　器

本遺跡を特徴づける遺物といえる。木杭・竪杵・田下駄・有孔板・棒状木器などがある。

木取りは断面に模式的に、スクリントーンは炭化した部分をあらわしている。

①　木杭（第7～21図）

杭列1・2に打ち込んであった木杭である。

大きく分けると板材を使用したもの、角材を使用したもの、その中間の断面が三角形を呈するものに分類でき、加工方法で区分することができる。

板材　割って作った板材を使用したものである。先端の加工方法で、工具などで尖らせたもの（7－1～5・7、8－1、9－7、17－1・2、21－1）、切っただけでほとんど加工を加えてないもの（7－6、8－5、9－1～6・8、10－1～3、18－2・5・7・9、19－3～5、20－1）がある。ほかに、炭化させたもの（8－2～4）がある。

角材　割って作った角材を使用したものである。板材に比べると大きなものが多い。そのために全て加工で先端を尖らせている。残存部全体に工具の加工痕が認められるもの（12－1～4、13－1、17－1・2）と、先端のみに加工痕が認められるもの（13－2、14－1～3、15－1～5、18－8・12、21－1～4）、全体を炭化させたもの（20－4）などがある。しかし、加工痕は残存状態が悪ければ確認できないので、明確に分けれるわけでもない。

中間材　板材と角材の中間のものを一括した。断面形が三角形を呈するものが多い。先端を尖らせたもの（10－4・5、11－2・3、15－2・3、17－1・2）、ほとんど加工を加えてないもの（11－1、21－4・5）などがある。

全体をみると、割ることによって作った材料を、打ち込むに必要最低限の加工を加えて杭としたものといえる。加工痕を観察すると、金属による鋭い痕跡は認められないので、木工用の石器によって作られたものと考えられる。時期は弥生時代中期の可能性が高いことを指摘しておく。

② 竪杵（第22図）

A区11層上面ＡＲ43から１点（１）出土した。ほぼ完形であるが腐蝕が進んでおり、握部は破損してしまった。搗部と握部が明確に区別されず搗部から握部に除々に細くなっている。全長は80cmを測る。

③ 田下駄（第23図）

B区６層中のＡＵ65から１点（１）出土した。先端の一部が欠けてはいるがほぼ完形である。合計11箇所孔があけられ、２個対のものが両端の左右にある。一部に刃物による加工痕が認められる。長さ46cm、幅16.2cm・厚さ2.1cmを測る。

④ 有孔板（第22・23図）

用途不明であるが、板に孔が開けられたものが４点出土した。

22－３はＡ区ＡＵ477層の灰白色砂土中から出土した。先端が尖って６箇所に孔があく。破損するため全体形は不明である。

23－１はＣ区ＡＬ69の９層中から出土した。ほぼ完形で、６箇所に孔があけられる。刃物による加工痕が全面に認められる。長さ31.2cm・幅9.8cm・厚さ2.5cmを測る。

23－２はＢ区ＡＫ55の５層中から出土した。破損しているが残存部に４箇所の孔が認められる。

23－２はＣ区ＡＬ68の９層中から出土した。破損しているが残存部に３箇所の孔が認められる。

⑤ 棒状木器（第23・24図）

用途不明であるが、棒状に加工された木器が図化したもので12点ある。ほとんどが破損しており、全体形が分かるものはない。

出土位置は、23－４（不明）、23－５（Ａ区ＡＶ46の７層）、23－６（Ａ区ＡＲ45の11層）、23－７～９（Ｃ区ＡＧ69付近の９層）、24－１（Ｂ区６層）、24－３～６（Ｂ区溝址４底部）である。

23－４は残存部に２箇所の孔が認められる。

5）小　結

ヒエ田遺跡の発掘調査によって検出された遺構・遺物は既に述べてきた通りである。秋のイネの刈り取り以降に発掘調査を済ませ、整理を実施して報告書を刊行するという日程的な制約があった。当初は湿地帯に面するやや小高い部分に遺跡が立地しているので、集落が展開しているのではとの予測をもって調査に入った。すぐにこの予測がはずれて、湿地帯が広がりをみせて集落が立地できる条件でないことが判明し、生産域の解明に調査の重点を移行した。調査者がこうした場所の発掘を経験しておらず、試行錯誤を繰り返したため、極めて不十分な調査・報告になってしまい、記録保存という本来の目的が達せられたのか若干の危惧を感じている。ここでは、調査によって得られた問題点を指摘してまとめとしたい。

遺跡は南側に展開する大きな沼状の湿地帯縁辺部に立地する。こうした上郷町下段の飯沼地籍に広く共通する環境は、弥生時代に到来した稲作にとって絶好の条件と考えられ、古い時代からの水田址があるのではと考えられてきた。棚田遺跡などの調査によって少しずつではあるが湿地帯に発掘のメスが入れられるようになり、十分ではないが材料が得られるようになってきた。

ヒエ田遺跡では、溝址５本と溝址に伴うと考えられる杭列２本が主な遺構であり、明確ではないが畦畔状の箇所も認められた。全てが同一の時期に属するわけでないが、方向がほぼ一致するものもあり、用水を管理して水田を耕作していたことをうかがわせた。水田調査に不可欠な、畦畔の検出が明確にできなかったので、水田の広さや用水の状況などを把握することは不可能であったことは残念である。

溝址２と杭列１．２は基盤直上から検出し、杭の製作技法や層位・出土遺物からみると弥生時代中期に位置づく可能性が考えられる。明確な水田面の検出はなかったが、遺構の項で前述したように水田用水路とそれを補強する杭だとすれば、県下でも極めて少ない調査例ということになる。方向をみれば、古墳時代以降と考えられる溝址１・３、畦畔？とは異なっており、時期による違いを見せているのかもしれない。ちなみに、二つの方向とも現代の畦畔の方向とは一致していない。

出土遺物は湿地特有の木器類を主体としている。中では、平安時代以前と考えられる水田面でから出土した竪杵は、県下ではほとんど類例がないものであり、貴重な資料といえる。脱穀用のものとすれば、どうしてここにあったのか不思議なところである。

水田調査に不可欠と考えられるプラントオパールや花粉分析などの科学的分析は実施できなかった。推論による結論のみばかりで、こうした調査を実施していれば確かな裏づけとなるので、行なう必要があったと反省している。今後のこうした調査への教訓としたい。

Ⅳ 発掘調査のまとめ

1．南条中部地区の遺跡範囲

先にも触れたように南条中部地区土地改良基盤整備事業当初計画では事業地の北側に「一丁田」遺跡が該当するために、この事業に先立つ発掘調査遺跡は一丁田遺跡として計画実施された。その後地権者の都合により一丁田遺跡範囲に含まれる地籍は除外され、遺構・遺物が発見されたところは散在し、それぞれの遺構検出地には隣接する別の遺跡地が登録されていて、この地域の遺跡範囲の捕らえ方に大きな課題が残された。溝址１・溝状遺構が検出されたＡ地区の南に接する一帯はやや高く、東側に北浦遺跡・南側にやや離れた位置に薮越遺跡が登録されている。

南条近道線までは遺跡登録範囲から外れてはいるが、南側の未調査地にも遺物散布がみられ、Ａの道路予定地に平安時代の遺構・遺物が発見されているので、地形からみてもどちらかの遺跡に包含されるものと思われる。溝址２が検出されたＣ地区南側は遺物の発見が少なかったけれど、基点０から90m辺りの下部砂質土層から遺物発見があったこと、西側の唐沢氏住宅周辺から土師器・須恵器片が表採されることから包蔵地の可能性が強い。低湿地地形を類推できそうな砂質土層の厚さも見られるので、西側に登録されるヒエ田遺跡に包含されてよいと思われる。溝址３・水路が検出されたＣ地区もヒエ田遺跡との中間に位置する。挿図２の遺跡図のようにヒエ田遺跡は国道153号線の西側から国道の東側中部電力飯田電力所の南側までが登録範囲である。ヒエ田遺跡の性格が低湿地を含めたその周辺の生活地範囲であるとするならば、今回の溝址３・水路遺構はこの性格を立証するものであり、昭和63年に実施されたヒエ田遺跡の低湿地帯を象徴する諸遺構の検出結果と合わせ考えれば、ヒエ田遺跡に大きく包含されるのが最も妥当かと思われる。残される問題は一丁田遺跡の取り扱いである。川を挟んで同一遺跡に包含する問題点もさることながら、一丁田そのものの小段丘先端台地上の立地条件との差異が問題になる。しかし、田中八幡宮が奉祭される小台地の間に狭いながらも低湿地を挟む地形があることから、びくに畑遺跡に包含することは不合理にも思える。さすれば、一丁田かヒエ田遺跡に包含ということになって結論は付きにくい。

以上のことから、今回の中部地区発掘調査の結果により遺跡の名称・遺跡の範囲・隣接遺跡との関連をどう捕らえてよいか迷いながら「一丁田遺跡」のまま報告原稿を執筆したが、今後の大きな課題として低湿地帯とその周辺生活地をどう関連付けるかが、重要な解決策の一つかと思われる。

2．低湿地遺跡の問題

低湿地帯にも古代水田址やそれにかかわる各種用水管理遺構が埋没されているであろうことは予測されても、その実態が検証された発掘調査例は非常に少ない。それどころか、遺跡範囲にさえ含める資料に事欠くために、遺跡から除外されているのが現状である。このことからすれば今回の中部地区・ヒエ田遺跡発掘調査のもつ意義は大きいといえる。

上郷町低位段丘Ⅱ地帯の飯沼・別府・南条面のなかには各所に低湿地がある。現在でも微地形・水路の方向・土地利用状況等から概況を知ることはできるが、土地改良の進行・住宅造成・河川の改修等により原状が大きく変貌しているところが多い。一概に低湿地帯といってもその立地する場所・地形・土壌・水量・其の後の土地利用状況により、広さ・幅・深さ・堆積土壌等様々である。その実態を知るためには旧態を究める古い土地利用図・古字・旧用水図・旧道図を収集することも必要であるが、ボーリング調査か発掘調査が不可欠となる。

現代のように飲料水・農業用水管理が行き届いていれば湧水地・低湿地帯の効能はさほど気にならないが、古くは重要な生活源の一つであった。中世・古代ともなれば尚更のことで、水稲耕作最適地と選ばれ時代の経過とともに用水管理技術も進み、人々の生活を支える重要な生産地域として活用されている。低位段丘Ⅱ地帯では低湿地周辺に重要な遺跡が立地する例が多い。例えば釜の口・御蔵前・ヒエ田・矢剣・丹保・一丁田・びくに畑・北浦・橋爪・長橋・竹ノ内・棚田遺跡等である。このなかで発掘調査でその実態の一部でも確かめ得たものは、台地先端に弥生時代の集落を形成し、湿地帯に面して祭祀的な土器群列を配列した飯沼丹保遺跡、弥生時代の水田跡・平安時代の杭列・中世の用水管理の杭列等が検出された南条棚田遺跡、池状遺構と多量の流木の堆積を検出した南条北浦遺跡と今回の一丁田・ヒエ田遺跡に過ぎない。とはいっても下伊那地方全域をみた場合豊丘村伴野本田遺跡・喬木村里原遺跡くらいのもので、上郷町がその先鞭となっている。

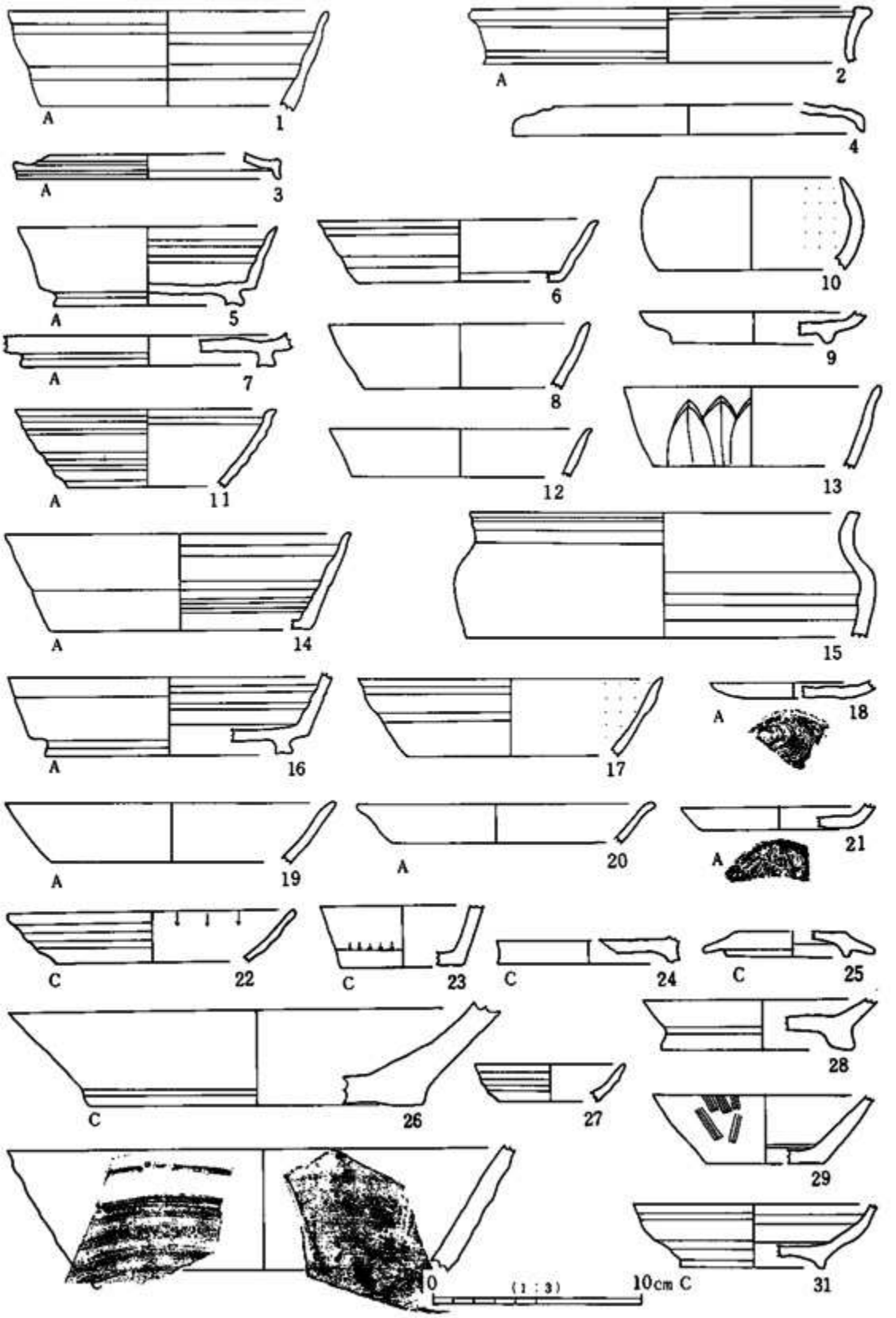
今回の一丁田・ヒエ田遺跡の発掘調査は、典型的な南条湿地帯の中心に位置していることに大きな意義がある。調査季節・調査期間・専業地としての水田地であるが故の制約があって、十分な調査ができなかった恨みはあるが、それぞれが湿地帯特有の遺構検出に成功し、今後の調査遂行の先駆けになったことは大きな成果と思われる。とくに中部地区（一丁田遺跡）の遺跡立地のあり方・周囲の地形と関わる湿地帯の様相・伝承に残る湿地帯の一部の検証・小段丘先端部とその内側に形成される湿地帯のあり方等究明に大きな示唆が与えられている。湿地帯調査については幾多の困難点がある。先ず湧き出る水の処理・深い土層帯の調査方法・大量に包含される植物遺体の検索処理・水田跡用水管理の遺構検出には広範囲の調査区が必要なこと・土壌検証花粉分析プラントオパール分析等の科学的な調査方法の採用等である。別府面に湾入する南条面に立地する湿地帯の解明は、周辺遺跡の持つ性格解明のために欠くことの出来ない主要条件と思う。

3．古代東山道推定通過地に関わって

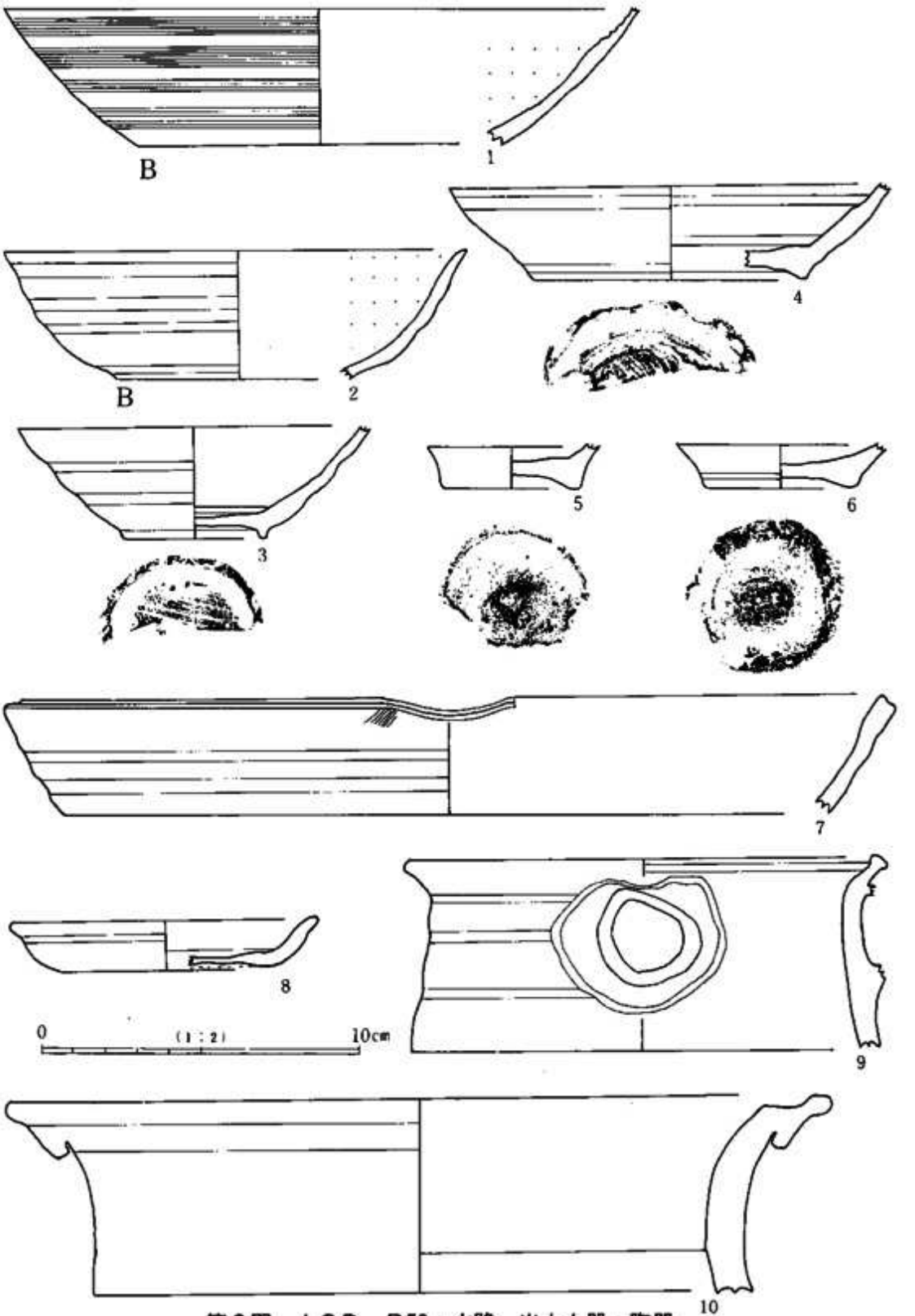
発掘調査結果には直接関わらないことだが、従来からの先学各位の研究による結果・近年長野県文化財保護協会を中心にした研究結果によっても、古代東山道は低位段丘Ⅱ地帯の何処かを通過したと推定されている。飯田市座光寺恒川遺跡群内に伊那郡家の所在が有力視されているが、育良駅家の所在地については伊賀良地籍にする説・竜丘松尾地籍にする説が主張されていて、上段通過・下段通過のコースは定まっていない。阿知駅家から伊那郡家に至るコースが、上下どちらにしても松川下流の永代橋周辺で渡河して、別府、南条上段を通過して飯沼・座光寺恒川へ向かうコースが有力とされている。別府・南条地籍を通過するコースでも、低位段丘Ⅰの段丘崖下を通る説・中間にある小段丘先端近くを通る説・この段丘崖下（高屋線通り）を通る説がある。

考古学上古墳・奈良・平安時代の遺跡・遺物から推量すると、竜丘・松尾地域の古墳密集地帯に捨て難い魅力があり、近年の考古学発掘調査等によって検出・発見された奈良・平安時代の遺構・遺物によると、竜丘・松尾地籍を通過するコースが有力とする説が強い。松尾地籍の有力な通過推定地は毛賀下段から水城地籍へ繋る下位段丘地帯といわれるが、そうなると松川渡河点は永代橋より下流と推定され、一般的に言われる東山道の直進性を採用するならば、座光寺恒川へのコースは低位段丘Ⅱの中段の段丘先端部が最適地と思われてくる。この段丘先端部通過説に対して南条・飯沼地区の低湿地帯が障害となるとする説もあって宜なるかなと思われるが、段丘先端部まで湿地帯が続くかどうかが選定の鍵になる。座光寺地区から土曽川を越えて堂垣外・中方から一丁田へ出て大清水（ヒエ田地籍）へ通ずる旧道があったと伝えられるが、これも検証の手掛かりになると思われる。

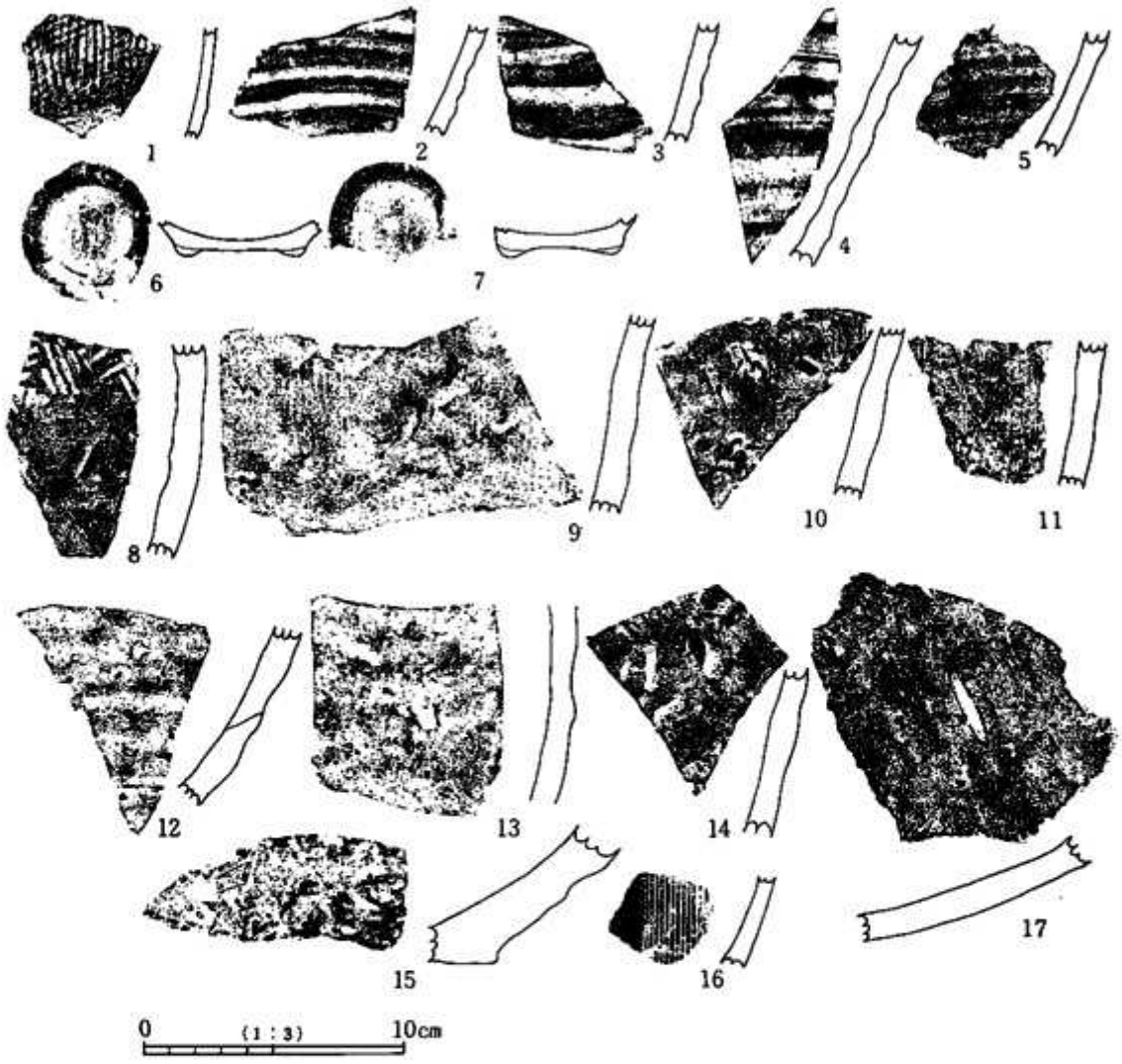
南条上段地域に広がる湿地帯は国道153号線の周辺が中心で、主たる湿地帯はヒエ田遺跡辺りかと思われる。先述のように調査地中部地区は周辺の遺跡に取り囲まれる位置にあって、未登録地であったこと・遺構の検出はあったが低湿地特有の遺構が主であったこと・並行して実施された町道山下線予定地の発掘調査により乾湿両地籍があったこと・伝承による湿地帯の中心は国道添いにあったこと・北浦遺跡調査結果も含めて帯状に湿地帯が存在すると推定されること・田の付く地字は各所にあるが飯沼・南条では国道添いに多いこと等から、湿地帯と居住的な遺跡の共存関係・生産地域としての湿地帯そのものの正体・古くから鎮座される田中八幡宮地の立地要因等を解明したいと痛感する。



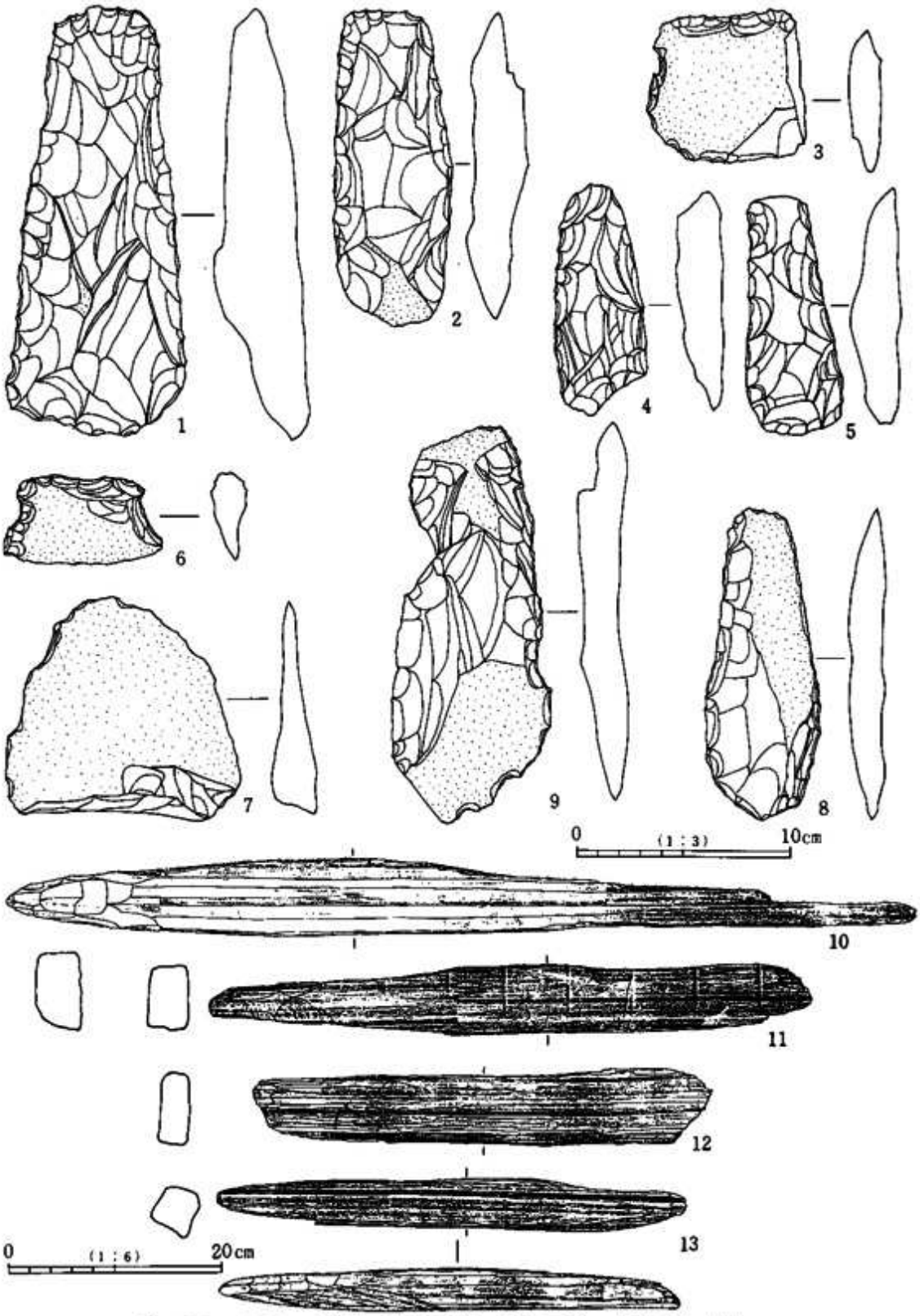
第1図　ICD　溝址1・溝状遺構出土土器、水路2出土陶器
（5～12溝址1・14～16　溝状遺溝1　22～30　水路　31　溝址3）



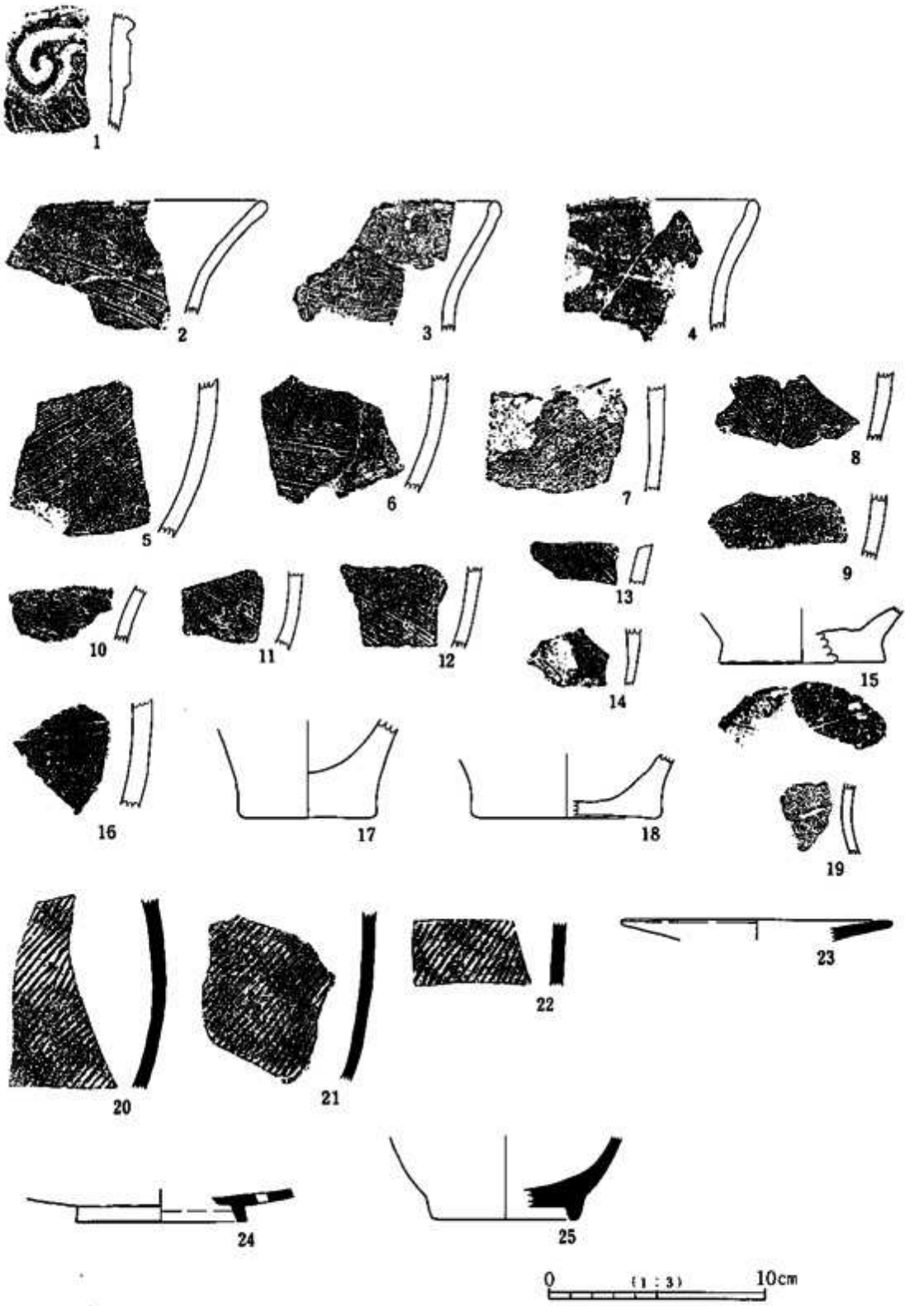
第2図　ICD　B50・水路　出土土器・陶器
(1・2　B50　3～10　水路)



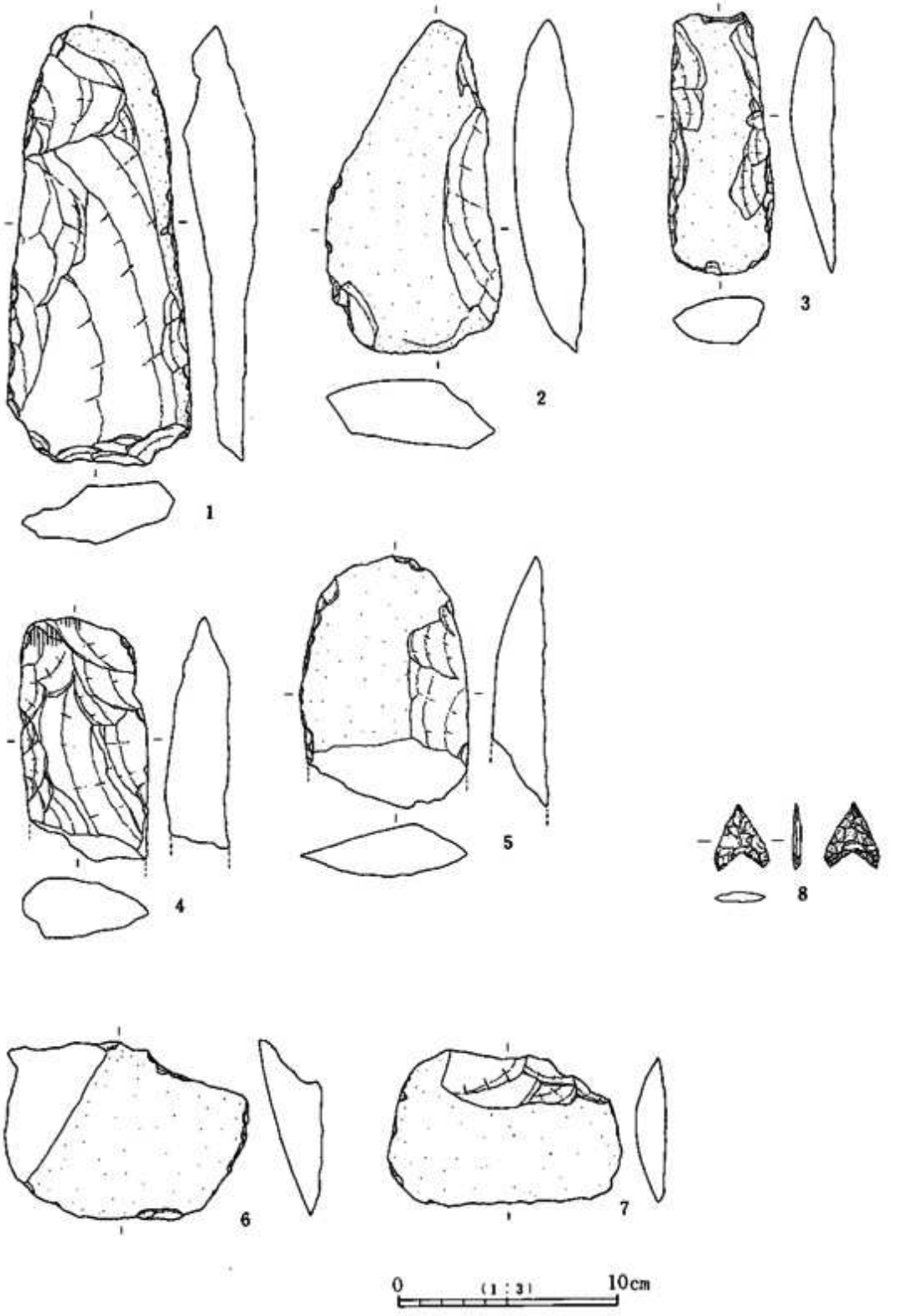
第3図　ＩＣＤ　水路出土陶器拓影



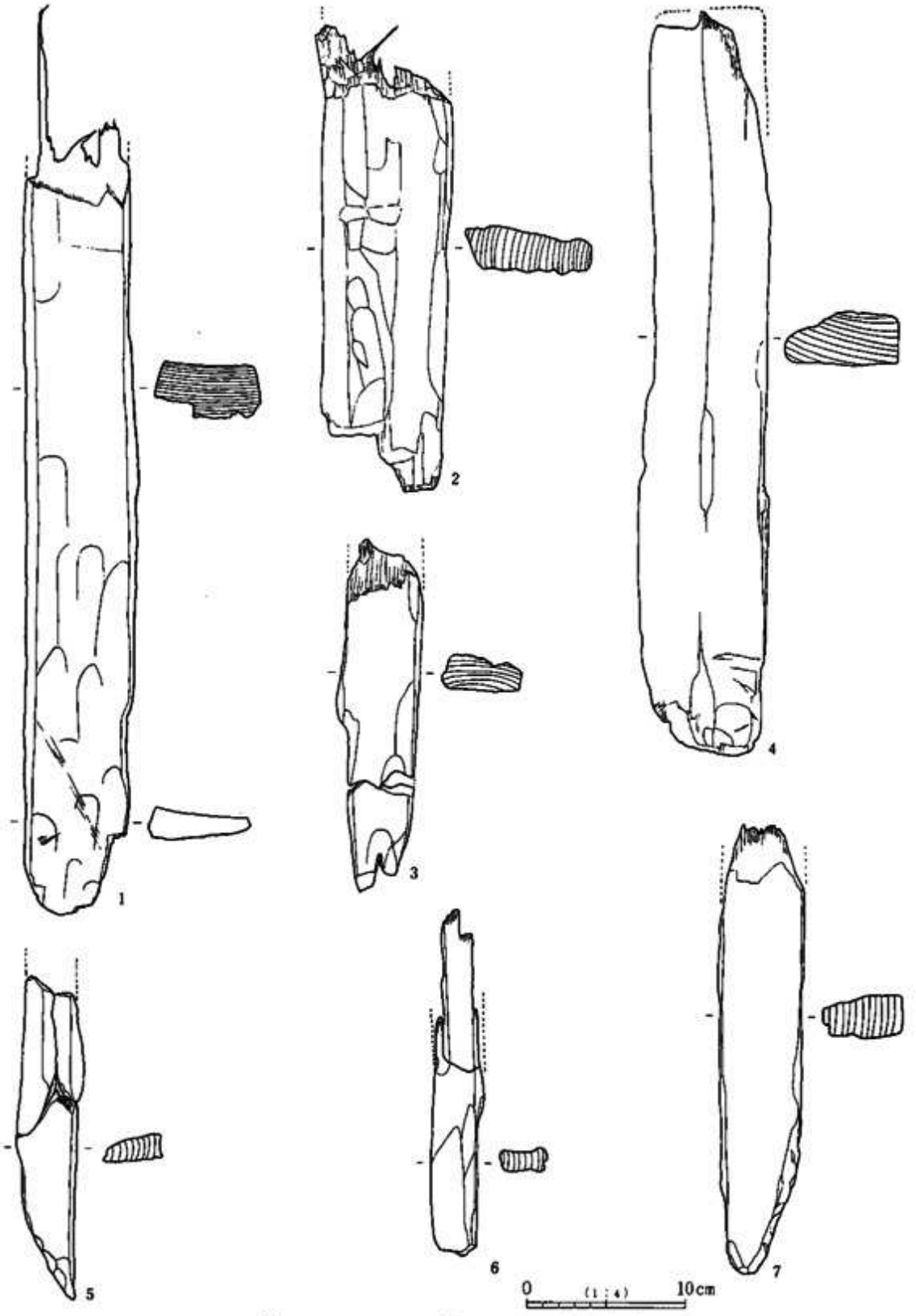
第4図　ICD　溝址・溝状遺溝・出土石器・水路出土木杭
（1～4溝址1　5～8溝状遺溝　水路　出土木杭　9～12）



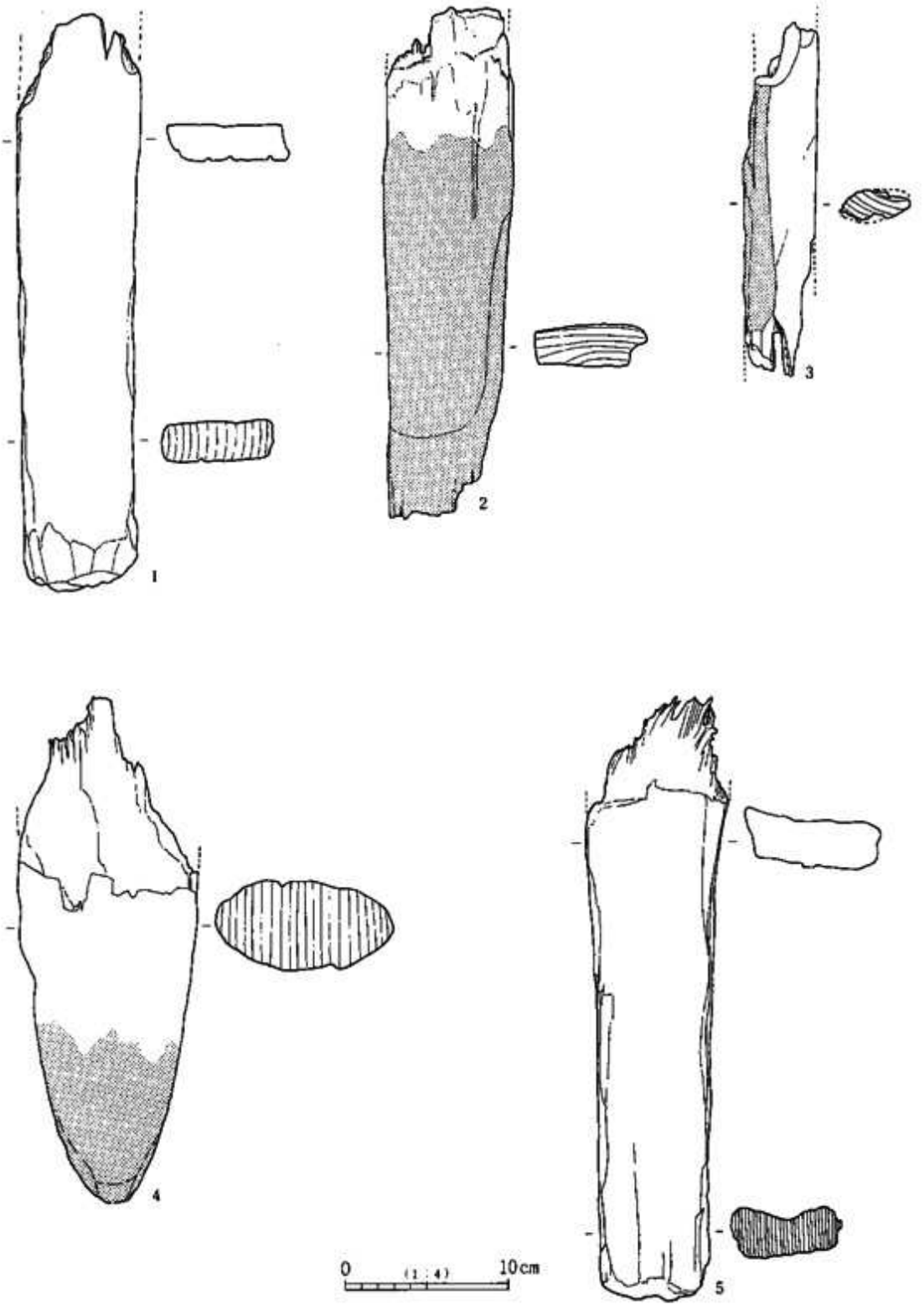
第5図　HED　出土土器



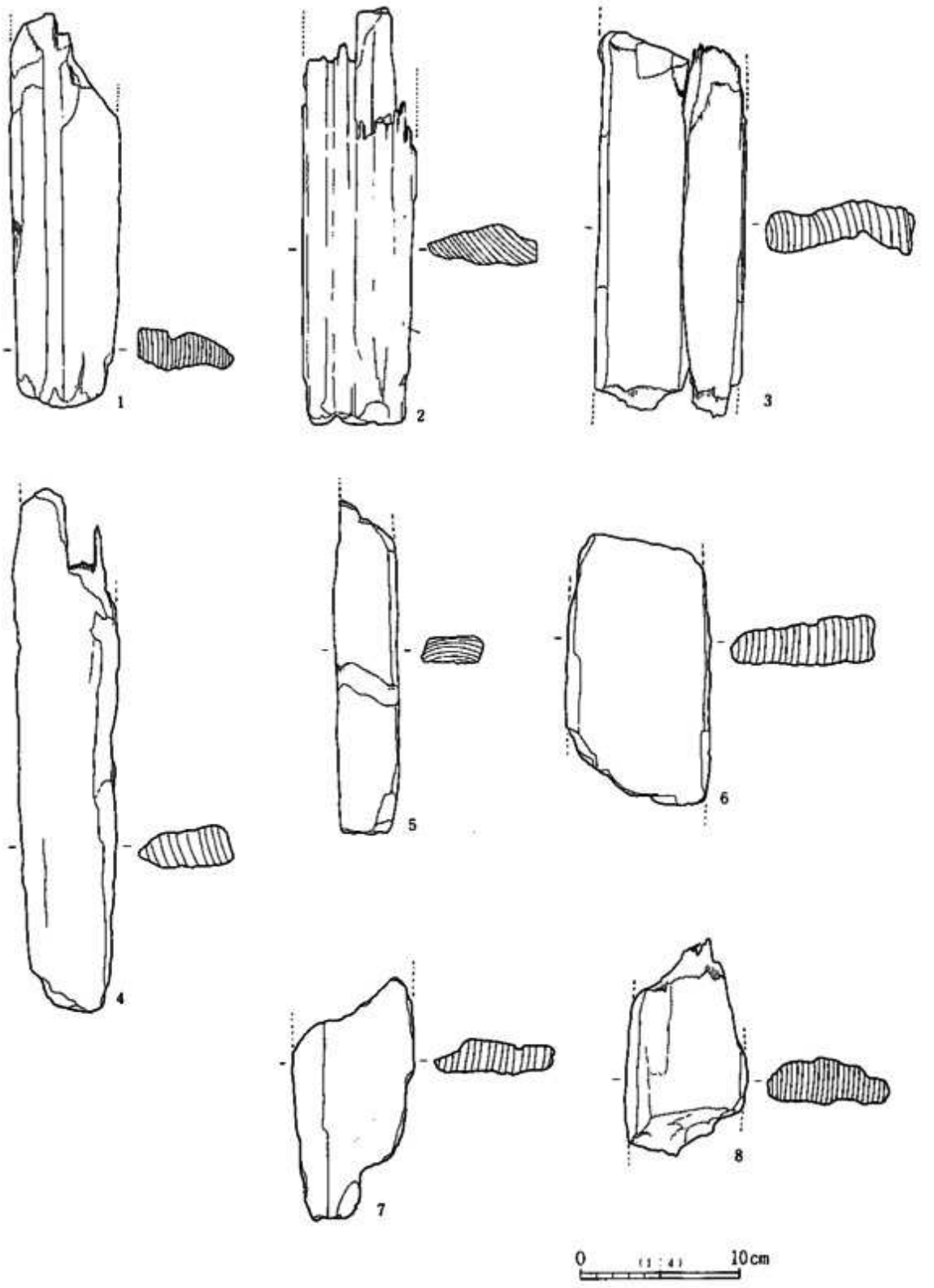
第6図　HED　出土石器



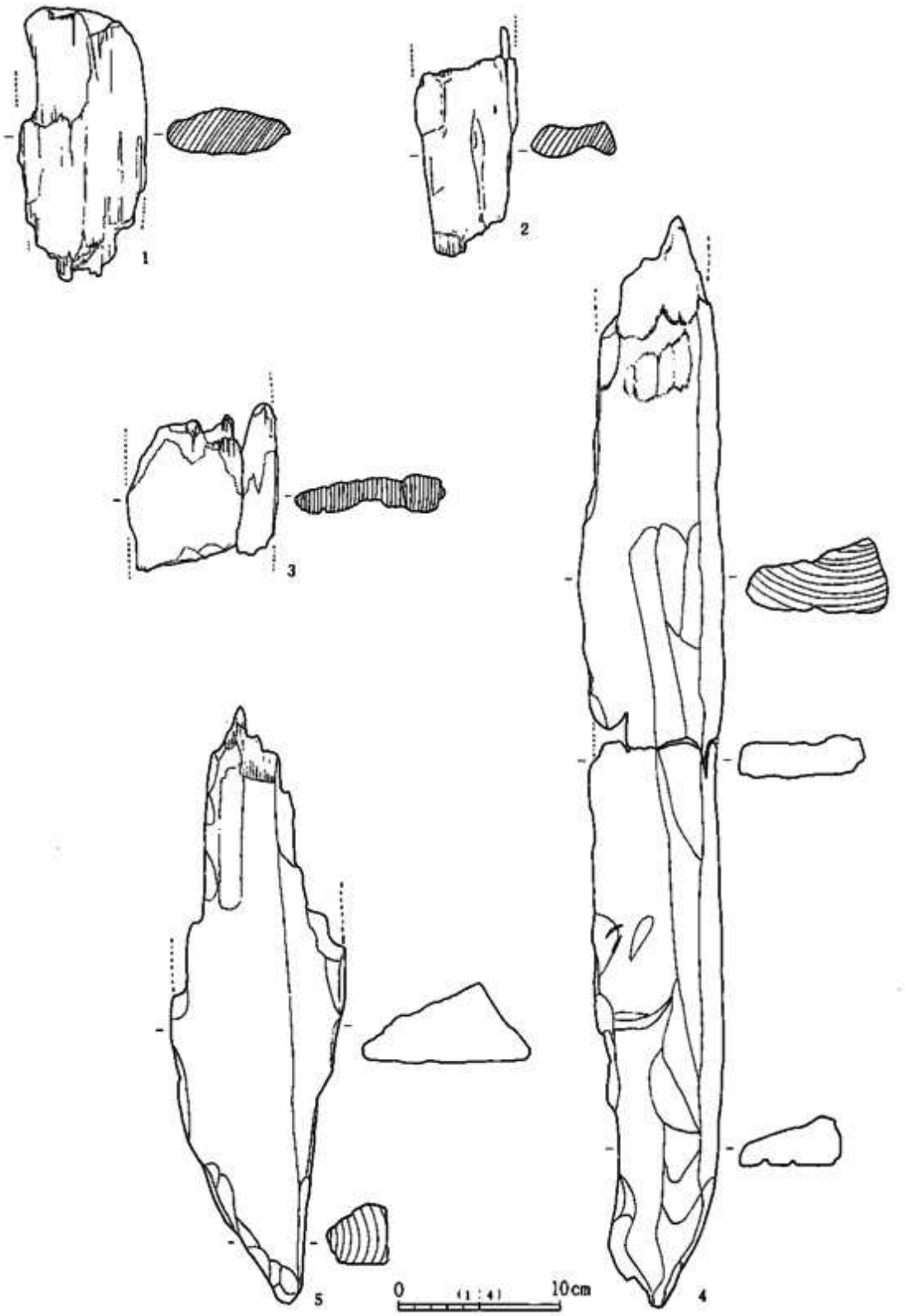
第7図　HED　杭列1出土木器（1）



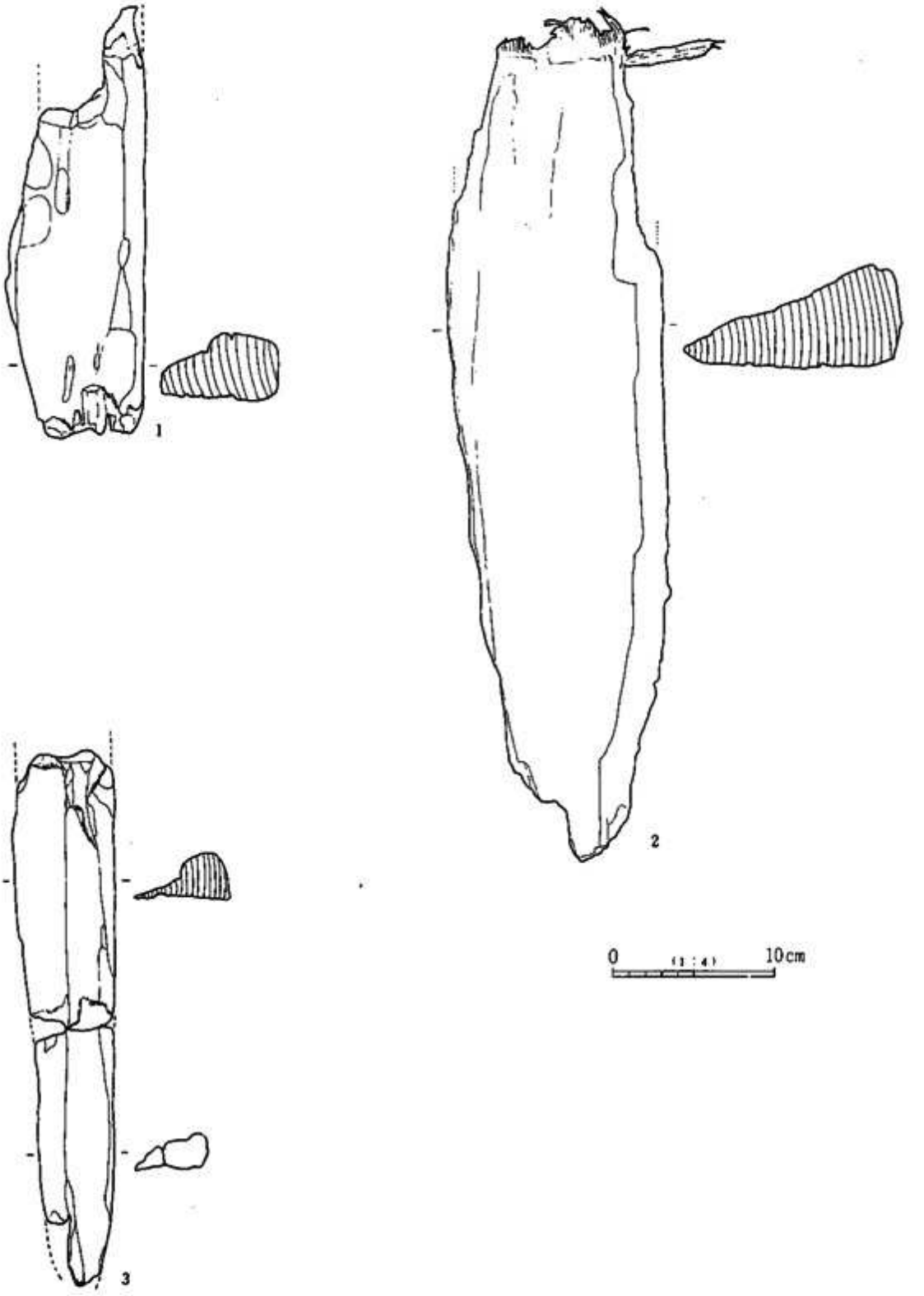
第8図　HED　杭列1出土木器（2）



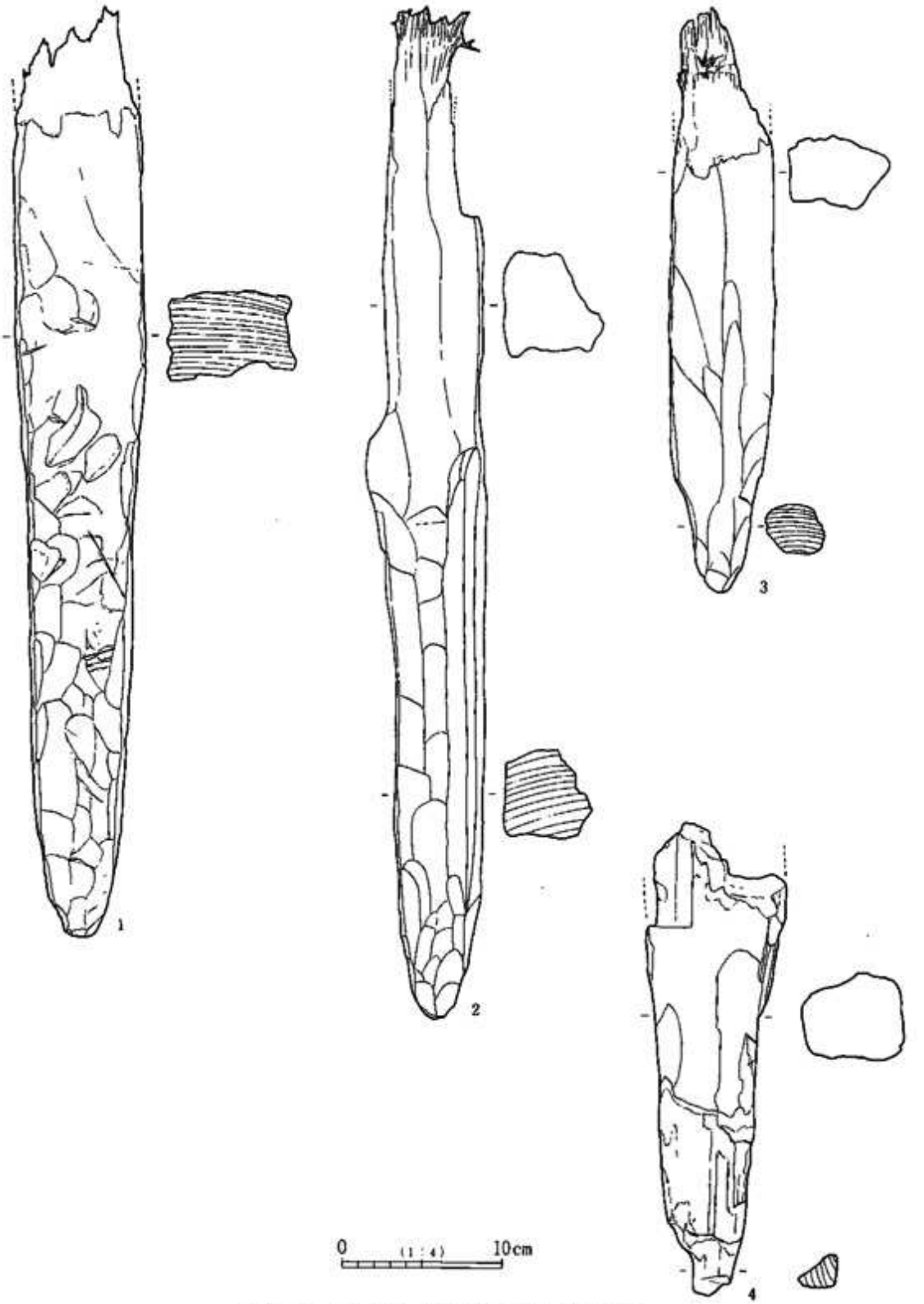
第9図　HED　杭列1出土木器（3）



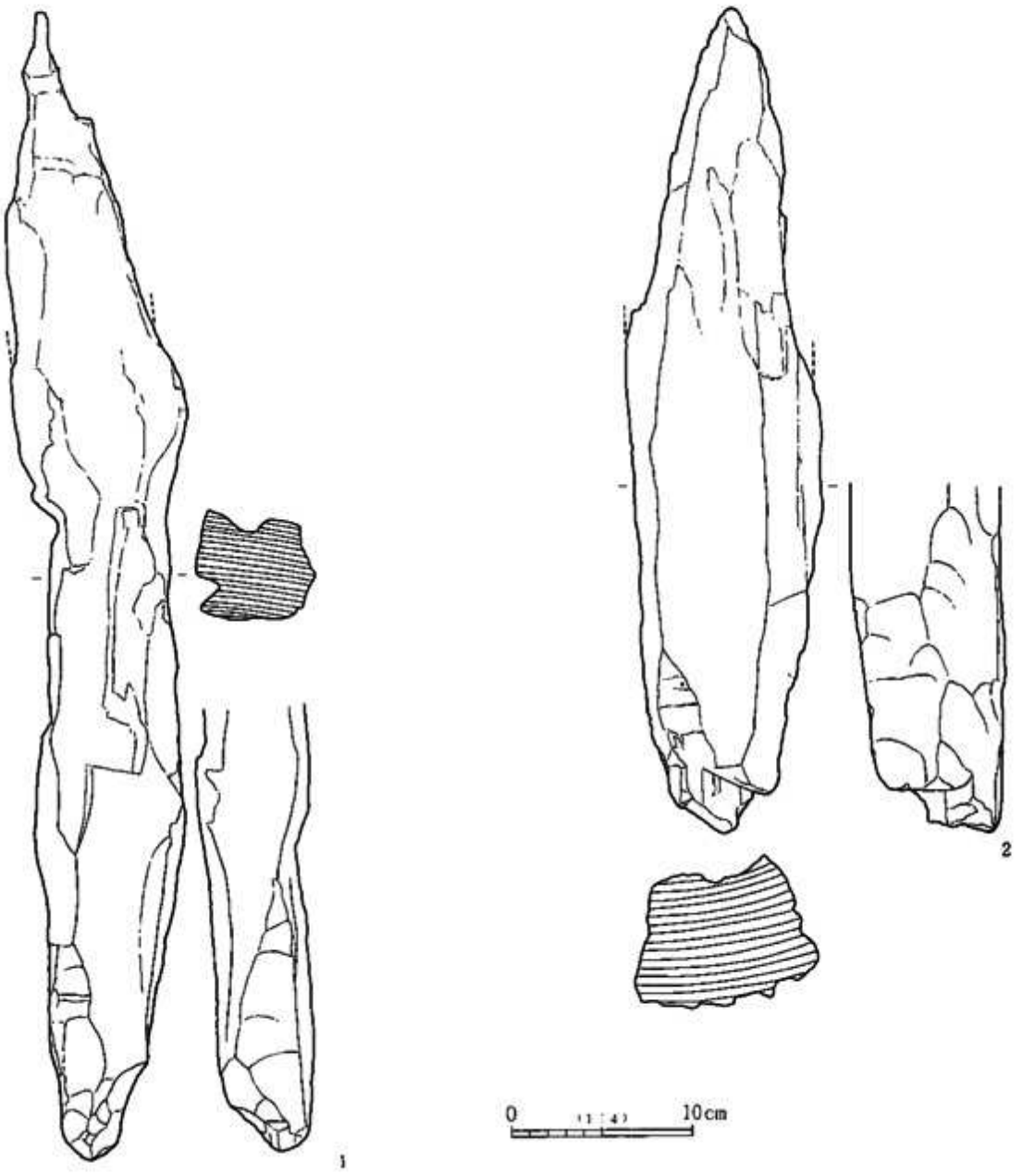
第10図　HED　杭列1出土木器（4）



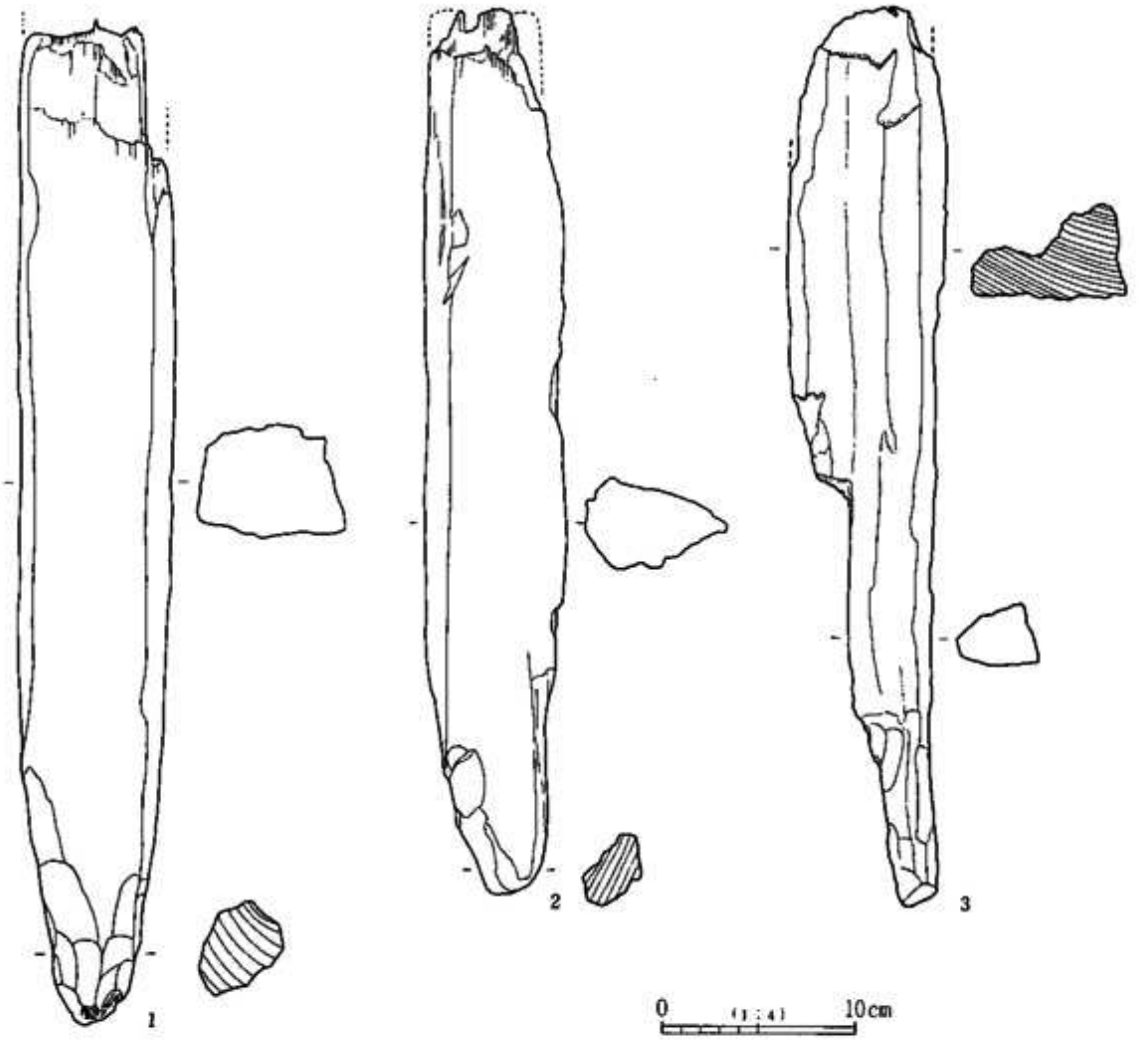
第11図　ＨＥＤ　杭列１出土木器（５）



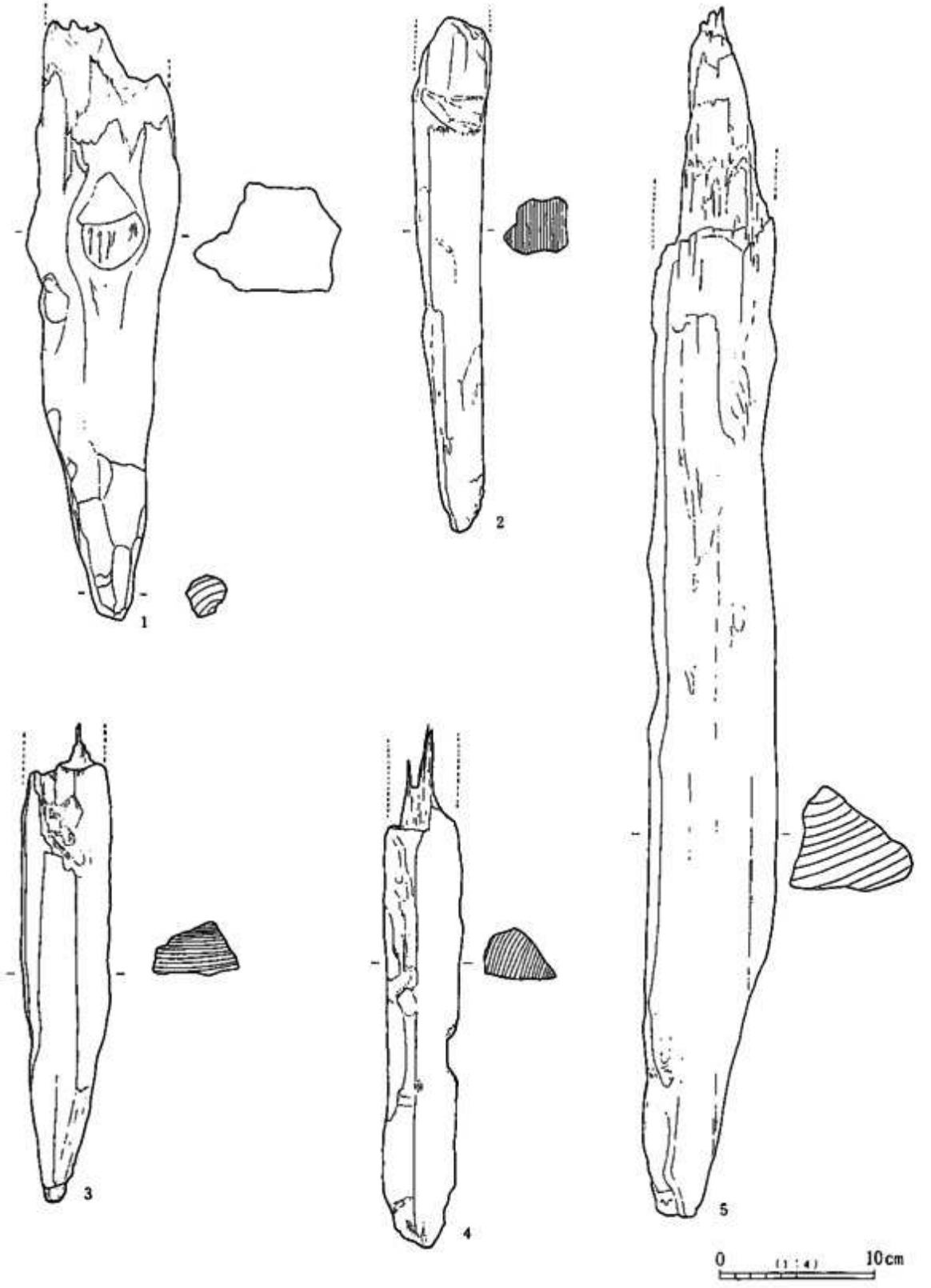
第12図　ＨＥＤ　杭列１出土木器（６）



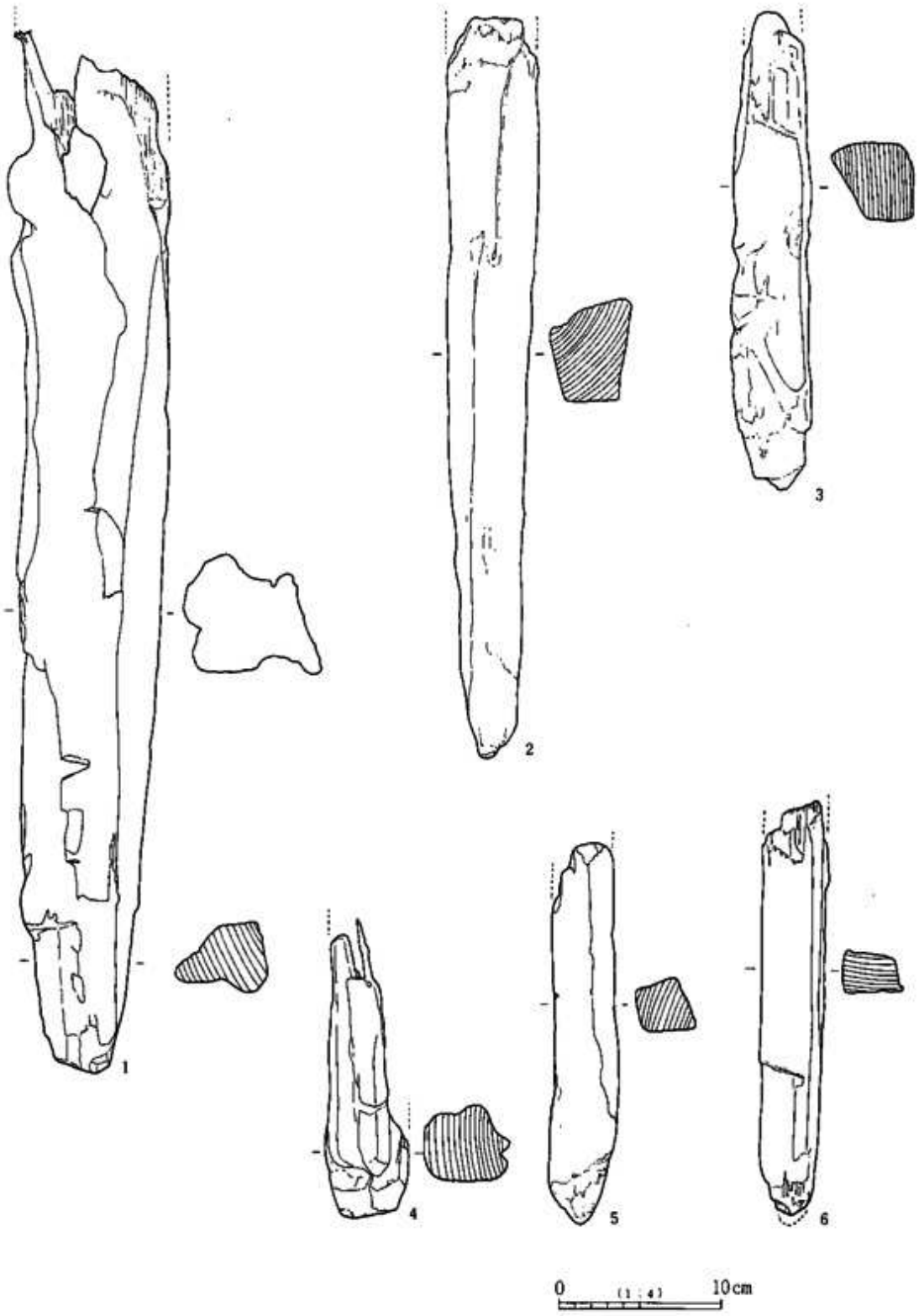
第13図　ＨＥＤ　杭列１出土木器（７）



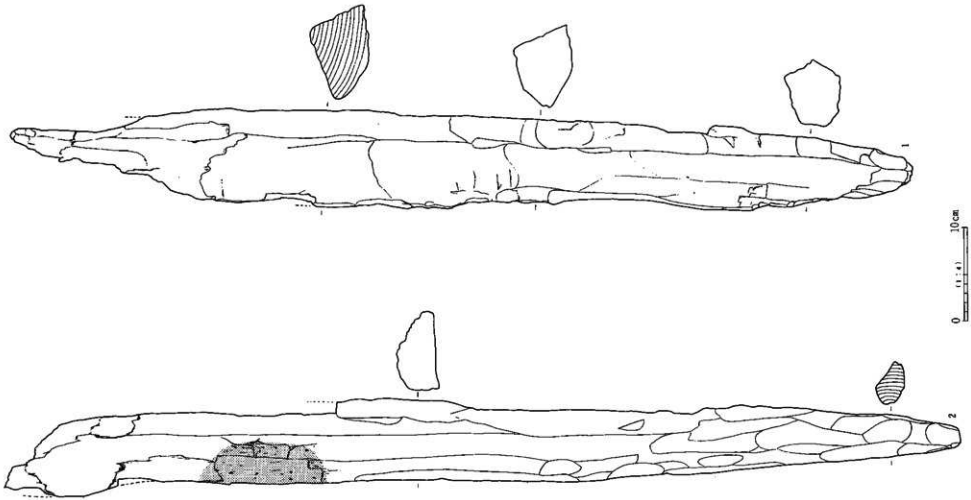
第14図　ＨＥＤ　杭列１出土木器（８）



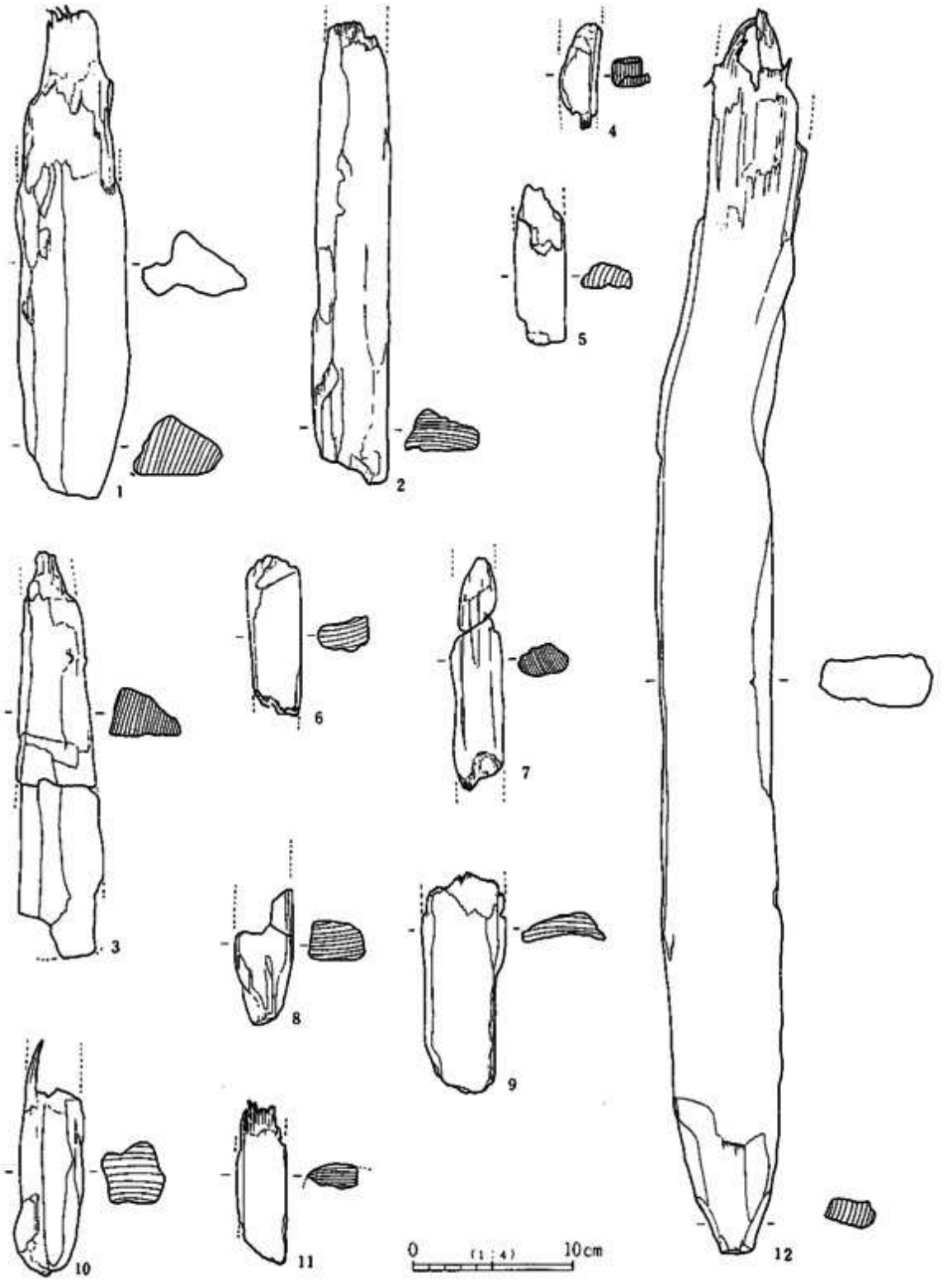
第15図　ＨＥＤ　杭列１出土木器（９）



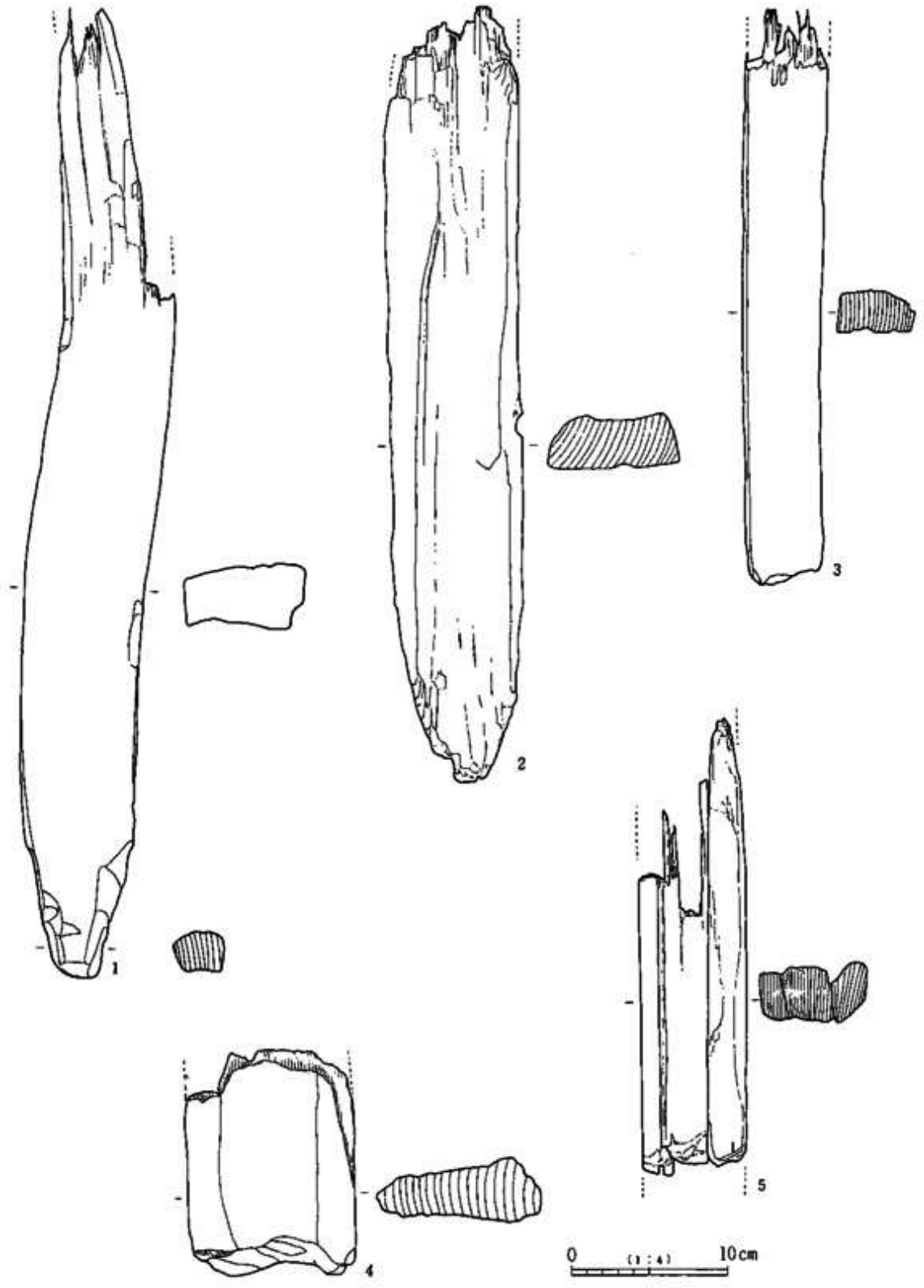
第16図　ＨＥＤ　杭列１出土木器（10）



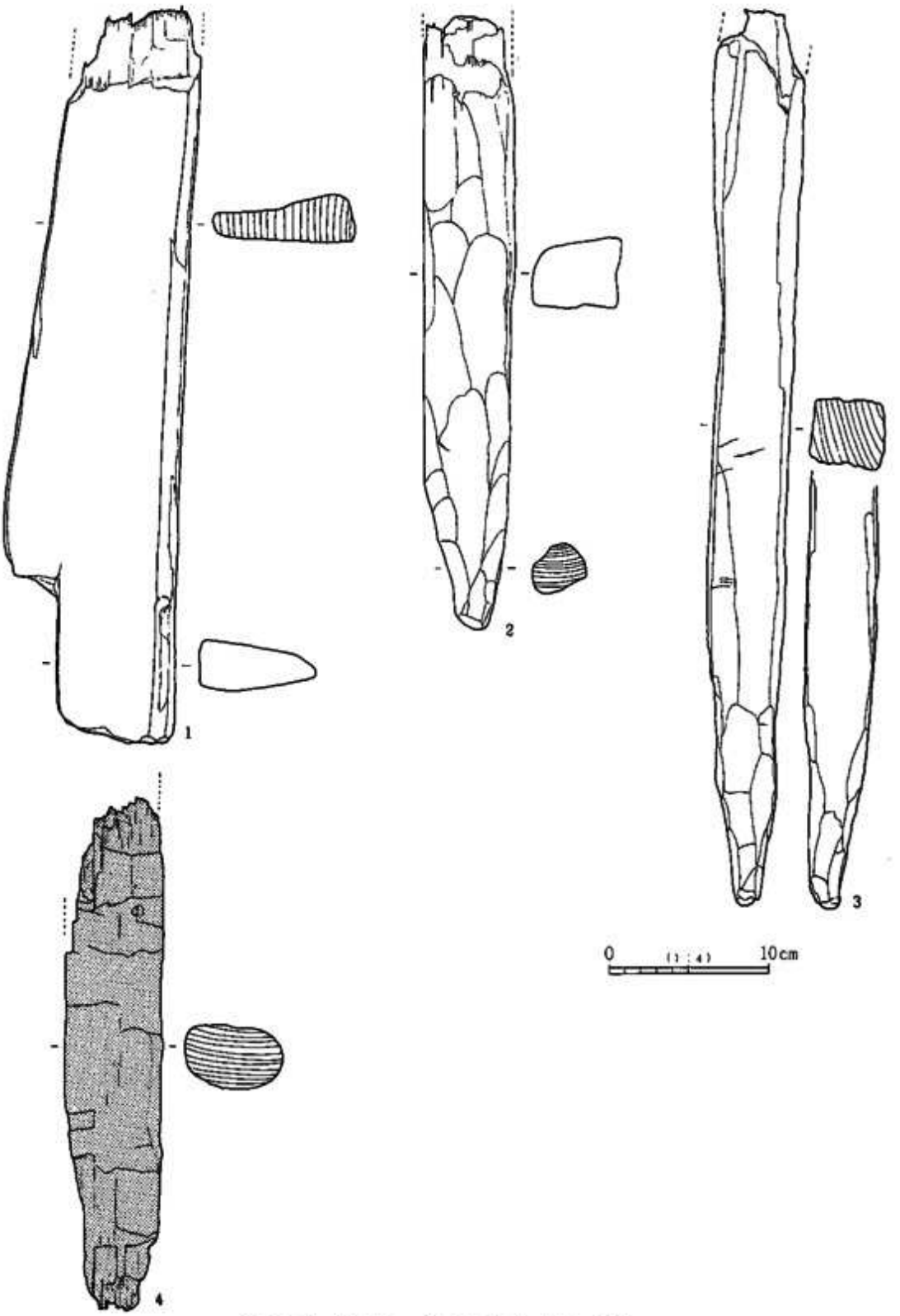
第17図　ＨＥＤ　杭列１・２出土木器



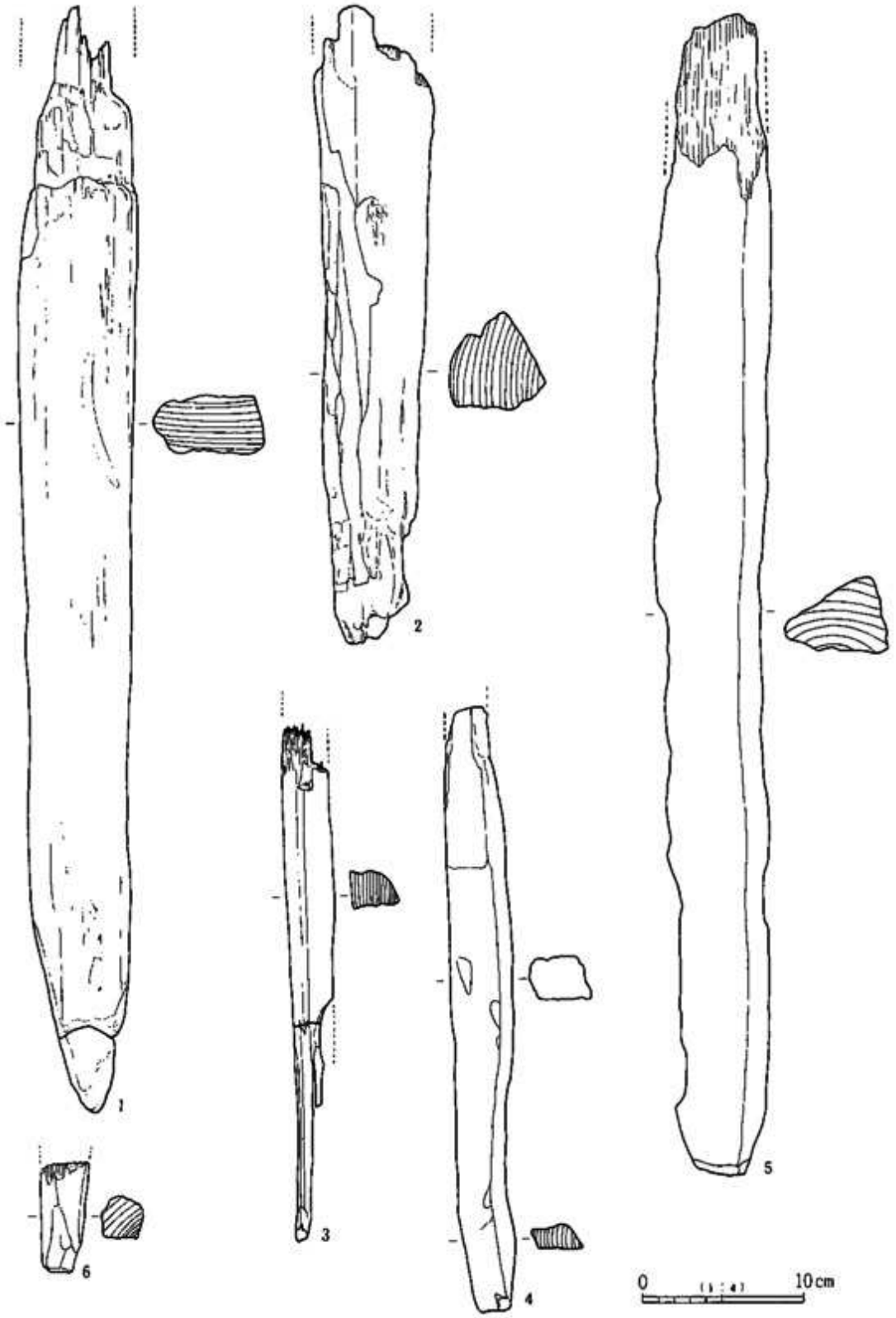
第18図　HED　杭列1（1～11）・杭列2（12）出土木器



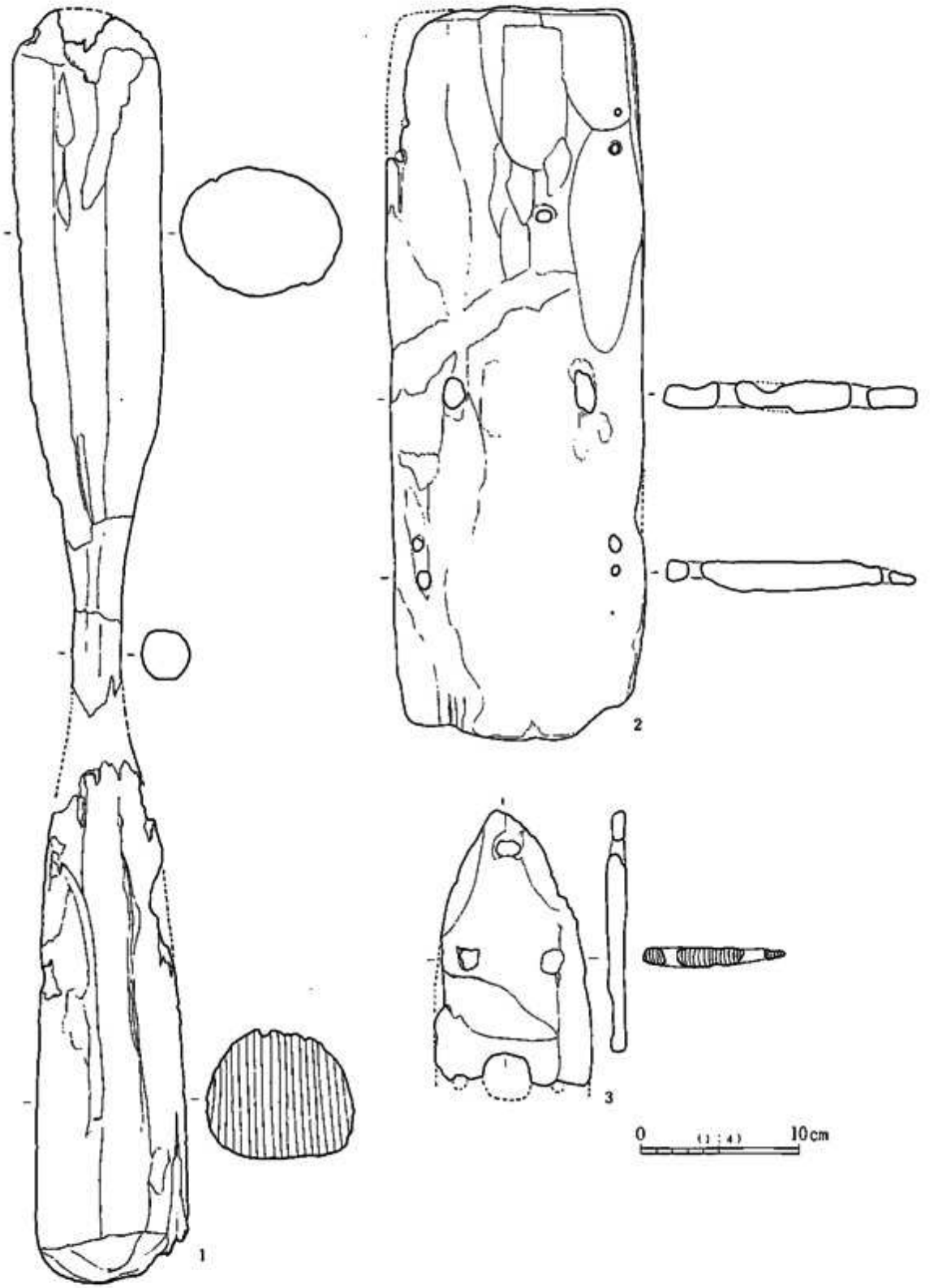
第19図　HED　杭列2出土木器（1）



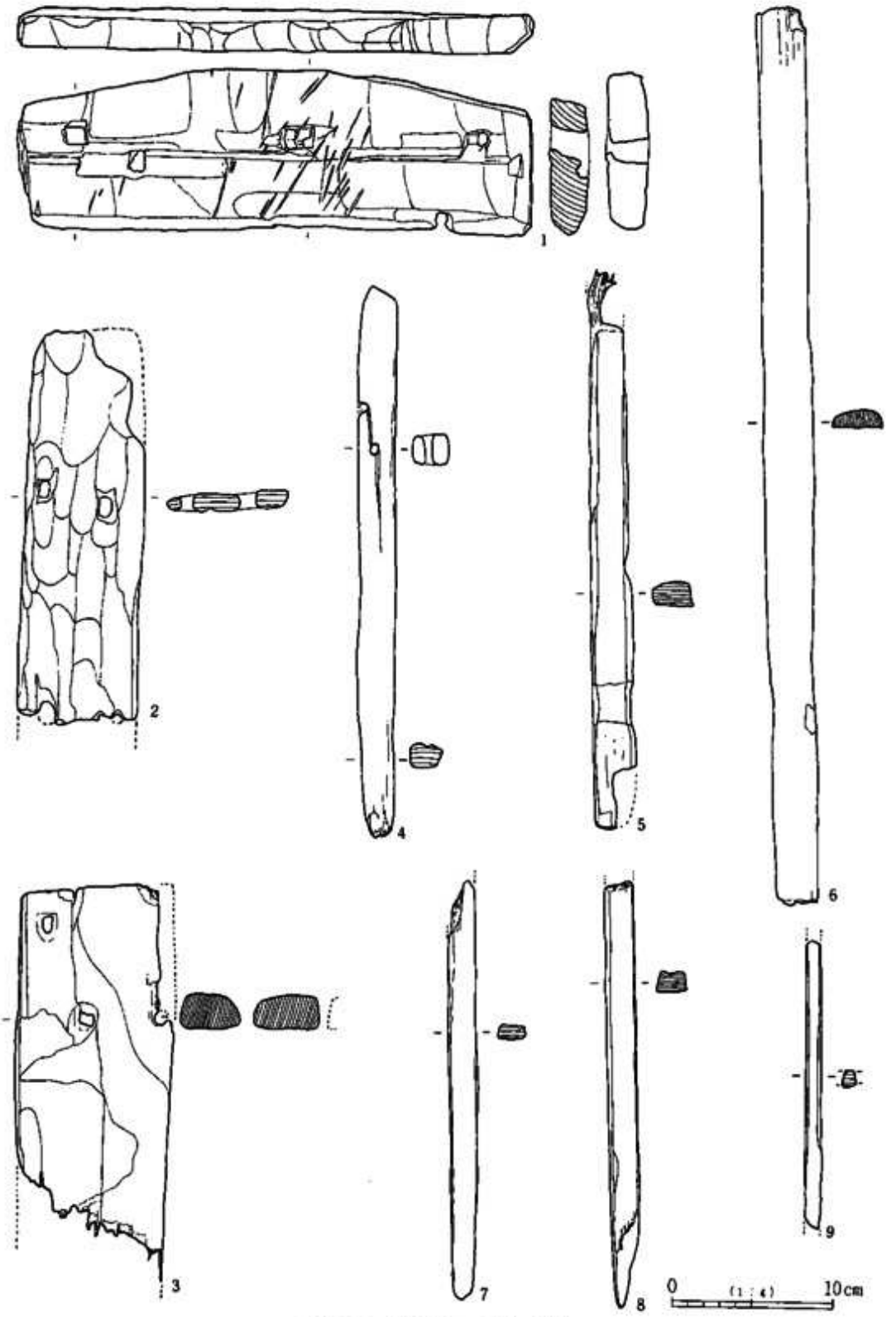
第20図　ＨＥＤ　杭列２出土木器（２）



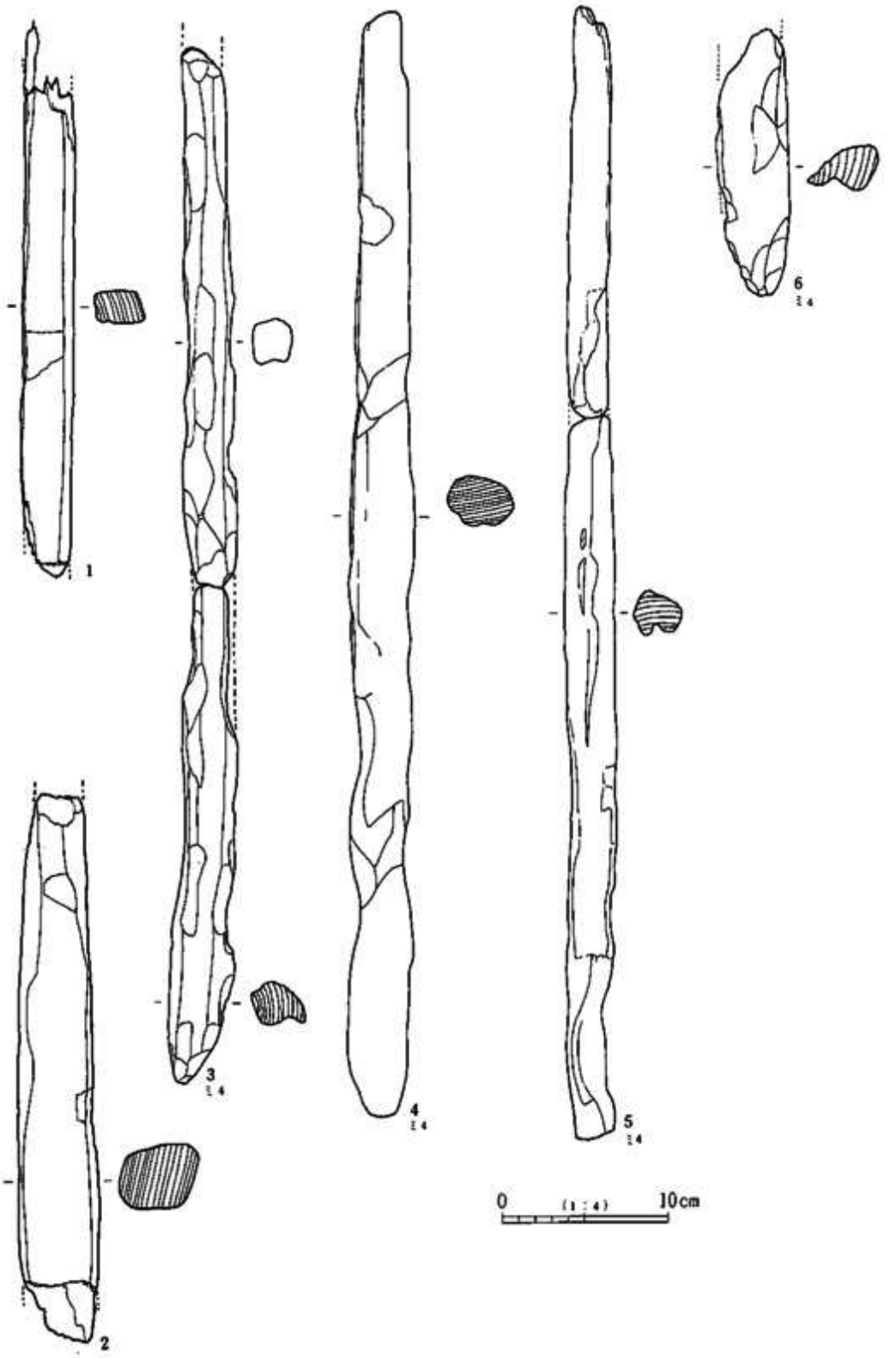
第21図　ＨＥＤ　杭列２出土木器（３）



第22図　HED　出土木器



第23図　HED　出土木器



第24図　HED　出土木器

調査前の南条中部工区　南から（右の森は田中八幡社）

調査前の南条中部工区　北から

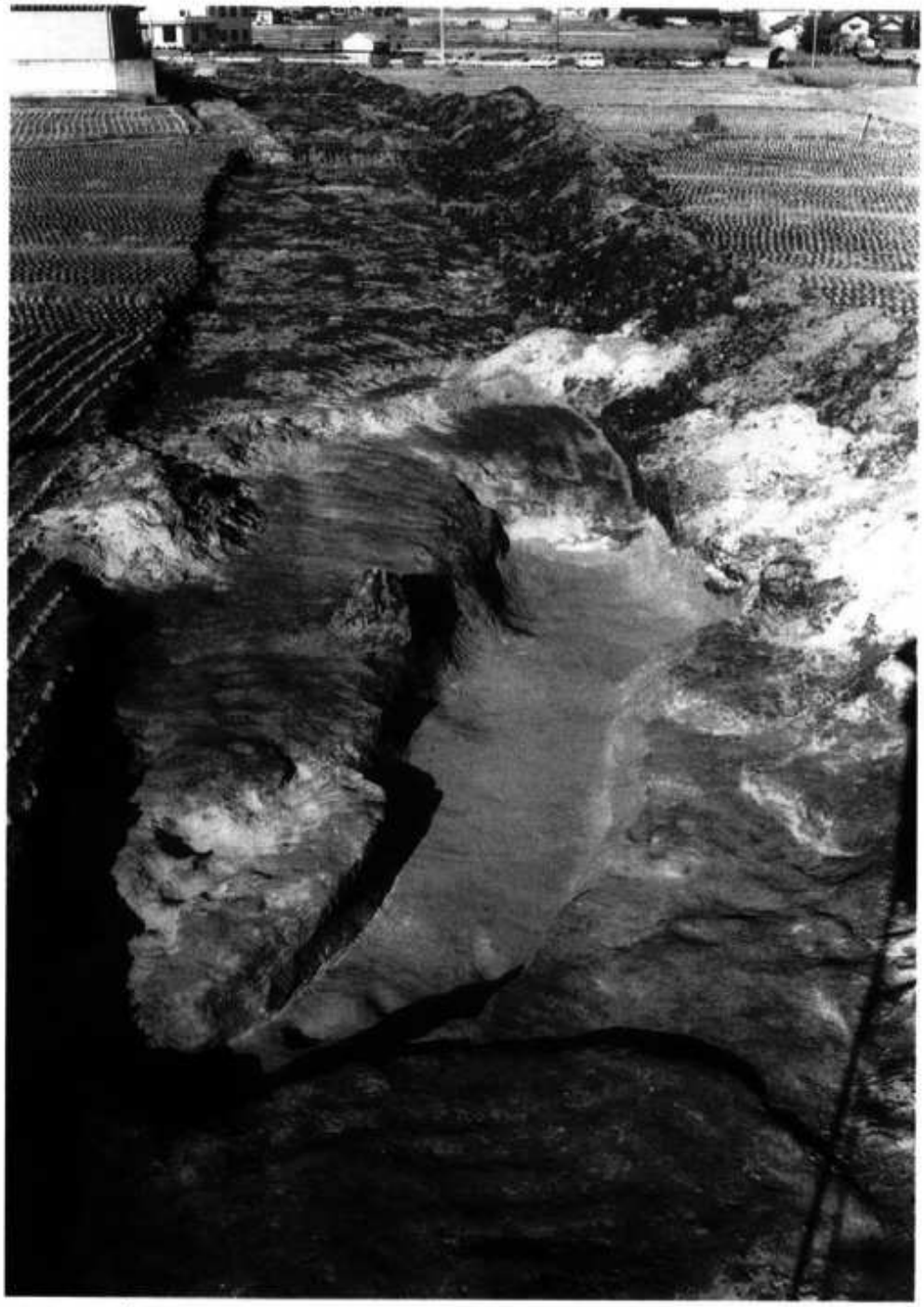
図版２

ＩＣＤ　調査区２・３

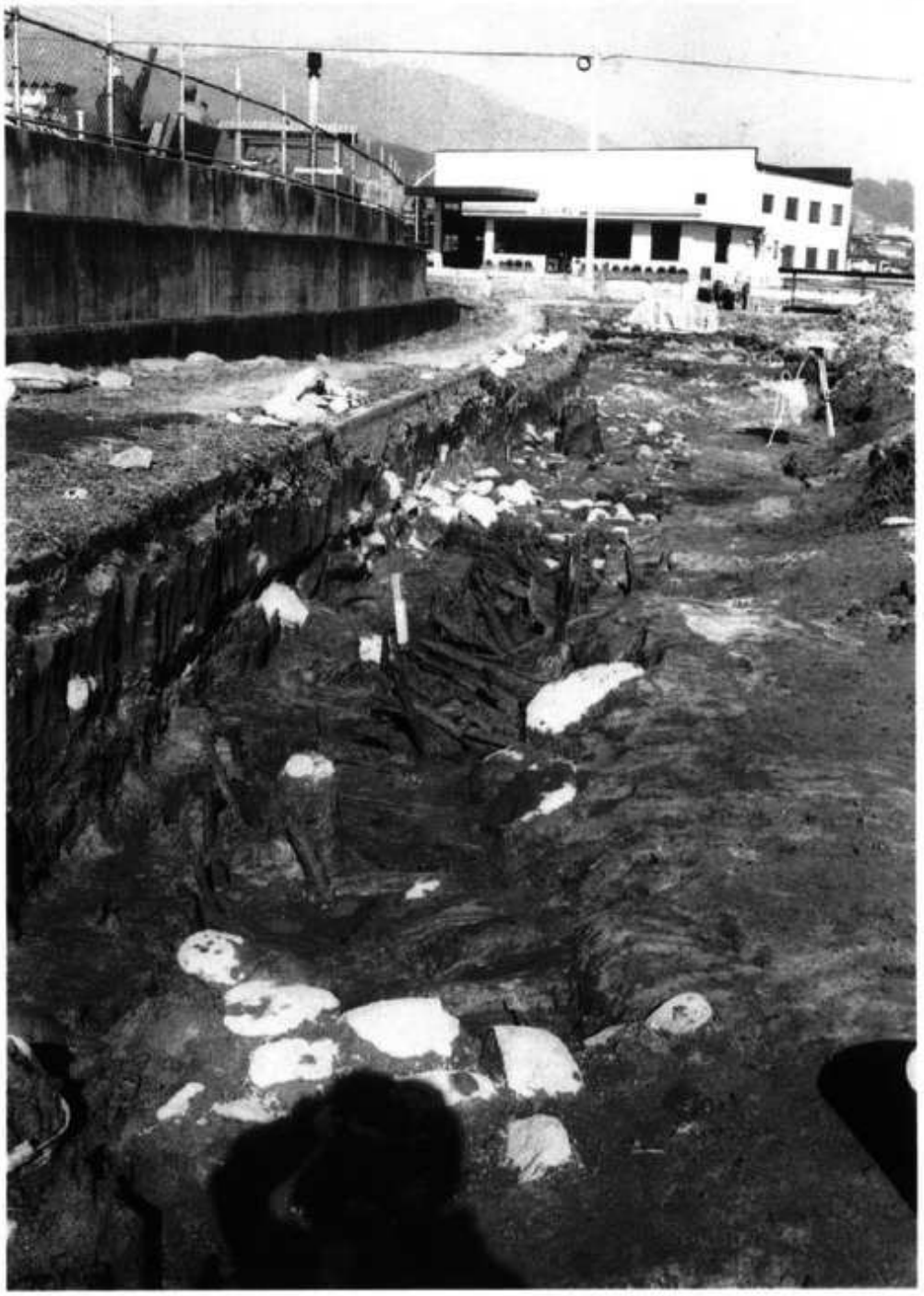
ＩＣＤ　調査区３

ＩＣＤ　溝址１と土壙

図版4



ＩＣＤ　溝址２



ＩＣＤ　水路杭の出土状況（南から）

図版6

ＩＣＤ　水路杭の出土状況（北から）

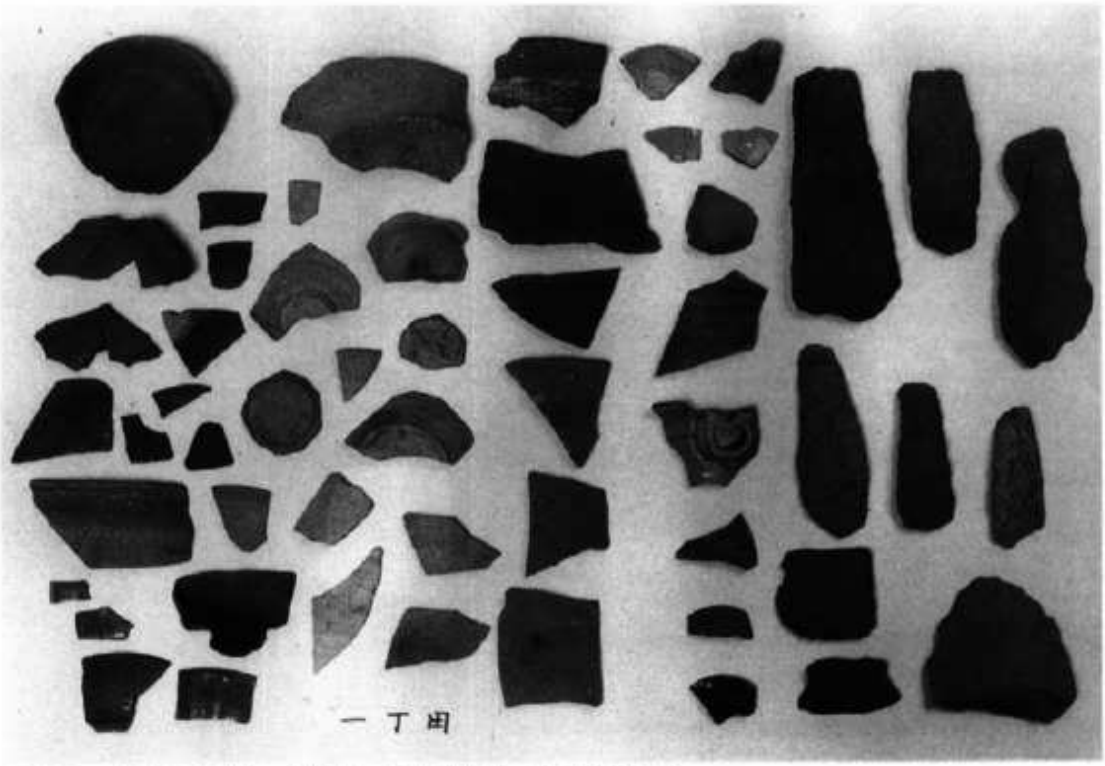
ＩＣＤ　水路杭の出土状況　南側上層

ＩＣＤ　水路杭の出土状況　北側上層

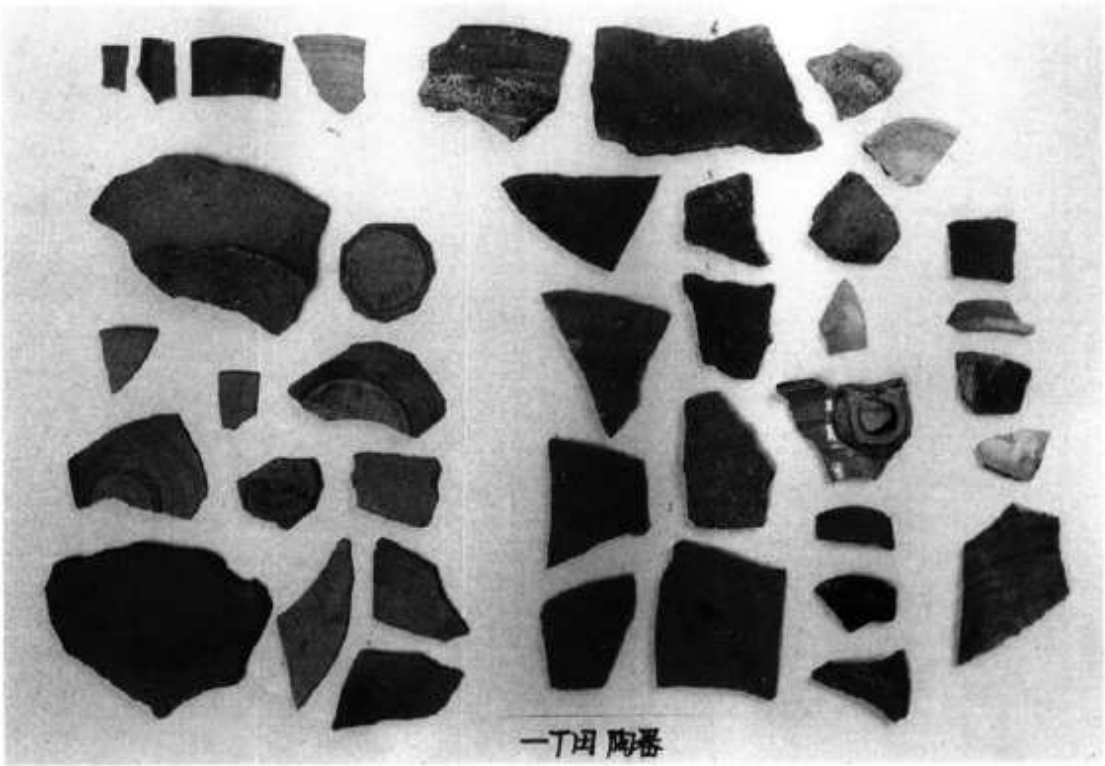
図版8

ＩＣＤ　水路杭出土状況　合流点付近下層

ＩＣＤ　水路杭出土状況　合流点下層

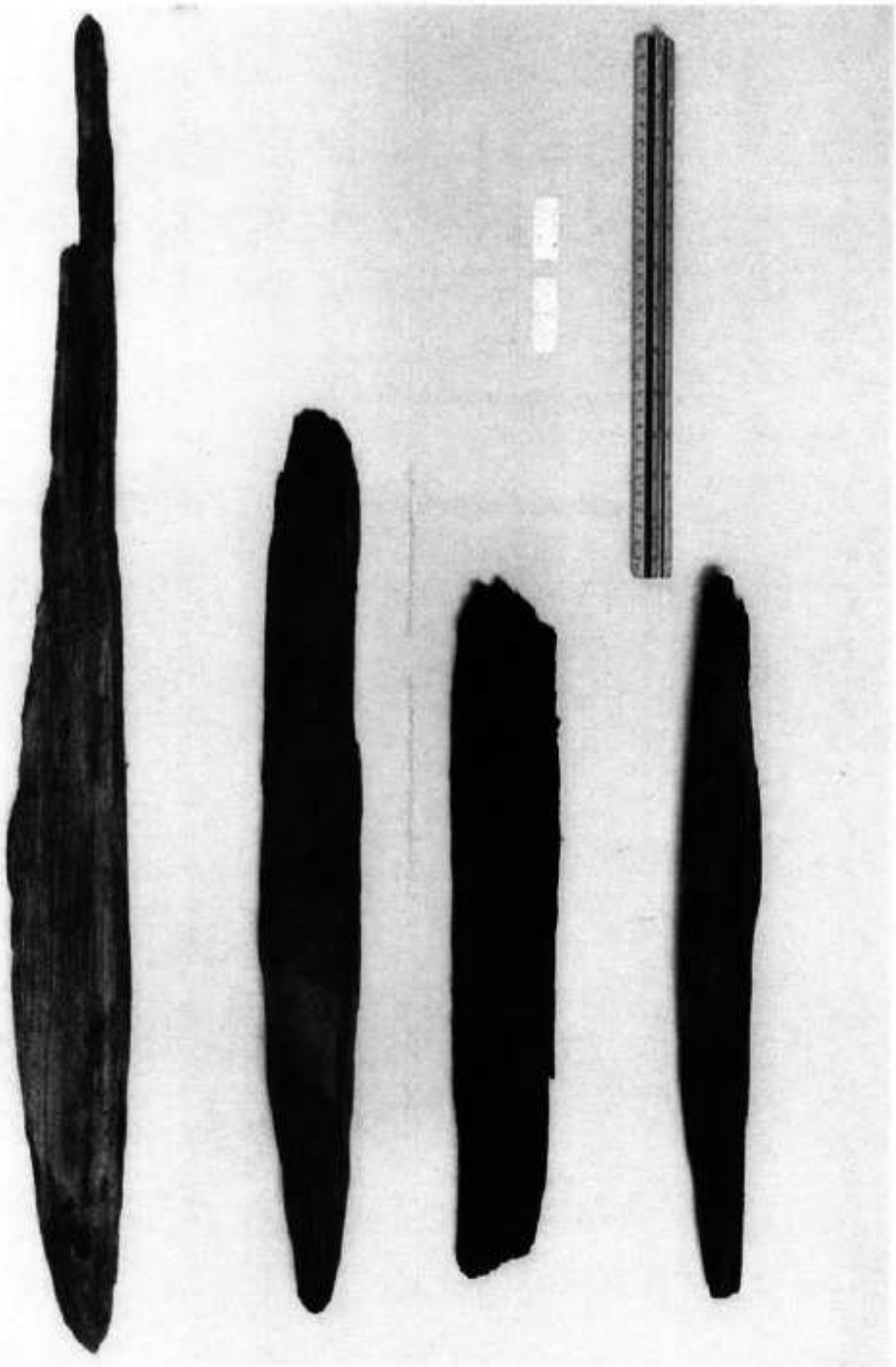


ＩＣＤ　出土須恵器・土師器・石器(撮影　唐木孝治氏)



ＩＣＤ　出土陶器（撮影　唐木孝治氏）

図版10



ＩＣＤ　水路出土杭の一部（撮影　唐木孝治氏）

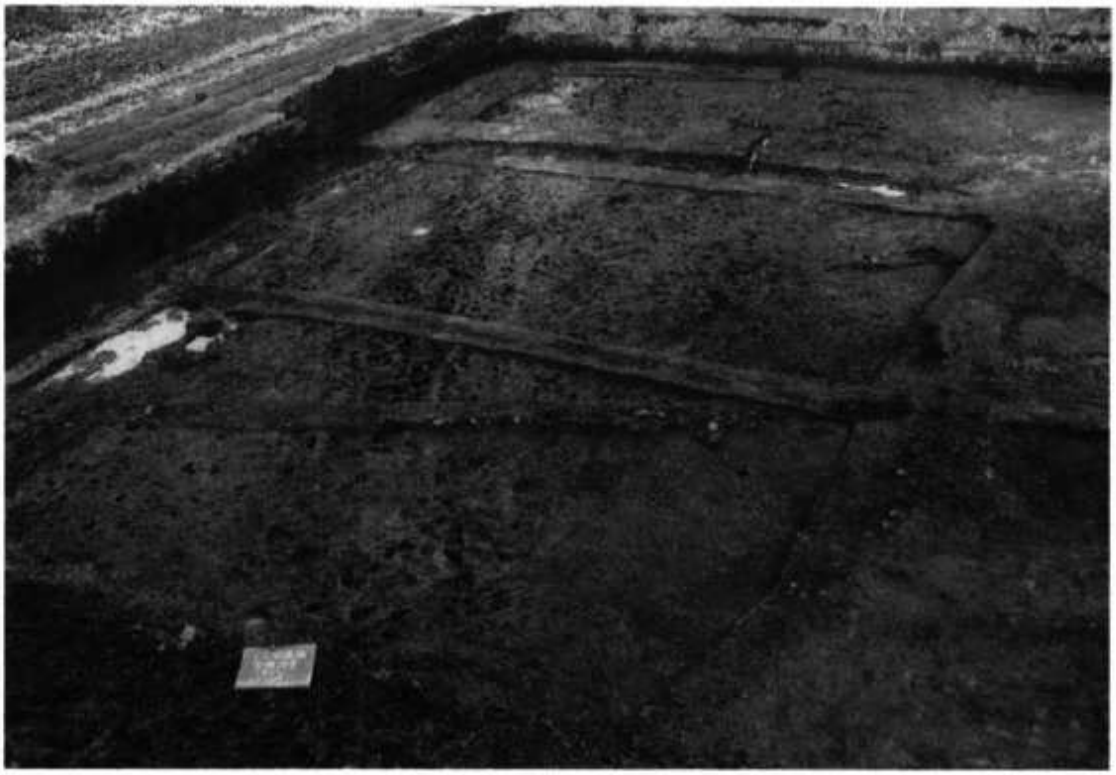
ヒエ田遺跡遠景（北西より望む）

ヒエ田遺跡遠景（西より望む）

図版12

ヒエ田遺跡近景（南西から）

ヒエ田遺跡近景（北から）



HED　A区11層上面全景

HED　A区11層上面南側全景

図版14

HED　A区11層上面南側全景

HED　A区11層上面北側全景

HED　A区11層上面畦畔（南から）

HED　A区11層上面畦畔（北から）

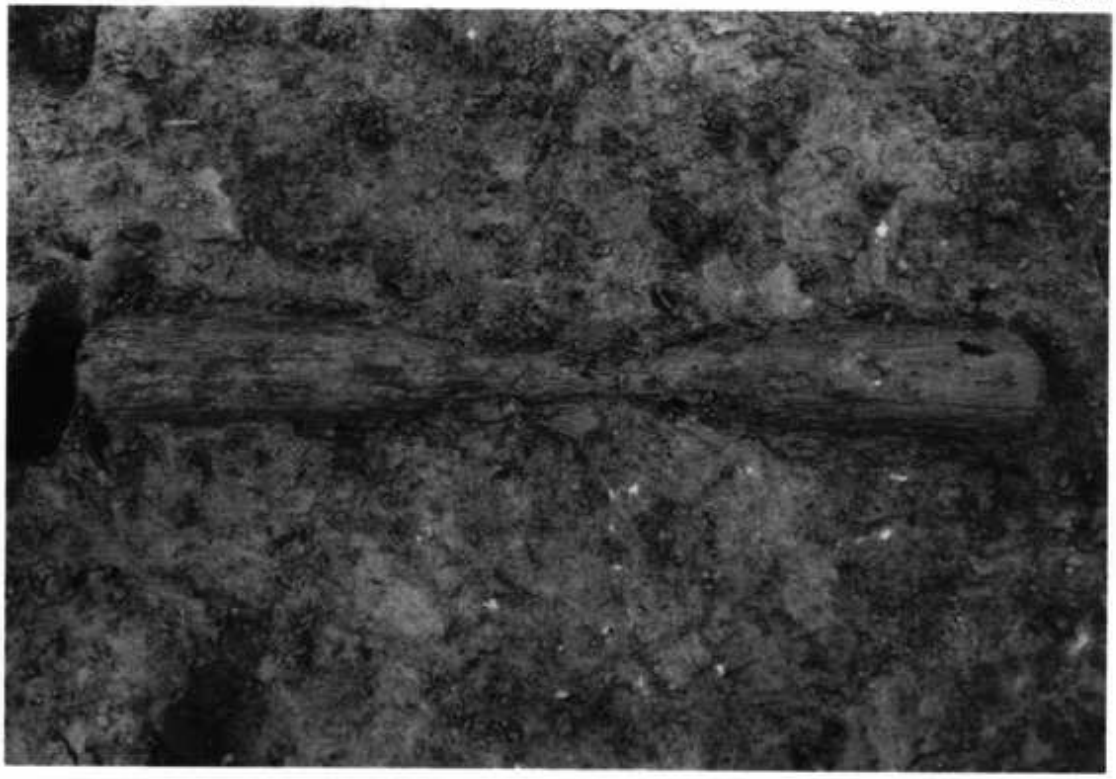
HED　A区11層上面

図版16

HED　A区11層上面畦畔部分

HED　A区11層上面畦畔部分

HED　A区11層上面畦畔足跡？



HED　A区11層上面竪杵出土状態

HED　A区11層上面棒状木器出土状態

図版18

HED　溝址1（北から）

HED　溝址1（南から）

HED　A区西側全景

HED　溝址3（北から）

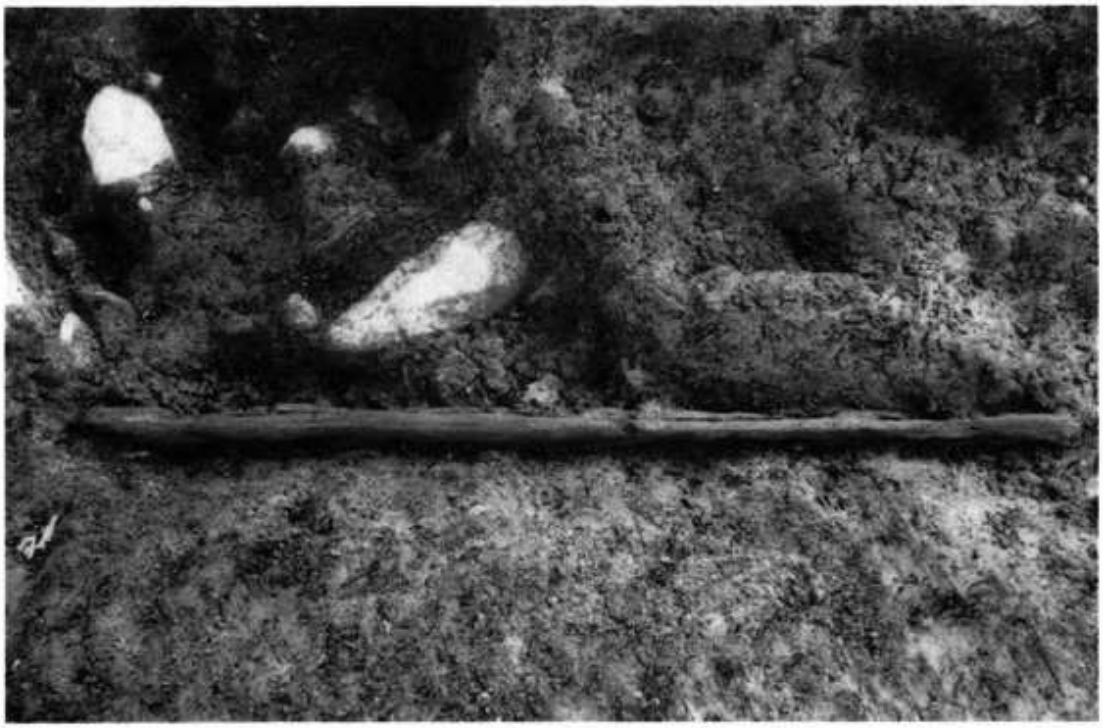
HED　溝址3（南から）

HED　溝址4（東から）

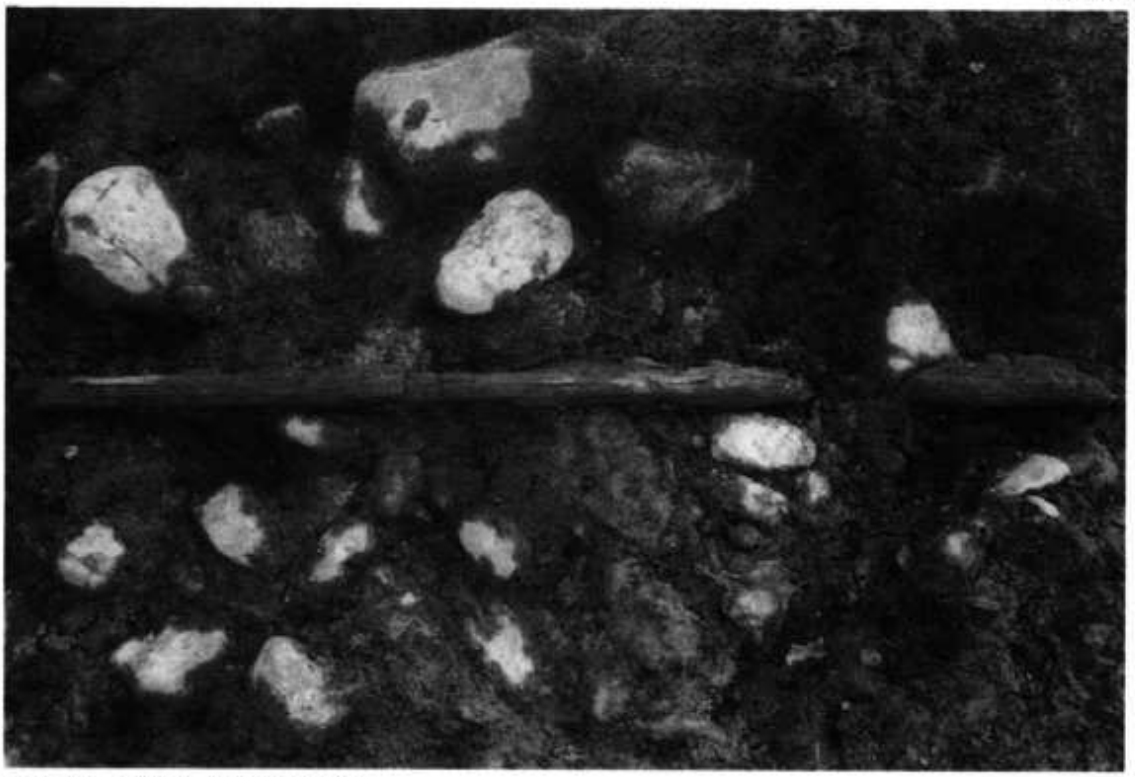
HED　溝址4（西から）

図版20

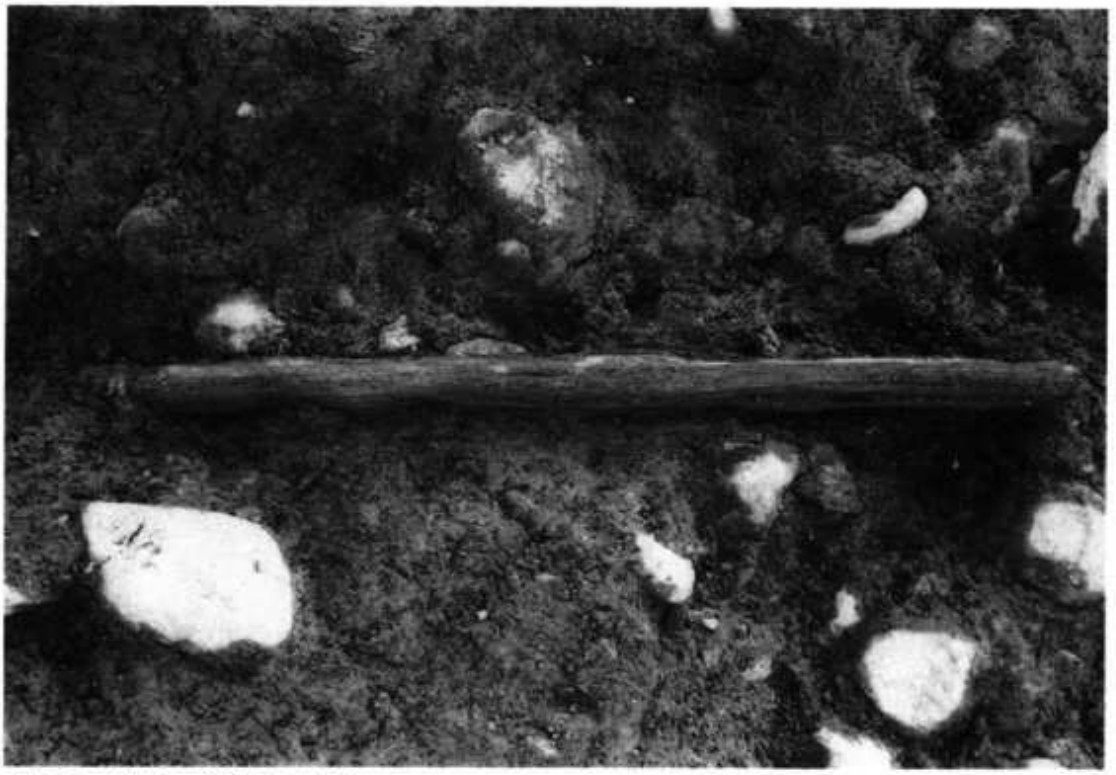
HED　溝址4
木器出土状態



HED　溝址4木器出土状態



HED　溝址４木器出土状態



HED　溝址４木器出土状態

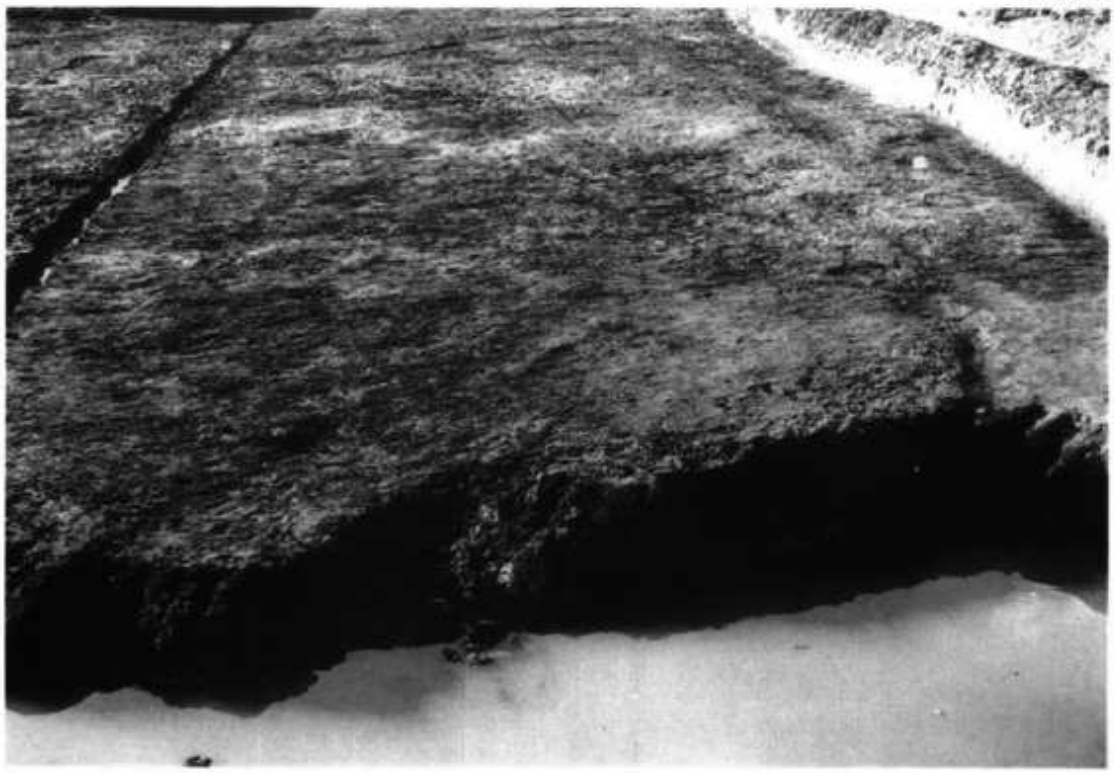
図版22

HED　溝址5（北から）

HED　溝址5（南から）

HED　B区田下駄出土状態

HED　B区有孔板出土状態



HED　B区北側全景（東から）

HED　B区北側全景（西から）

図版24

HED　B区中央全景（東から）

HED　B区中央全景（西から）

HED　B区南側全景（東から）

HED　B区南側全景（西から）

図版26

HED　溝址２（北東から）

HED　溝址２（南西から）

HED　杭列1（北東から）

HED　杭列1（南西から）

図版28

HED　杭列2（北西から）

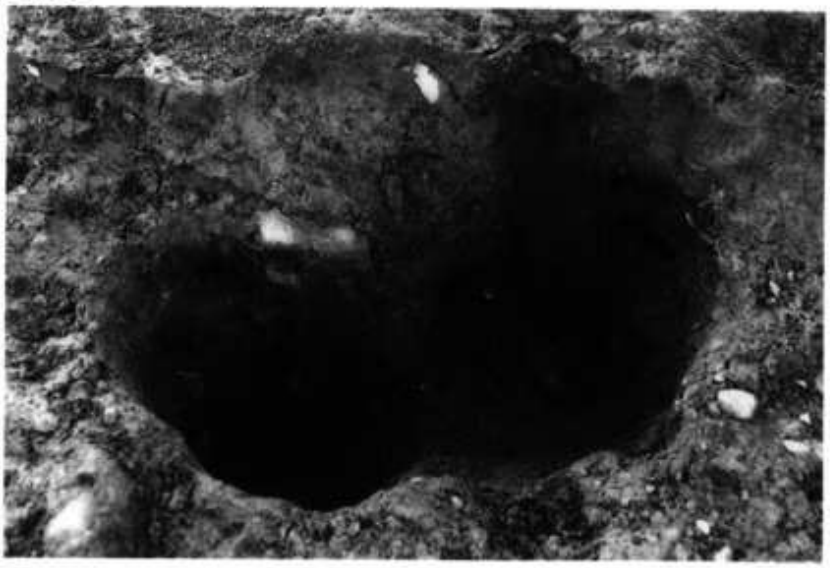
HED　杭列（南東から）

HED 杭列1たち割り

HED 杭列1たち割り

HED 杭列1たち割り

図版30



HED　杭列１たち割り

HED　杭列１たち割り

HED　杭列１たち割り

HED　C区西側
自然木など出土状態全景

HED　C区西側　自然木など出土状態部分

図版32

HED　C区西側　自然木など出土状態部分

HED　C区西側　自然木など出土状態部分

HED　AL69　有孔板出土状態

HED　AL68　有孔板出土状態

図版34

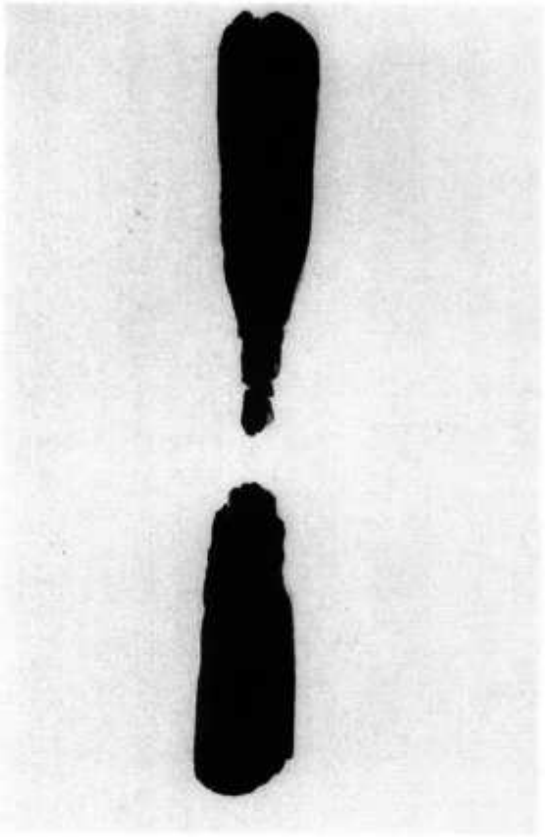
HED　C区南側
自然木など出土状態全景

HED　C区南側自然木など出土状態部分

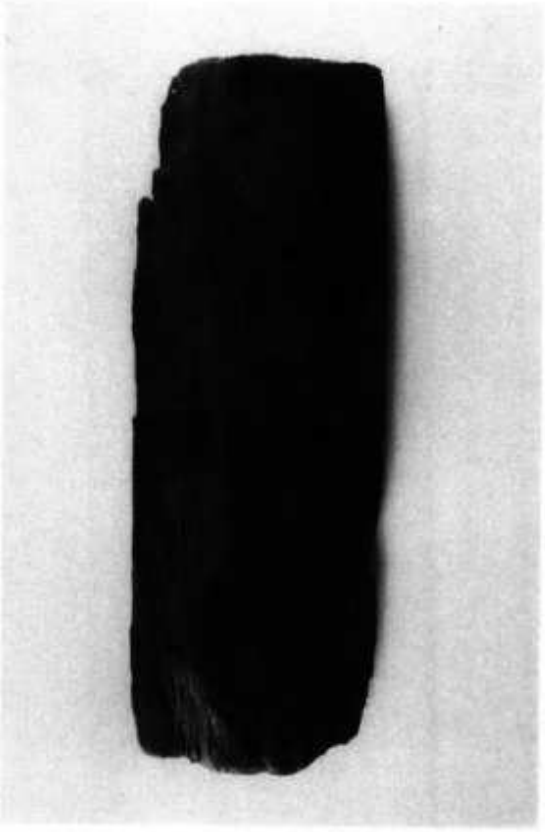
HED　C区全景（北東から）

HED　C区全景（南西から）

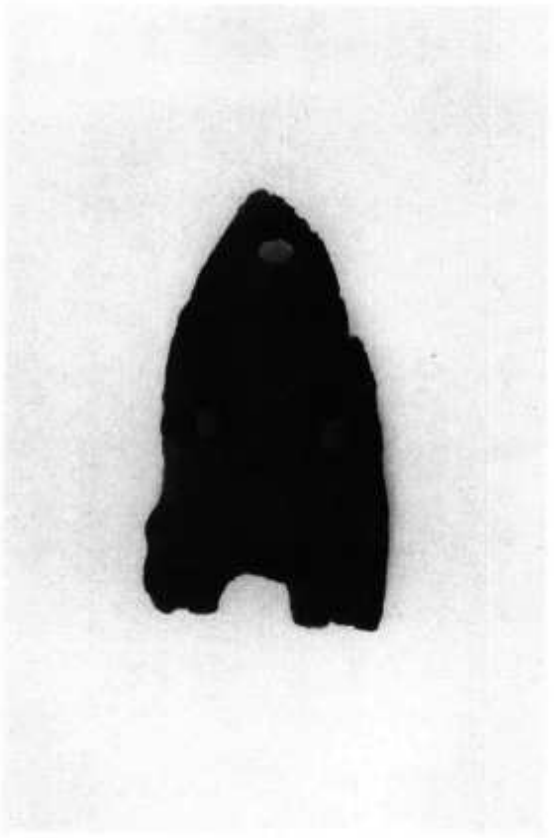
図版36



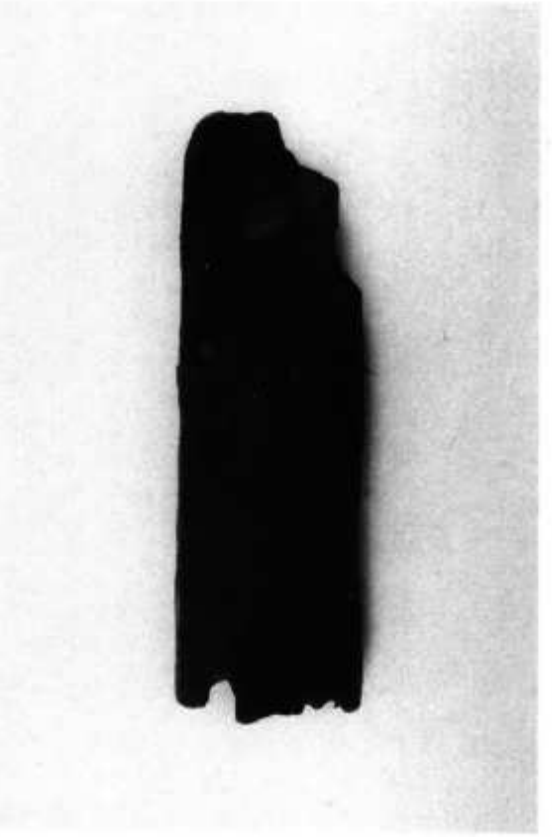
HED　AR43竪杵



HED　AU65田下駄

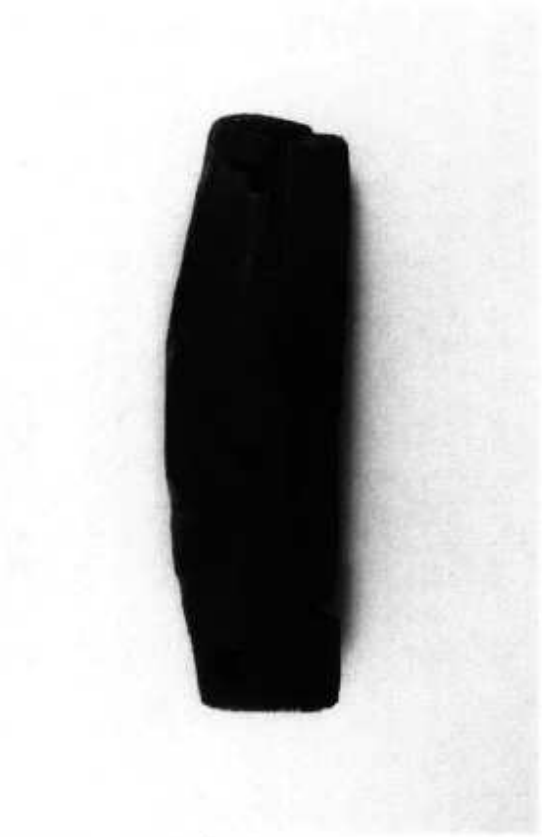


HED　AU47有孔板



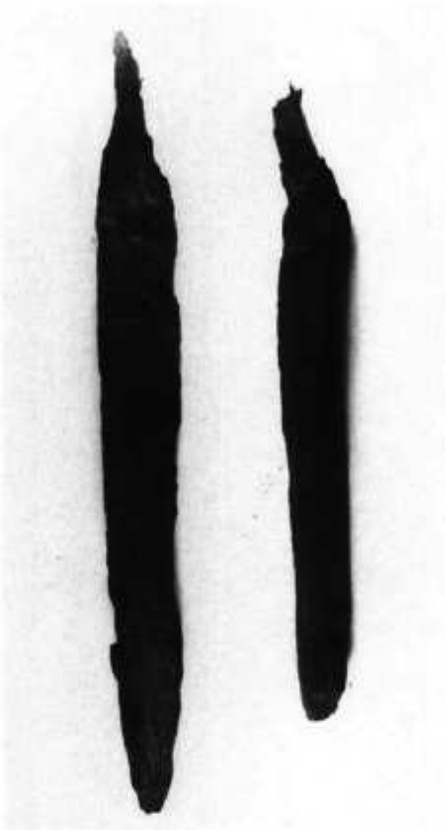
HED　AK55有孔板

図版38

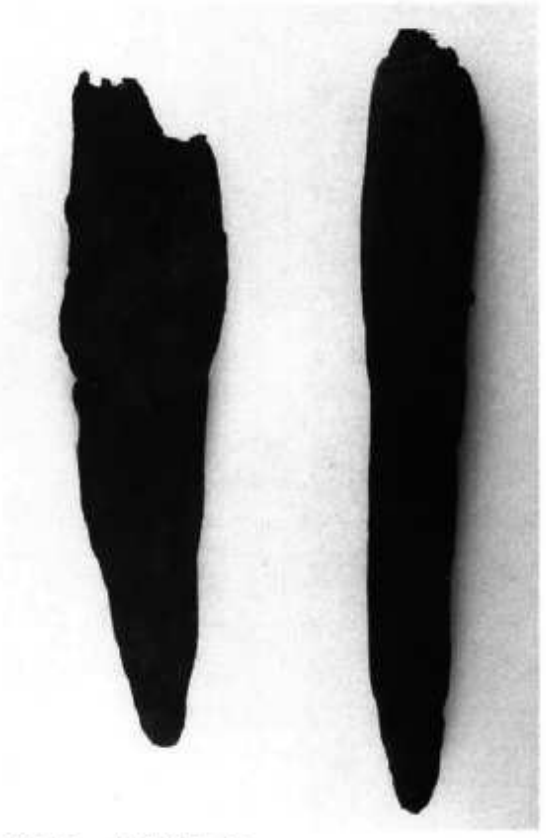


HED　AL69有孔板

HED　AL68有孔板

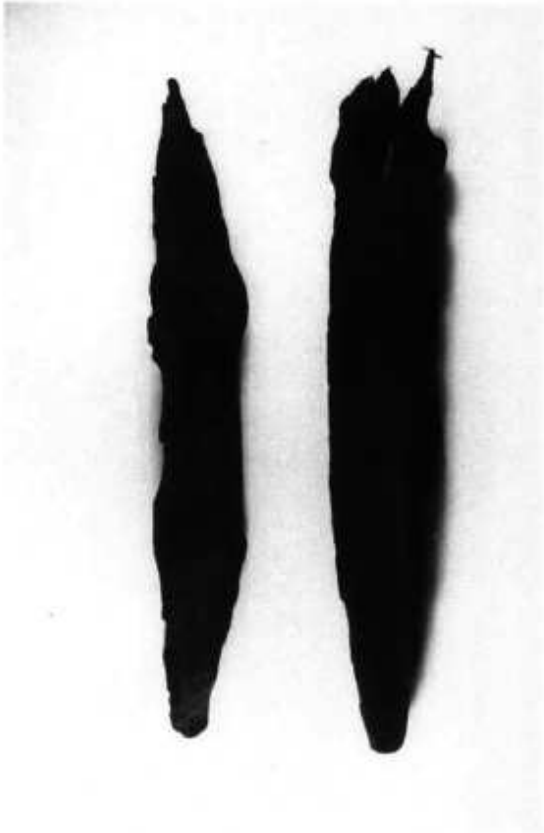


HED　杭列1木杭

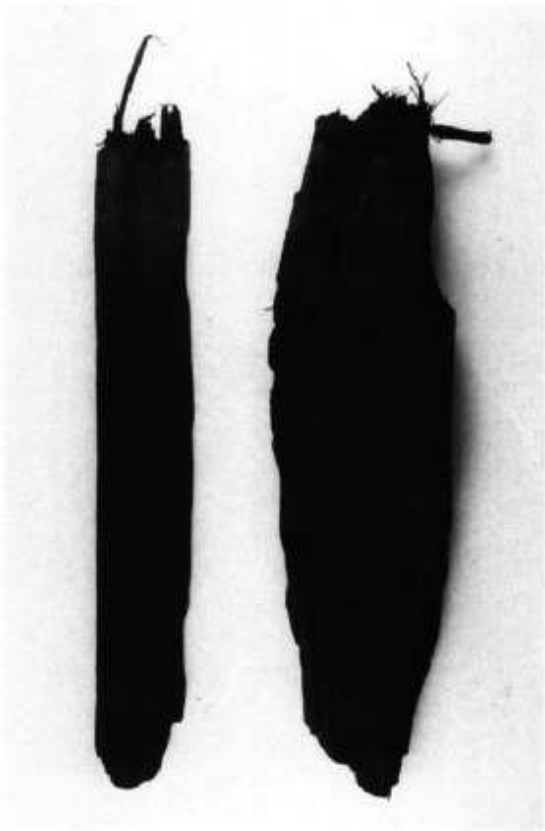


HED　杭列1木杭

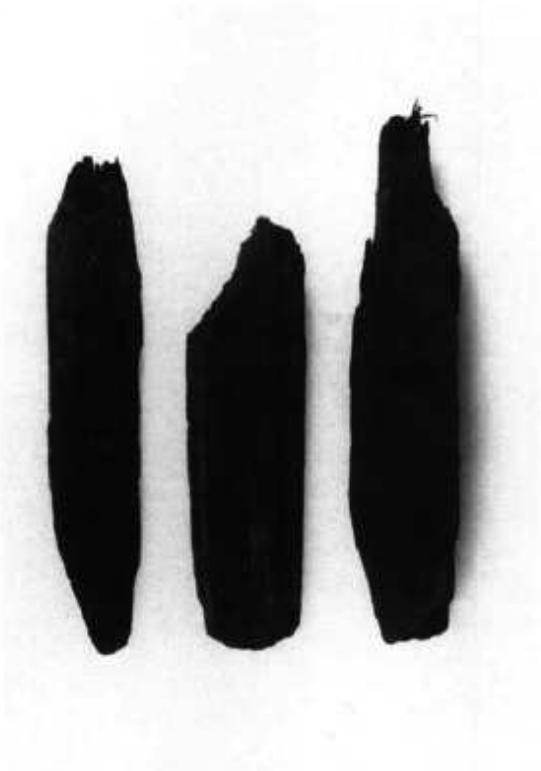
図版40



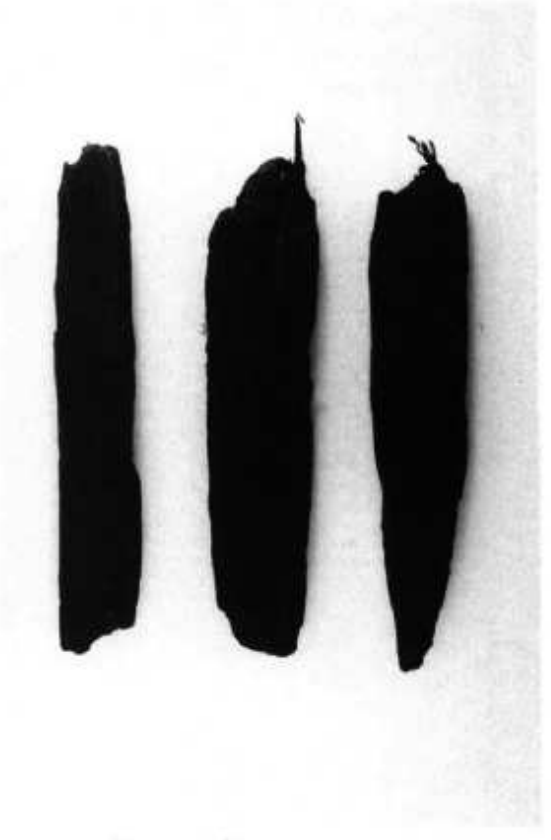
HED　杭列1木杭



HED　杭列1木杭

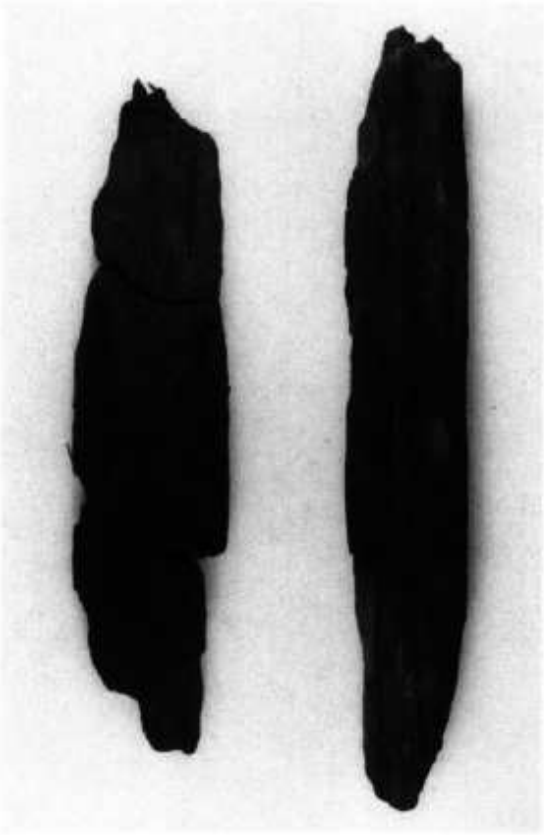


HED　杭列1木杭

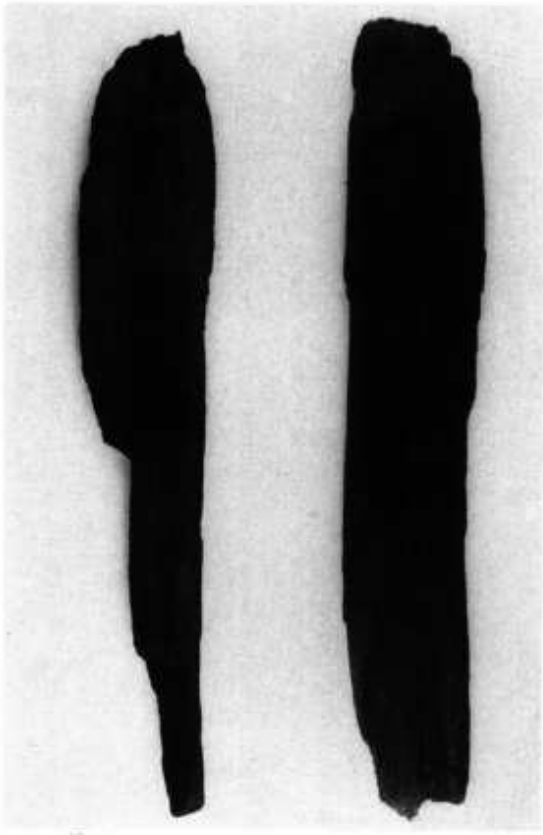


HED　杭列1木杭

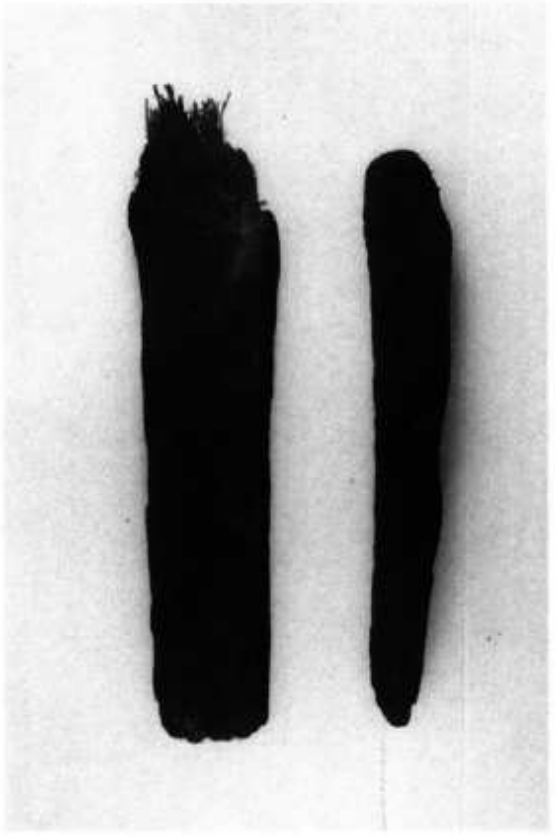
図版42



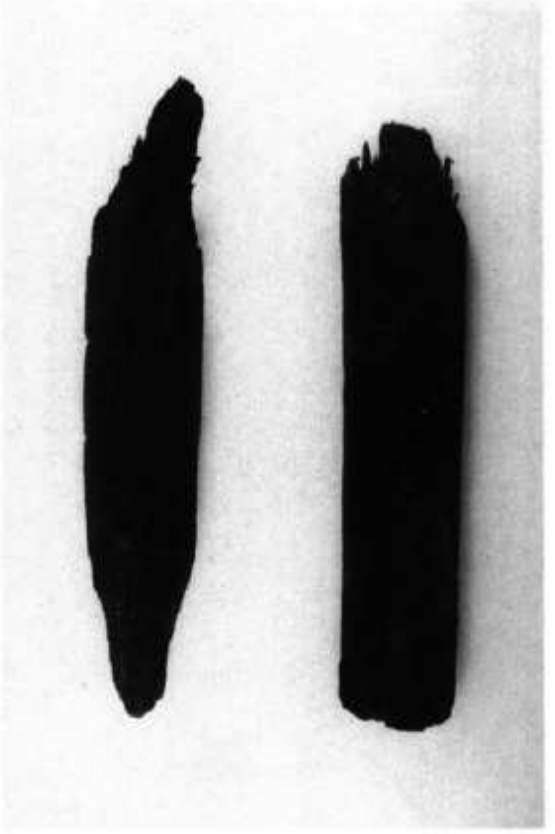
HED　杭列1木杭



HED　杭列1木杭

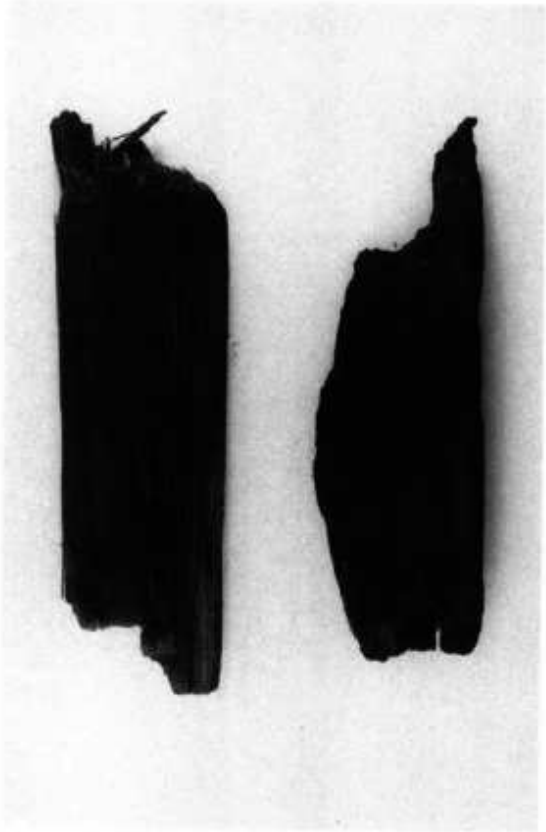


HED　杭列1木杭

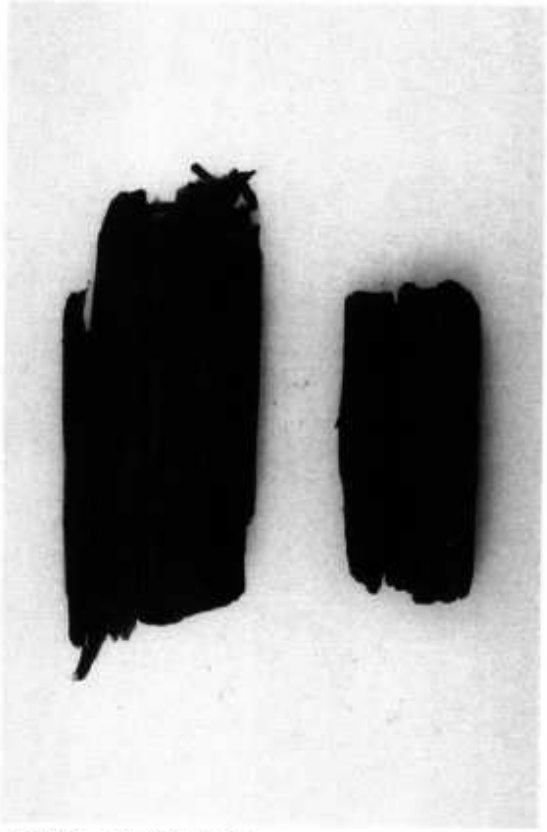


HED　杭列1木杭

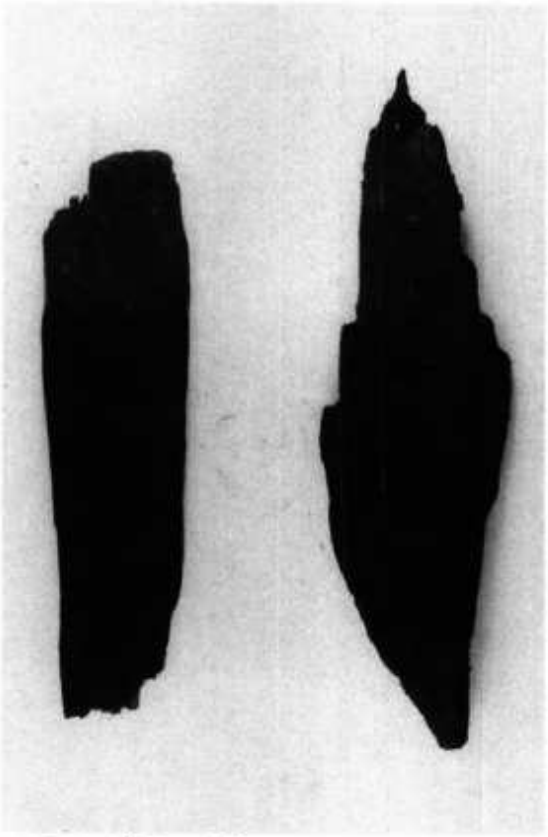
図版44



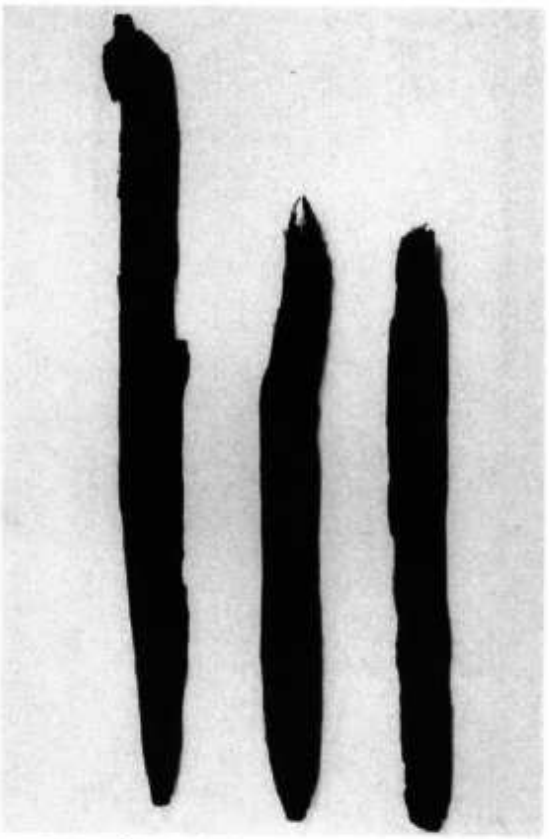
HED　杭列1木杭



HED　杭列1木杭

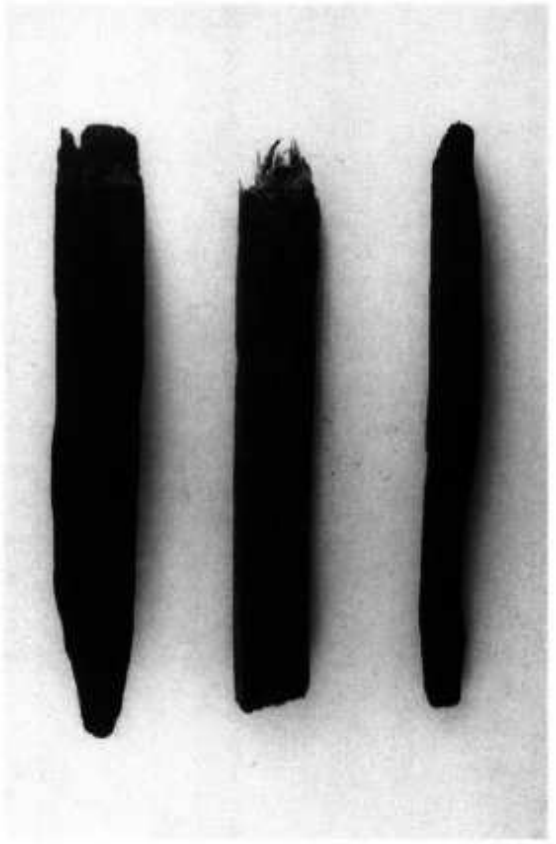


HED　杭列1木杭

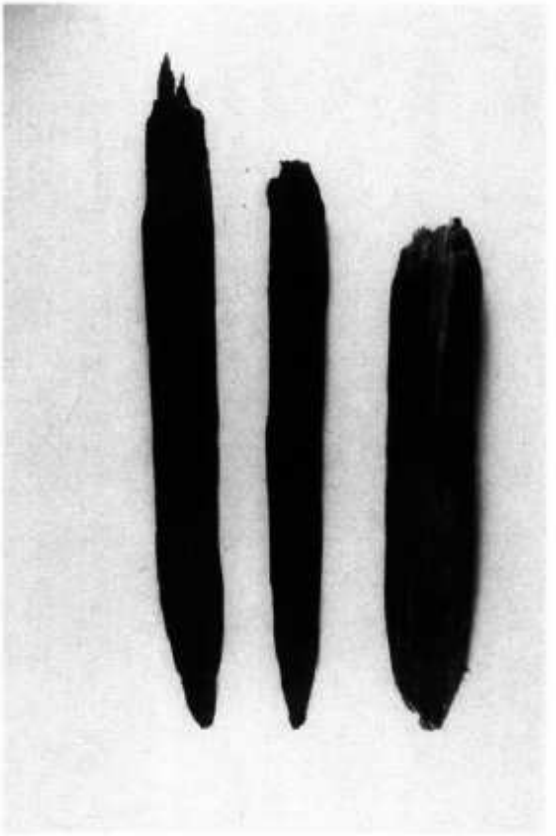


HED　杭列2木杭

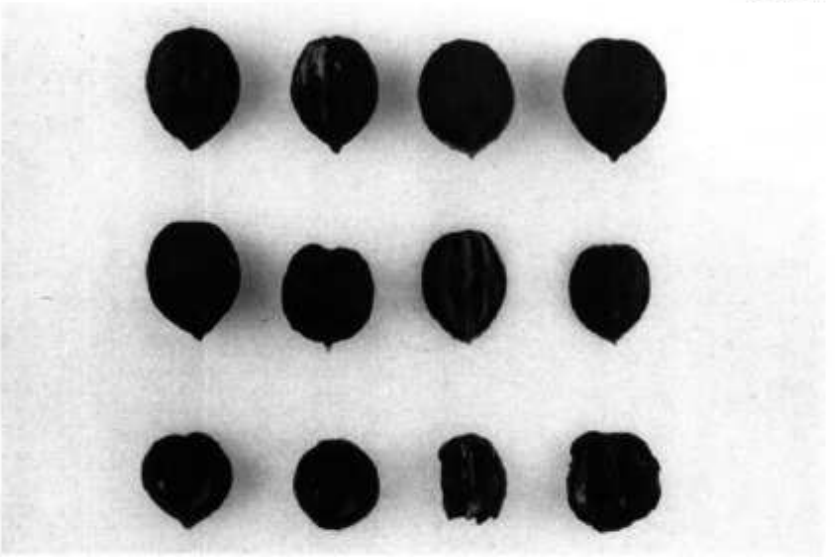
図版46



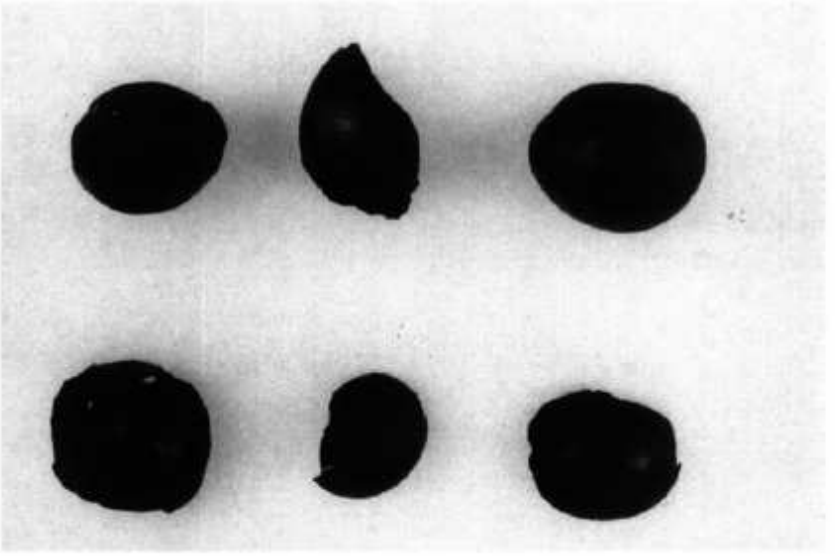
ＨＥＤ　杭列２木杭



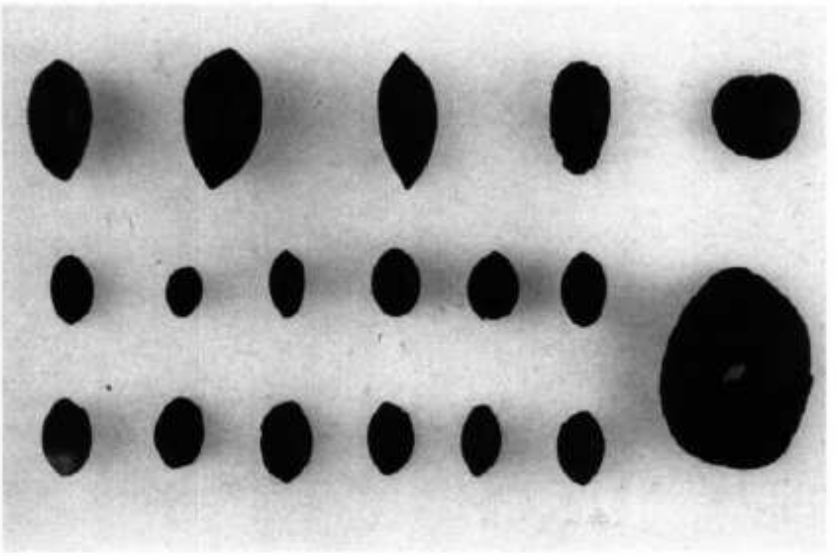
ＨＥＤ　杭列２木杭



HED　出土クルミ



HED　出土クリ



HED　出土種子類

図版48

HED　調査スナップ

HED　現地見学会スナップ

後　　記

土地改良総合整備事業南条地区の施工は昭和60年度に開始され、60・61年度に下田圃工区、62年度に中部工区、63年度に大南工区の順に４ヶ年をかけて完了しました。下田圃工区では棚田遺跡、中部工区では一丁田遺跡、大南工区ではヒエ田遺跡が部分的に影響を受けるもので、事前に埋蔵文化財発掘調査を実施しました。なお61年度棚田遺跡発掘調査から国県の補助事業として発掘調査をしてきましたが、61年は単年調査、62年の一丁田遺跡・63年のヒエ田遺跡を継続事業として、記録保存を図ることにしたものです。60・61年の棚田遺跡発掘調査については既報の棚田遺跡Ⅰ、棚田遺跡Ⅱに著わし、本書では62年の一丁田遺跡、63年のヒエ田遺跡をあわせて報告しています。

現地は当該事業の施工後も農業用地として利用されるので耕作への影響も最小限にとどめる必要があり、その調整が不可欠ですが地元地権者組織の理解と協力をはじめ、事業担当の産業課の努力や、天候にも比較的に恵まれて、概ね順調に調査を進めることができ大変ありがたいことでした。

特に最近の発掘調査が円滑化の傾向にあることは、地権者組織への啓蒙、広報活動、発掘調査現地見学会の開催、歴史民俗資料館の発掘調査特別展の開催などの企画実施により、地域に埋蔵文化財に対する認識が深まってきたためと思われます。又この発掘調査をはじめ他の調査を実施する体制についても「上郷町埋蔵文化財調査委員会」を組織し、調査の円滑な推進を計ることにしたこと、発掘担当学芸員の採用等調査団組織を拡充したこと等一定の条件を整えることにより、日程的物理的な困難を克服して当初目標の調査が実施できました。

今回の調査結果は本書に記録したとおりですが、出土遺物等得られた多数の資料は後世のため学術的な資料としても大切に保存し伝えるべきで、考古学上大いに役立つものと信じます。

末尾ながら、この発掘調査のため献身的にあたられた今村調査団長をはじめ調査員、調査補助員、発掘作業整理作業に従事していただいた皆さんのご尽力、県教育文化課や研究者の皆さんの御指導と御協力、地元土地所有者耕作者の御理解等、それぞれのお立場においての御支援に対し深甚の感謝を申しあげます。

平成元年３月20日

上郷町教育委員会

上郷町埋蔵文化財発掘調査報告書　第15集

一丁田・ヒエ田遺跡

－土地改良総合整備事業南条地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成元年３月20日　印　刷
平成元年３月31日　発　行

編集・発行／長野県下伊那郡上郷町教育委員会
長野県下伊那郡上郷町飯沼3,092
印　　刷／株式会社　小松総合印刷所
長野県伊那市美篶下川手